勝本町文化財調査報告書第７集

串山ミルメ浦遺跡

——第２次調査報告書——

１９８９

長崎県勝本町教育委員会

勝本町文化財調査報告書第７集

串山ミルメ浦遺跡

——第２次調査報告書——

１９８９

長崎県勝本町教育委員会

発刊によせて

今何故、古代史ブームなのか。

このことは、とりもなおさず古代が科学的に解明され、古代の人達の生活や祭りごとが赤裸々に現代に映し出されるからです。

「考古学」もまた物理的な立証によりその研究が著しく前進していることは周知のとおりです。最近話題を呼んでいる吉野ヶ里遺跡の共同墓域からは弥生時代の人々の骨が1カ所から300躰以上も発見され、同時に墳丘墓からは大陸製の把頭飾つき有柄銅剣や細形銅剣などが出土し、時ならぬ吉野ヶ里ブームをまき起こしています。これらの考古学的発見が、今後ますます古代への探究や、古代にロマンを求めての古代史研究を進めてゆくものと思われます。

今回、串山ミルメ浦遺跡で発見された「亀卜甲」は、古代における壱岐の人達、また壱岐島の古代のありようを知り、特に奈良時代以前の中央権力と壱岐のかかわり合い、また中国大陸との関係を知る上で貴重な発見といえます。

平成元年3月

勝本町長　**菅　田　一　郎**

発刊にあたり

昭和63年10月から11月にかけて勝本町東触に所在する串山ミルメ浦遺跡を発掘調査した。

発掘調査は予想以上の成果をあげた。その結果、串山ミルメ浦遺跡は古代壱岐国の特異性を物語る重要な遺跡となった。

『延喜式』に朝廷が亀卜のたくみな壱岐・対馬・伊豆の卜術者を朝廷の卜部として取った、とある。今回の調査で、この亀卜に使われた亀卜甲が15個体出土した。これは全国最多量の出土数であり、旧伊豆国間口洞窟遺跡(神奈川県三浦市)、対馬上県町志多留貝塚につぐ全国で3カ所目の出土地となった。

発掘調査には思いがけない事がおきるものである。今回も出土品の質の高さ、量の多さに驚きの日々を送った。発掘予定日が矢のようにすぎ去り、町当局には経費的に多大の御理解をいただくこととなった。

最後に調査を担当された長崎県文化課の安楽勉、町田利幸の両氏、報告書に玉稿を賜った長崎大学医学部助教授・松下孝幸先生、壱岐郷土館長・横山順先生に心より感謝を申しあげたい。

平成元年3月

勝本町教育長　森　山　　浩

例　　言

1．本書は、昭和63年度、国および県費補助を受けて実施した長崎県勝本町所在の、串山ミルメ浦遺跡緊急発掘調査の報告書である。

2．調査は勝本町教育委員会を調査主体とし、長崎県文化課が調査を担当した。

3．本書の記録は、安楽、町田が分担して行い、長崎大学医学部分部哲秋先生、壱岐郷土館長横山順先生の玉稿をいただいた。

4．調査時における人骨の取りあげについては、長崎大学医学部解剖学第二教室助教授松下孝幸先生にお願いし、同教室に保管されている。

5．出土遺物、および実測図、写真については、県文化課が保管の任にあたっている。

6．本書の写真撮影、編集は安楽による。

調査関係者

勝本町教育委員会

教育長　森山　浩

総務係長　須藤　資隆

長崎県教育庁文化課

調査係長　田川　肇

主任文化財保護主事　安楽　勉（調査担当）

文化財保護主事　町田　利幸（調査担当）

調査協力者

壱岐郷土館長　横山　順

福岡市歴史資料館　塩屋　勝利

本　文　目　次

I　調査に至る経緯……1　（安楽　勉）

II　遺跡の立地と環境……2　（　〃　）

III　調　　査

1　調査概要……5　（　〃　）

2　土　層……6　（町田利幸）

3　遺　構……9　（安楽　勉）

(1)　住居跡……9　（町田利幸）

(2)　炉　跡……14　（　〃　）

①　1号炉跡……14　（　〃　）

②　2号炉跡……14　（　〃　）

(3)　石組カマド跡……14

①　1号石組カマド跡……14　（安楽　勉）

②　2号石組カマド跡……17　（町田利幸）

(4)　配石遺構……18

①　1号配石……18　（　〃　）

②　2号配石……18　（安楽　勉）

(5)　土　壙……20　（町田利幸）

(6)　その他の遺構……20　（　〃　）

4　遺　物

(1)　土　器……23　（　〃　）

(2)　亀　ト……39　（安楽　勉）

(3)　骨角器……42　（　〃　）

(4)　金属器……49　（　〃　）

(5)　装飾品……52　（　〃　）

IV　ま　と　め……53　（　〃　）

―附　編―　　壱岐のト部……55　（横山　順）

長崎県勝本町串山ミルメ浦遺跡出土の古墳時代小児骨……65　（分部哲秋　松下孝幸　佐伯和信）

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図……2
第２図　串山半島周辺の遺跡……3
第３図　調査区域図……5
第４図　土層実測図（1/60）……7．8
第５図　遺構配置図……7．8
第６図　１号住居跡上面遺物出土状況図（1/60）……9
第７図　１号住居跡実測図（1/40）……10
第８図　１号住居跡北壁土層実測図（1/40）……11
第９図　１号住居跡出土遺物実測図①（1/3）……12
第10図　〃　②（1/4）……13
第11図　１号炉跡実測図（1/20）……15
第12図　２号炉跡　〃　（1/20）……15
第13図　１号石組カマド跡実測図（1/30）……16
第14図　２号石組カマド跡　〃　（1/30）……17
第15図　１号配石実測図（1/60）……18
第16図　２号　〃　（1/40）……19
第17図　１号土壙実測図（1/30）……20
第18図　不明集石遺構図（1/30）……21
第19図　焼土遺構（1/30）……21
第20図　土師器実測図①（1/3）……24
第21図　〃　②（1/3）……25
第22図　〃　③（1/3）……26
第23図　須恵器実測図①（1/3）……27
第24図　〃　②（1/3）……29
第25図　〃　③（1/3）……30
第26図　ヘラ記号の須恵器拓影……31
第27図　その他の土器実測図①（1/3）……32
第28図　竈実測図（1/4）……33
第29図　亀ト実測図（2/3）……40
第30図　骨角器実測図①（1/2）……43
第31図　〃　②（1/2）……44

挿　図　目　次

第32図　骨角器実測図③（½）……46
第33図　〃　④（½）……47
第34図　金属器実測図①（½）……50
第35図　〃　②（½）……51
第36図　装飾品実測図（½）……52

表　目　次

表１　串山半島周辺の遺跡地名表……3
表２　串山ミルメ浦遺跡１号住居跡土器計測表……13
表３　串山ミルメ浦遺跡・土師器観察表……34
表４　串山ミルメ浦遺跡須恵器観察表①……35
表５　〃　②……36
表６　〃　③……37
表７　串山ミルメ浦遺跡把手計測表……38

図 版 目 次

図版１　遺跡遠景および近景……77
図版２　土層……78
図版３　１号住居跡遺物出土状況および土層……79
図版４　１、２号石組カマド跡検出状況……80
図版５　１号配石遺構……81
図版６　２号配石遺構および１号炉跡……82
図版７　遺物出土状況……83
図版８　１号土壙人骨出土状況……84
図版９　土器出土状況……85
図版10　骨角器および亀ト出土状況……86
図版11　金属器出土状況……87
図版12　調査風景……88
図版13　１号住居跡出土の遺物……89
図版14　土師器①……90
図版15　〃　②……91
図版16　須恵器①……92
図版17　〃　②……93
図版18　須恵器、その他の土器……94
図版19　把手、その他の土器……95
図版20　亀ト……96
図版21　骨角器①……97
図版22　〃　②……98
図版23　海獣骨……99
図版24　金属器①……100
図版25　〃　②……101
図版26　Fuji Computed Radiography（CR）画像処理の金属器……102
図版27　対馬各地に伝わる亀ト資料……103

Ⅰ　調査に至る経緯

壱岐島最北端に位置する串山半島は、天ケ原の礫丘で陸繋化している。さらに北側の海岸に沿って約400mの所に砂浜が南北に孤を描いている。外海は東風が吹くと、荒浪が押し寄せるが、内海は入江が深く波静かで古くは海松目（ミルメ）と呼ばれ、弘仁七年（816）壱岐に二関と十四所の火立場が置かれ、その見目（みるめ）の関に比定されている所でもあり、壱岐名勝図誌[註1]にも描かれている。このあたりは白砂青松の地でもあったらしく、地名は東触字白濱辻・字小串である。

遺跡の発見は、古くは大正年間、地元の松本友雄氏の研究に始まり、その後、東端の崖面が風化のため自然崩壊したおり、貝殻が散乱していたのを内山芳明によって、串山貝塚と報告されたのに始まる。またミルメ浦では、干潮時になると土器の破片などが採集され、特に甑の把手が多いことで注目されていた。昭和54年海岸に道路の取り付け工事が行われ、若干削られた南西側からも、貝殻などが発見され、弥生式土器、土師器、須恵器、陶質土器や骨製ヤスなどの遺物も多く採集された。そのため勝本町では、壱岐北端に位置する古代漁民の様相を知る手がかりを得ることができるのではないかという認識を得るに至り、その調査を九州大学に依頼した。この時点で遺跡の名称は串山ミルメ浦遺跡と改められている。

調査は昭和55年10月16日から同月26日の期間で実施された。この時は砂丘の西側寄りと海浜部に調査壙が設定され、いわば試掘調査の形がとられた訳である。この時点では、6世紀後半から8世紀前半にかけての遺物が出土している。なかでも把手と、アワビ、サザエ、サメの出土が顕著なことから、古来より潜水漁法を行う海人の遺跡であるとされた。この成果については昭和60年報告書が刊行されている。

以上が第1次調査に至るまでの経過である。その後、昭和62年に砂丘上に畑地を所有している地主から、西側に傾斜している畑を水平に地ならししたいという要望が出された。町教育委員会では、先の調査で遺物が出土していることもあり、畑造成予定地860m²について発掘調査を行うことになり、国・県の補助金を受けて調査を実施することになった。

事業主体は勝本町教育委員会が、実際の発掘調査は県文化課が主体となり、昭和63年10月13日～11月17日まで実施した。

調査では亀卜の出土や予想以上の遺物包含層の検出があったため、遺跡の保存を第一に考え、地主の協力を得て最小限の造成にとどめた。

註1　壱岐名勝図誌　後藤正恒　名著出版　1975

II　遺跡の立地と環境

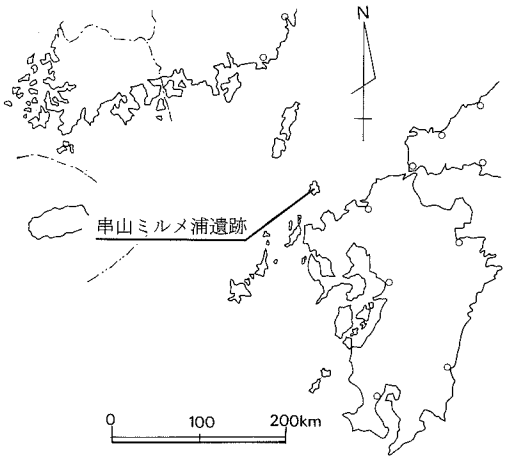
壱岐島は、九州と朝鮮半島の間にあり、古くから対馬と並んで大陸文化の伝播ルートに重要な役割りを果してきた。朝鮮半島南岸の釜山から、対馬北端まで60km、対馬南端から壱岐まで50kmたらず、九州本土最端距離の佐賀県呼子まで25kmたらずであり、それぞれの間は眺望がきく。

現在は、交通の便は壱岐―博多間、壱岐―呼子間、博多―壱岐―対馬間のフェリーボート、壱岐―博多間、壱岐―長崎間の空の便も活発で、観光地としても脚光をあび、「離島」に連想される不便さなど感じるすべもない。

壱岐本島は、東西約14km、南北約17kmの島で、まわりには大小29の属島があり、面積は合わせて139km²である。行政的には長崎県壱岐郡を構成し、勝本町・石田町・芦辺町・郷ノ浦町が含まれ、郷ノ浦町に長崎県壱岐支庁が置かれている。島内の農村集落は一般に「触」（ふれ）とよばれ、典型的な散村集落をなしている。海岸の集落は「浦」とよばれ、沿海集落をなしている。漁港は北端の勝本港、東海岸の芦辺、南東海岸の印通寺、西南海岸の郷ノ浦などである。まわりの海岸線は屈曲にとみ、特に西海岸には溺谷状の深い入江がある。島の基盤は第三紀層で、表面は玄武岩におおわれた、島全体が標高100m前後の低平な溶岩台地となっている。険しい山が少なく島の最高峰岳ノ辻でも213mである。この山は、火山砕屑丘で、火口の原形が保たれている。

島の分水嶺は西に偏り、主要河川は、南に河足９kmの幡鉾川が東流し、北には谷江川が芦辺浦に注ぐ程度である。西海岸の湯野本湾から東南端の石田町に向けて、島の中央を横切る低地帯があり、島内唯一の穀倉地帯となっている。

島内には数多くの遺跡が見られる。近年になって先土器時代や縄文時代の遺跡も発見され調査が行われるようになってきた。弥生時代の遺跡もカラカミ遺跡や原ノ辻遺跡に代表されるように古くから知られ、調査が行われている遺跡も多い。なかでも一番多くを占める遺跡は古墳の存在である。現在263基が確認され、県下の古墳の中で約62％を占めている。



第１図　遺跡位置図

本遺跡の立地する勝本町は、島の北西部を占め、総面積30.42km²である。町の中心は北端に位置する勝本浦で、対岸に位置する

第２図　串山半島周辺の遺跡

表１　串山半島周辺の遺跡地名表

番号	名称	種別	時代	所在地
1	辰之島遺跡	遺物包含地	古墳	東触（辰ノ島）字恵美須山
2	若宮島石棺群	墳墓	弥～古	〃（若宮島）字遠見
3	草宮島遠見番所跡	番所跡	近世	〃　〃　〃
4	若宮島烽火台跡	烽火台跡	〃	〃　〃　字鬼川原
5	名鳥遺跡	遺物包含地・貝塚		〃（名鳥島）字中山
6	串山ミルメ浦遺跡	〃	縄～奈	〃（串山）字白浜辻・小串
7	串山古墳群１号墳	古墳	古墳	〃（〃）字口細辻
8	〃　２号墳	〃	〃	〃（〃）〃
9	〃　３号墳		〃	〃（〃）〃
10	〃　４号墳	〃	〃	〃（〃）〃
11	〃　５号墳	〃	〃	〃（〃）〃
12	〃　６号墳	〃	〃	〃（〃）〃
13	〃　７号墳	〃	〃	〃（〃）〃
14	大岳城跡	城跡	中世	〃（〃）字黒瀬
15	天ケ原遺跡	遺物包含地	弥～古	〃（天ケ原）字菖蒲坂
16	セジョウ神遺跡	銅矛出土地	弥生	〃（〃）〃
17	天ケ原石棺群Ａ地点遺跡	墳墓	弥～古	〃（〃）〃
18	天ケ原千人塚	積石塚	中世	〃（〃）〃
19	天ケ原石棺群Ｂ地点遺跡	墳墓	古墳	〃（〃）字赤岩
20	小高瀬古墳	古墳	〃	〃字小高瀬
21	イチオジロウ城跡	城跡	中世	〃字高尾
22	烽山烽火台跡	烽火台跡	近世	〃字火山
23	中尾古墳	古墳	古墳	〃字中尾
24	本浦城跡	城跡	中世	仲触字町ノ崎
25	地命寺跡	近世	近世	西戸触字嶋ノ神
26	地命寺城跡	城跡	中・世	〃　〃
195	オオタキ遺跡	墳墓（石棺）	弥・古	東触字小串
196	猿浦遺跡	遺物包含地	古墳	〃字串山
197	クサリガ浦遺跡	〃	〃	〃字黒瀬

辰ノ島、若宮島、名烏島、串山半島が自然の防波堤の役割を果し、良好な漁港を備えている。

かつて平戸松浦藩政の時代は、捕鯨の中心として勝本土肥組が活躍し、壱岐捕鯨の名を高めている。しかし往時の面影をとどめるものは今はないが、漁船の数の多さでは目を見張るものがあり、イカ・ブリ漁などが盛んで県内でも有数の漁獲高は古来からの伝統が受け継がれている感がある。

串山半島一帯は遺跡が集中しているが、海岸に沿った地区は平地に乏しく、生活跡としての遺跡は見られない。しかし天ケ原に石棺群が見られるすぐ近接の海岸からは、中広銅矛が3本出土している。半島の入江状になったわずかな凹地にはクサリガ浦遺跡、口細浦遺跡、猿浦遺跡が点在し、土師器や須恵器片が採集されている。また標高72mを計る半島の尾根中央部には円墳を主体とした集ノ辻古墳群が位置する。この円墳には横穴式石室を擁するものも含まれる。

串山ミルメ浦遺跡は半島の北東部、天ケ原から小串に延びる海岸からさらに半島状に突出した根元の砂丘上に位置する。昭和54年海岸沿いに道路が取り付けられたが、以前は吃立った崖をはうようにして、干潮時を利用しなければ通れず、通常は尾根づたいに小道が開かれているにすぎなかった。

砂丘上は現在大半が私有地となり北側が畑地として利用され、南側は荒地となり、一部は県指定の天然記念物の砂浜性ハイビャクシンの自生地にもなっている。東の外海から吹きつける風は強く、以前から較べると、砂丘もかなりの侵食を受けている。西はミルメ浦の湾口が長く伸びる入江で、博多瀬戸に連なっている。ミルメ浦は別名イルカ池とも呼ばれているが、これは明治から昭和初期にかけてイルカを捕獲し、湾口部および中央部に石垣の塞止め堤を残している。この石垣には集ノ辻古墳の石室の天井石なども割って使用したと伝えられている。現在この湾ではイルカが綱で仕切られて飼育され、観光に一役買っている。

干潮時には約100mの幅で干潟部が出現する。この周囲では土器片なども採集され、先の調査では、海中に没する試掘壙から異常に大きなアワビの出土も確認されており、遺跡の拡がりが、広い範囲に及ぶことも指摘されている。遺跡北側の山中にも箱式石棺1基があり、南側の砂丘の基部でも土器や貝殻が出土していることは、時代の流れとともに遺跡の拡がりも示していることになる。

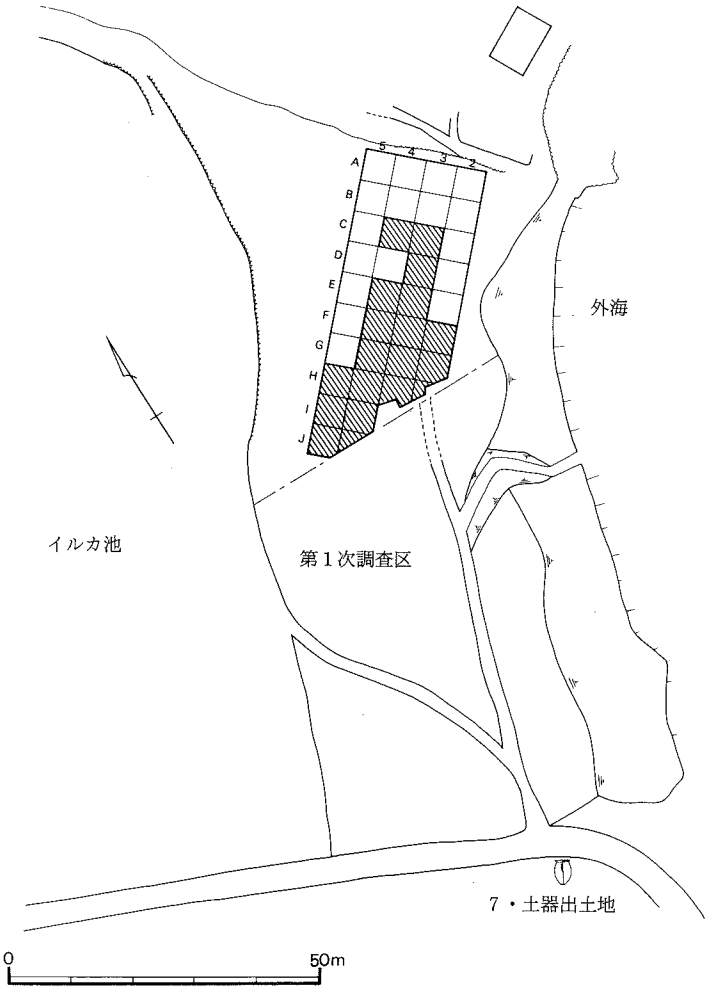
Ⅲ 調　　査

1．調査概要

調査区の畑は東から西へ傾斜しているため、東側を切り落し、西側の低い部分に土盛して平担部を広げる個人の土地改良事業であるため、予定区の860m²について調査計画をたてた。

畑の東端は、波浪の強い時は影響を受けるため、荒地の部分になっている。調査区はその内側に設定し、５ｍ×５ｍのメッシュに区切り、北から南へＡ～Ｊ、西から東へ２～５の記号を付した。当初の調査計画は第１次調査の結果を参考にしたが、前回の調査が砂丘中央から、南を主体として行われたのに対し、今回は、それより北側を対象とした結果、遺構、遺物は前回をはるかに上回るものとなった。しかも亀卜や鉄製品、住居跡、厚い堆積の貝層などの出土状況は、これまでの遺跡に対する評価を改めて捉え直すことになった。豊富な出土遺物のため調査は進展せず、そのため地主に工事計画の見直しをお願いし、出来るだけ保存を考えた。土層の記録はＣ列、Ｆ列の北壁および、３列東側を取り、住居跡、石組カマド跡なども1/10および1/20の記録を行い、遺物の出土についても平板実測によるドットを行った。

調査は11月17日に終了し、遺構などについてはそのまま埋め戻した。



第３図　調査区域図

2．土　　層

堆積状況は砂地のため層が複雑でとらえにくく、調査箇所によっては、表土を剝ぐと貝層が現われる地区があった。また乾燥すると色調も明確さを欠き、そのなかでブロック状に黄色バイラン土と貝層及び焼土塊が散在する。

1層；表土層―水仙、家畜飼料がつくられている。

2層；明黄褐色砂層―亀卜や土器の出土があった。

3層；この層に遺物の多くが含まれ、大きく3層上部、中部、下部で時期的な差が考えられる。また、前述したように、複雑な堆積状態であったため、細かい土層の分類が必要であり、3a～3gの7層に色調、砂質、遺物などによって分けた。

3a層；黄褐色砂層―固いバイラン土壌で赤色をした2cm程度の小礫が多く混入。

3b層；暗褐色破砕貝砂層―H・I・J―4・5区では表土層を剝ぐと、この層が現れた。

3c層；暗褐色砂層―昭和55年調査の九州大学調査のIIIa層に対比される。

3d層；灰褐色砂層―部分的に堆積している。IIIb層に対比。

3e層；明褐色砂層―九州大学調査IVa層にあたり、E―4区東壁に確認したが、ブロック状に入る黄褐色バイラン土に分断されている。

3f層；暗褐色混貝砂層―ほぼ全区を網羅する形で検出している。IVd層に対比され、黒色（G―4区）及び黒味を帯びた暗褐色（E―4、F―4～2区）を呈している。

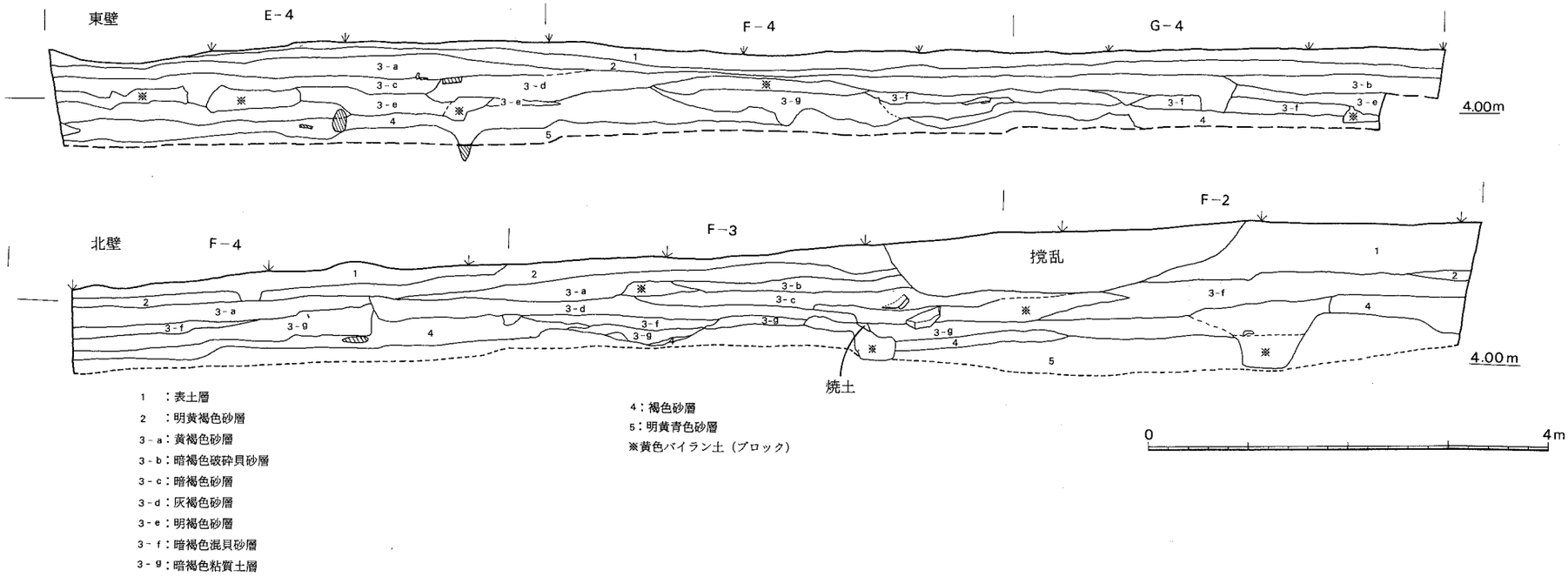
3g層；暗褐色粘質土層―E―4区、G―4区を除く各地区で検出した。厚いところで20cm前後の堆積がある。

4層；褐色砂層―最下層より古墳時代初頭の遺物を出土している。殆ど貝の混入がない。九州大学調査Vb層対比。

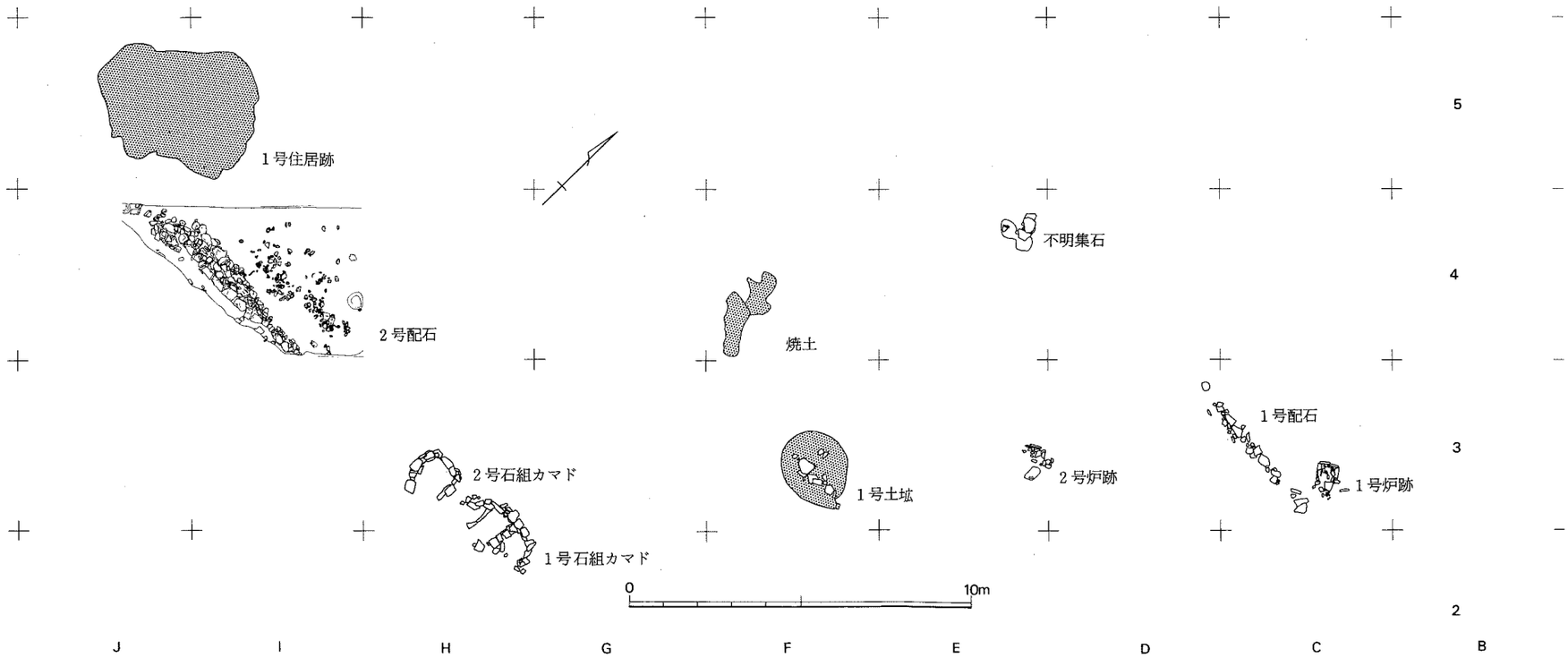
5層；明黄青色砂層―無遺物層。

以上が土層の概略である。

時期的には、4層下部が古墳時代初頭頃に、3d～3g層が6世紀末～7世紀中頃にかけて、2～3b層が7世紀後半～8世紀中頃にかけての遺物を大略包蔵している。



第４図　土層実測図（1/60）



第５図　遺構配置図

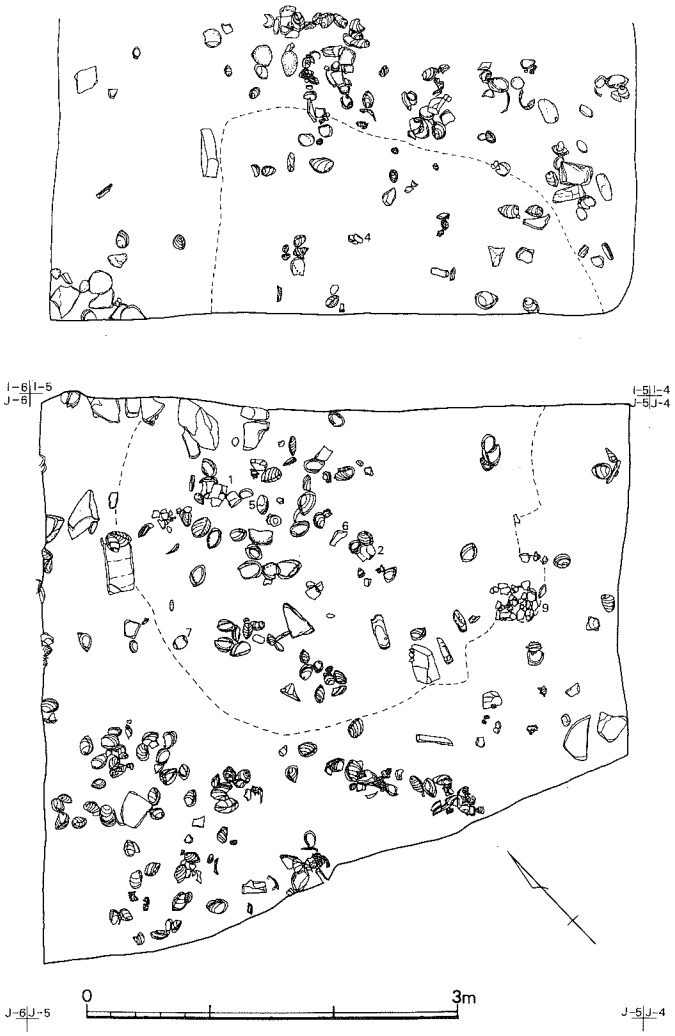
3．遺　　構

調査によって検出された遺構は、住居跡１棟、炉跡２基、石組カマド２基、帯状に石を連ねた配石遺構２基、人骨埋葬の土壙１基、その他性格不明の遺構２基などである。各遺構に関連性は見られず複雑な様相を呈している。当初から最も注目していたのが、把手の多さに見られる干しアワビ製造に関する遺構の存在であった。この点については、焼土と思われる層が所々に確認されたが、全てを面的に把握することは出来なかった。こうした状況は移動式のカマドの存在が大きいと考えられる。カマドの破片は数個体分が得られている。また本格的な石組カマドは、２連式のものと、１連式のものであり、規模の大きさから使用方法について不明な点が残る。以下各遺構について概略する。

(1) 住　居　跡

１号住居跡

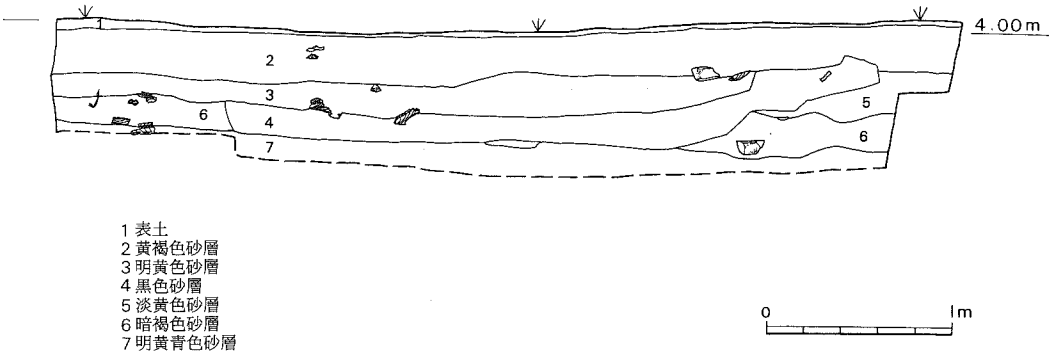
Ｊ－５区の表土層及び２層を取り除いた時点で、黒色砂層が現われた。そのため、Ｉ－５区まで拡張した。その結果（第６図）のような隅丸方形に近いものとなった。次に黒色砂層の掘り下げを行うと土師器、須恵器、砥石、石錘等の遺物が出土した。この他、自然遺物としてアワビ貝、サザエ、クジラの骨等約200点程が出土した。床面直上（第７図）には、甑、把手付甕、甕があった。また甑一括遺物の口縁部付近からは、住居跡中央部へ流れ出たような白色の塊が点々と認められた。焼土は３個所検出したが、柱穴の確認が出来なかった。主軸はＮ－41°－Ｅを示し、最長約



第６図　１号住居跡上面遺物出土状況図（1/60）

第７図　１号住居跡実測図（1/40）

4.7m、幅3.7mのややいびつな隅丸方形のプランとなった。住居跡の土層（第８図）は他の調査区とほぼ同じ堆積状態にあるが、５・６層を削平したうえに他では見られない黒色砂（締まりのないサラッとした砂）が堆積していた。



第８図　１号住居跡北壁土層実測図（1/40）

①；表土

②；黄色砂層（８世紀前半の遺物出土）

③；明黄色砂層（アワビ貝が下部に集中する。）

④；黒色砂層

⑤；淡黄色砂層（３ｅ層に相当する。）

⑥；暗褐色砂層（４層に相当する。）

１号住居出土遺物

１胴部から口縁部にかけ黒色を呈する。内面赤褐色を呈し煤の付着がある。丸底の底部から丸みをもって、頸部に移行し、口縁部はやや外反しながら端部丸くなる。整形は外面頸部より底部にかけて格子目状のタタキを施し、内面は押え工具による年輪状の押型がつく、頸部から口縁部はナデしあげ。

２外面ヘラミガキ行う。内面口縁から頸部までヘラミガキ施し、以下指によるナデ押え行う。口縁直上に浅い沈線を施す。器形は、胴部やや上部に最大径があり、口縁部ほぼ垂直にたちあがる。色調内外面褐色を呈し胎土良好。

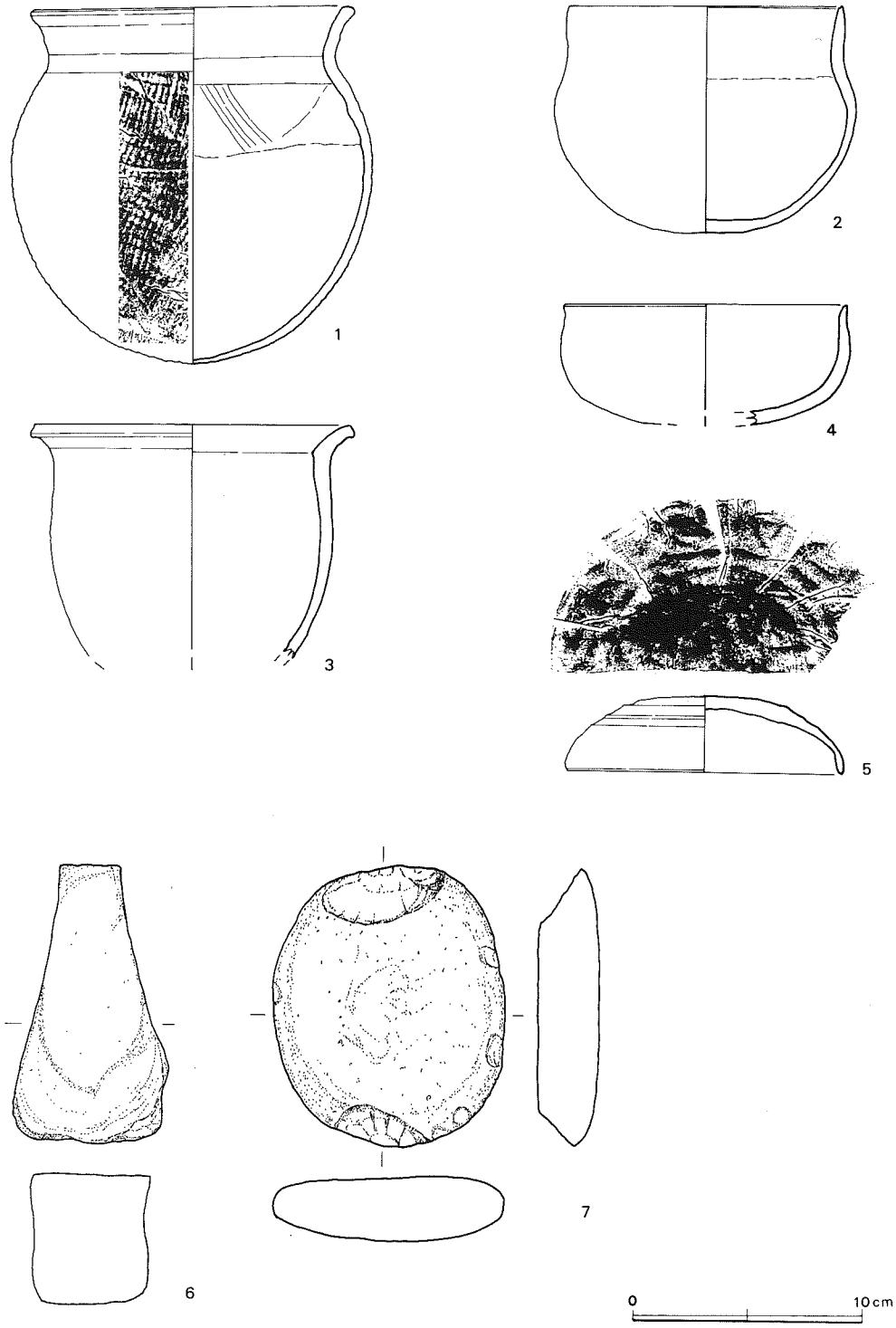
３小形の甕で内外面赤褐色を呈する。胎土粗く（石英粒混入５㎜程）外面ハケ目あり、内面ヘラにより縦位の削り整形。器形は、口縁部くの字状に外反し口縁端部ナデにより方形の断面をなす。

４外面明赤褐色、内面暗赤黄色を呈し胎土良好。焼成ややあまい。体部まるみを持ち頸部でやや外反する。口縁端部まるくなる。

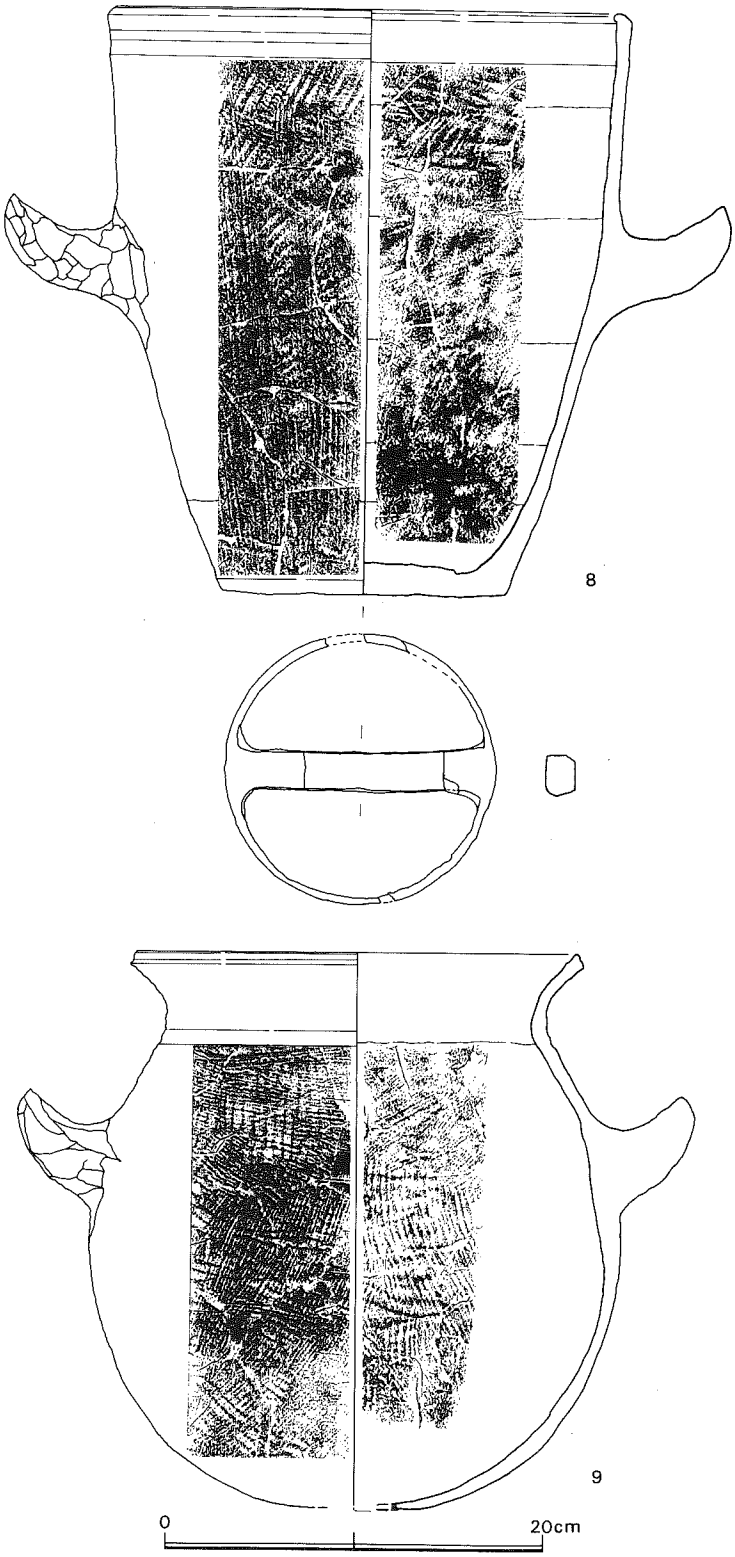
５須恵器蓋。天井部平坦に近いまるみをなす。ヘラ切りは½程行い、左回りの回転である。口縁端部まるくおさめ、天井部から口縁部にかけなだらかなカーブを描く。内面ミズビキ手法。

６砥石。正面及び左側辺を使用し、やや粗い砂岩を使用。

７上下を加撃して使用の礫石錘。安山岩製。



第９図　１号住居跡出土遺物実測図①（⅓）



第10図　1号住居跡出土遺物実測図②（1/4）

表2　串山ミルメ浦遺跡1号住居跡土器計測表

挿図遺物番号	出土区	法量 口径	法量 器高	備考
第9図 1	ミ住J5－6	13.4	15.6	
2	ミ住J5－2	11.9	9.8	
3	ミ住J5－14	13.7		底部欠損
4	ミ住I5－6	12.2		〃
5	ミ住J5－5	11.9	3.3	
第9図 8	ミ住I5－19	26.0	31.2	
9	ミ住J5－1	23.3		

8外面赤褐色、内面暗黄褐色を呈する。底部に一本の橋状をかけたもので口縁部と底部をのぞいて格子目のタタキを加え、内面弧状の押え具痕が残る。輪積によって作成したものか、内面に粘土ひもの凹凸が残る。器形は、底部から内湾気味に口縁部へ達し、口縁端部内側へつまみ出す。把手部ナデ整形で貼り付けた、甑である。

9外面肩部から底部にかけ格子目のタタキを付す。その後ハケによる整形を行う。内面はタタキによる押えが残り、肩部近くハケ目整形を行う。頸部から口縁部へ外反する部分はナデ仕上げ。口縁端部に浅い凹線を巡らす。把手部はナデ整形で貼り付けた甕。

小結

以上が1号住居跡検出及び出土土器である。時期的には（2・4）が他の遺物より古くなるものの、黒色砂層（4層）より須恵器蓋の出土から7世紀前半頃に比定しうる資料である。したがって、床面直上より出土の遺物（3・8・9）もほぼ同時期と考えられる。

(2) 炉　　跡

① 1号炉跡

C－3区グリット東側に検出した。5個の石を立てた状態で長方形に囲っている。中央部の中層下部を7cm程掘り下げる。最長64cm、最幅50cm、長軸でN－53°－Eを示す。覆土の色調は、上部が暗黄色砂（貝混り）。中部がやや赤味をさす。下部暗黄色砂でこれもやや赤味をさす。時期は炉周辺より、有蓋長脚高杯が出土しており、6世紀末から7世紀前半と推定される。

② 2号炉跡

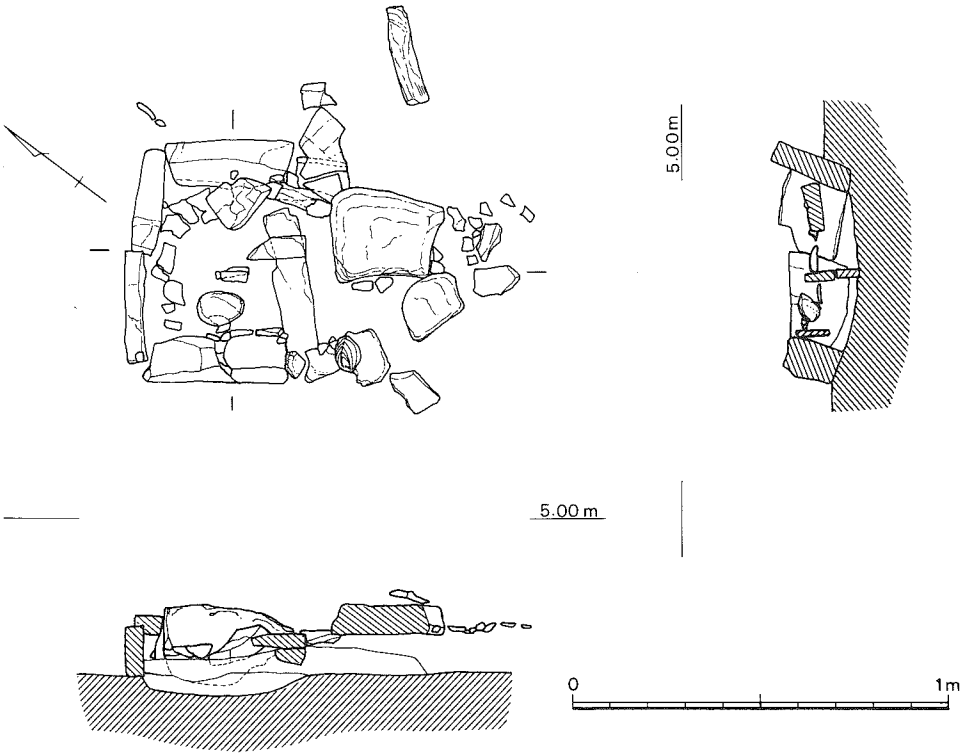
E・D－3区に焼土塊が、その北側に火を受け赤くなった円礫・角礫の集合があった。焼土塊は、最長40cm、最幅30cm程残る。

(3) 石組カマド跡

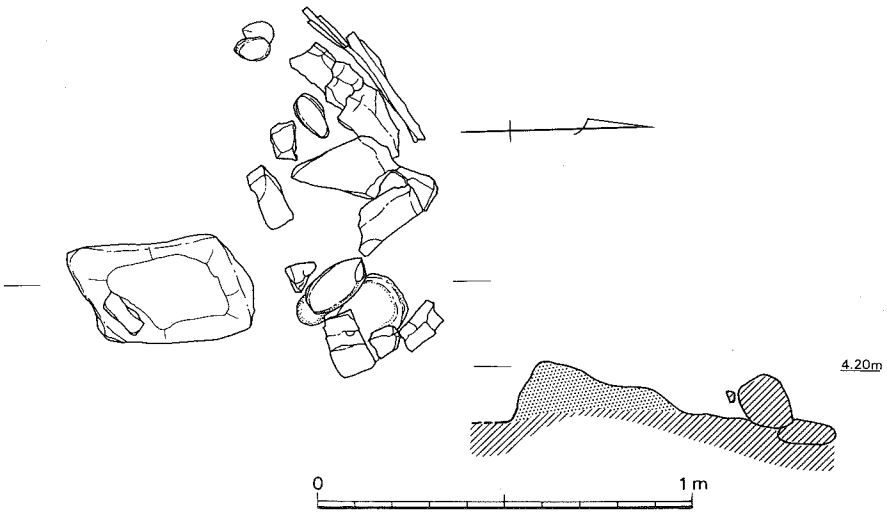
① 1号石組カマド跡

砂丘上のほぼ中央部、南側に1段低くなる地形の北側H－3区に位置する。焚き口を南に向け、すぐ西側には2号カマドが接する。

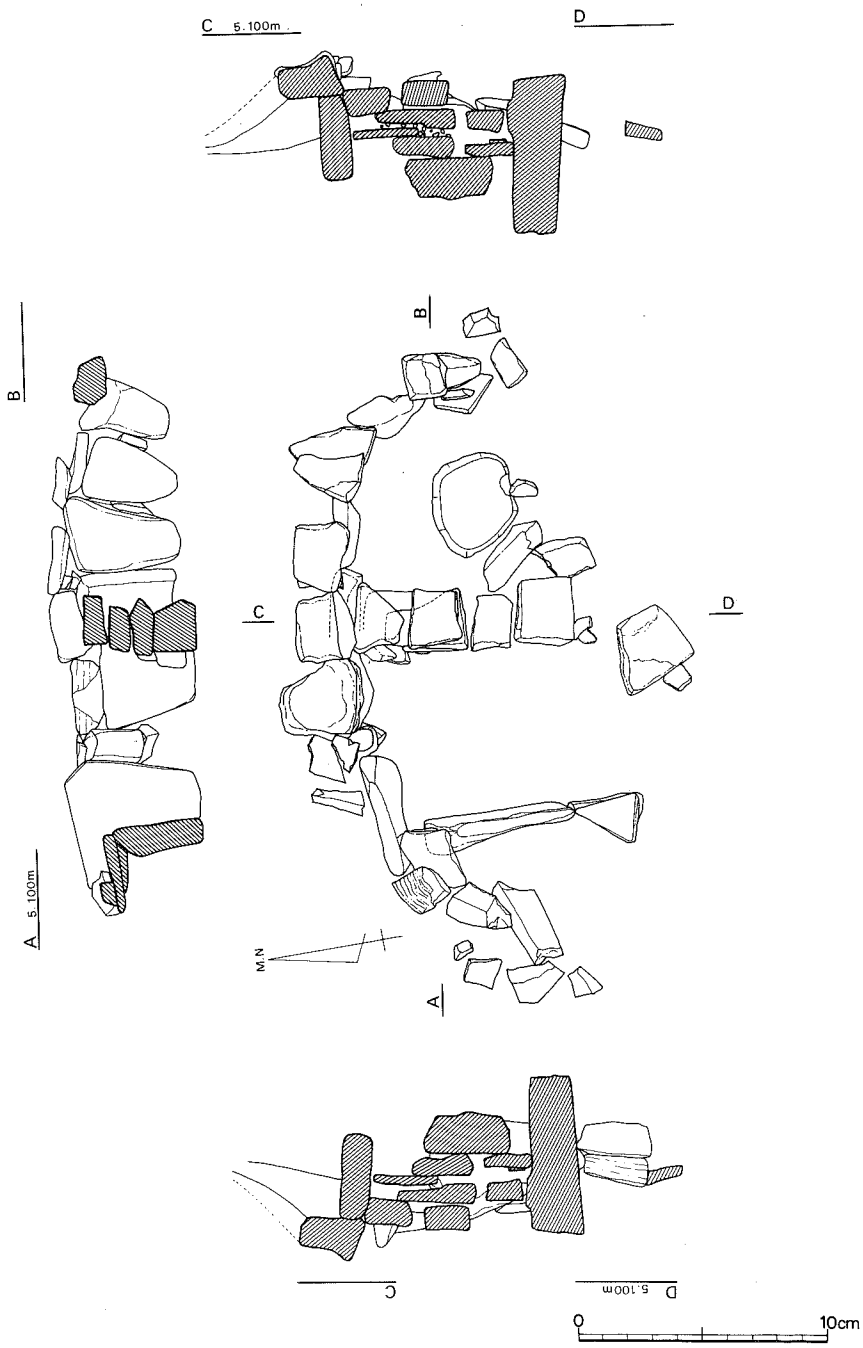
石材は砂岩が用いられ、北壁はタテ、ヨコ50cm、厚さ約10cmの大きな自然礫を隅に置き、さらにひと回り小さな石を並べて立てかけ、上部にはさらに扁平な礫を乗せている。東側の壁は隅丸に並び、西壁はほぼ直角に礫を組み合わせている。中央部には約20cm四方の角礫が4段3列に積み上げられ、左右を2つの区画に区切っている。この中央部の積石の空間部には、小さな風化礫を含む粘土による目張りで補強されている。また一番外側の4列目の礫は方柱状を呈



第11図　1号炉跡（1/20）



第12図　2号炉跡（1/20）



第13図　1号石組カマド跡（1/30）

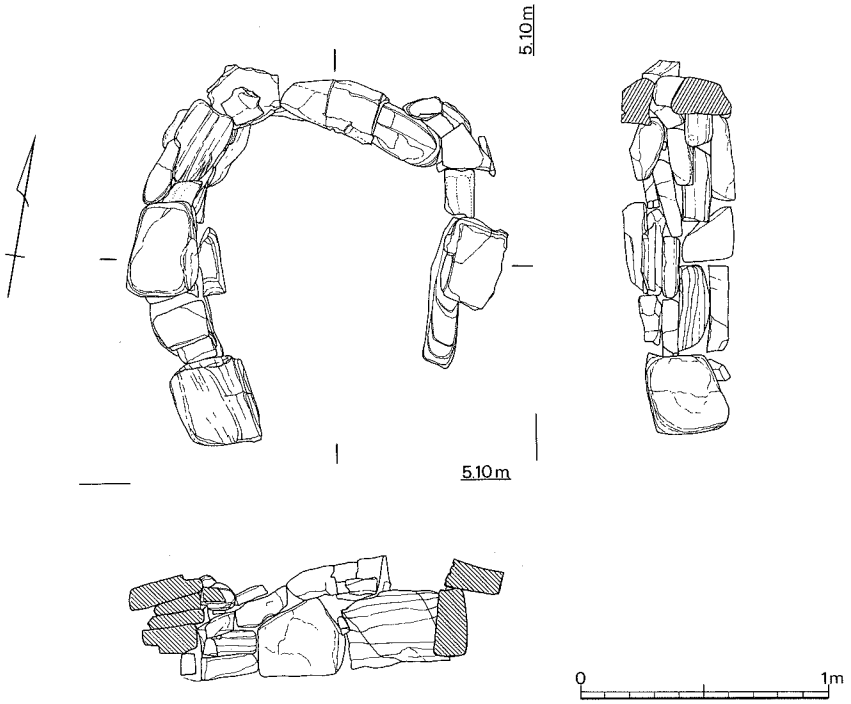
し、他の石が床面から10～15cm深く埋められているのに対し、25cmもあり遺構を頑丈なものにしている。東西の長軸が内径1.7mに対し、短軸である分離帯は約0.9mを計る。

石組の表面観察では、特にすすの付着や焼けた痕跡はないが、床上では焼けた痕が見られる。カマド跡には間違いないと考えられるが、実際の利用については大きなだけに不明な点が多い。

時期的なことについては、遺構の上に混貝土層が乗っていることや、地山層である黄色砂層を掘り込んでいることから、7、8世紀を中心とした遺構ではないかと考えられる。

② 2号石組カマド跡

H－3区東側に検出。馬蹄形のプランを持ち、南側に焚き口を設けている。主軸方位は、N－11°－W。最長1.5m、最幅1.5m、焚き口0.65m、最高0.48m。左側面5段程、30～40cmの扁平な石を積み重ねるが、中央から右側には高さ30cm程の礫を立て、その上を水平にするため1段の礫を積む。床面やや火を受け赤味を帯びる。石と石の隙間には粘質土を充塡する。

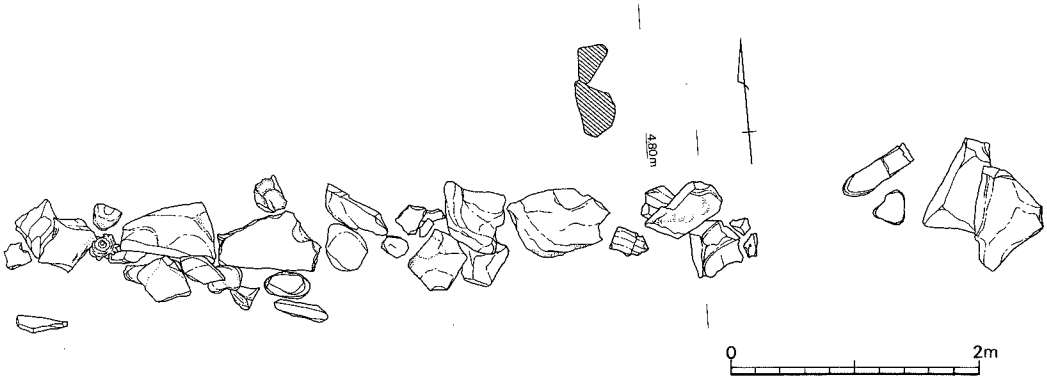


第14図　2号石組カマド跡（1/30）

(4) 配石遺構

① 1号配石

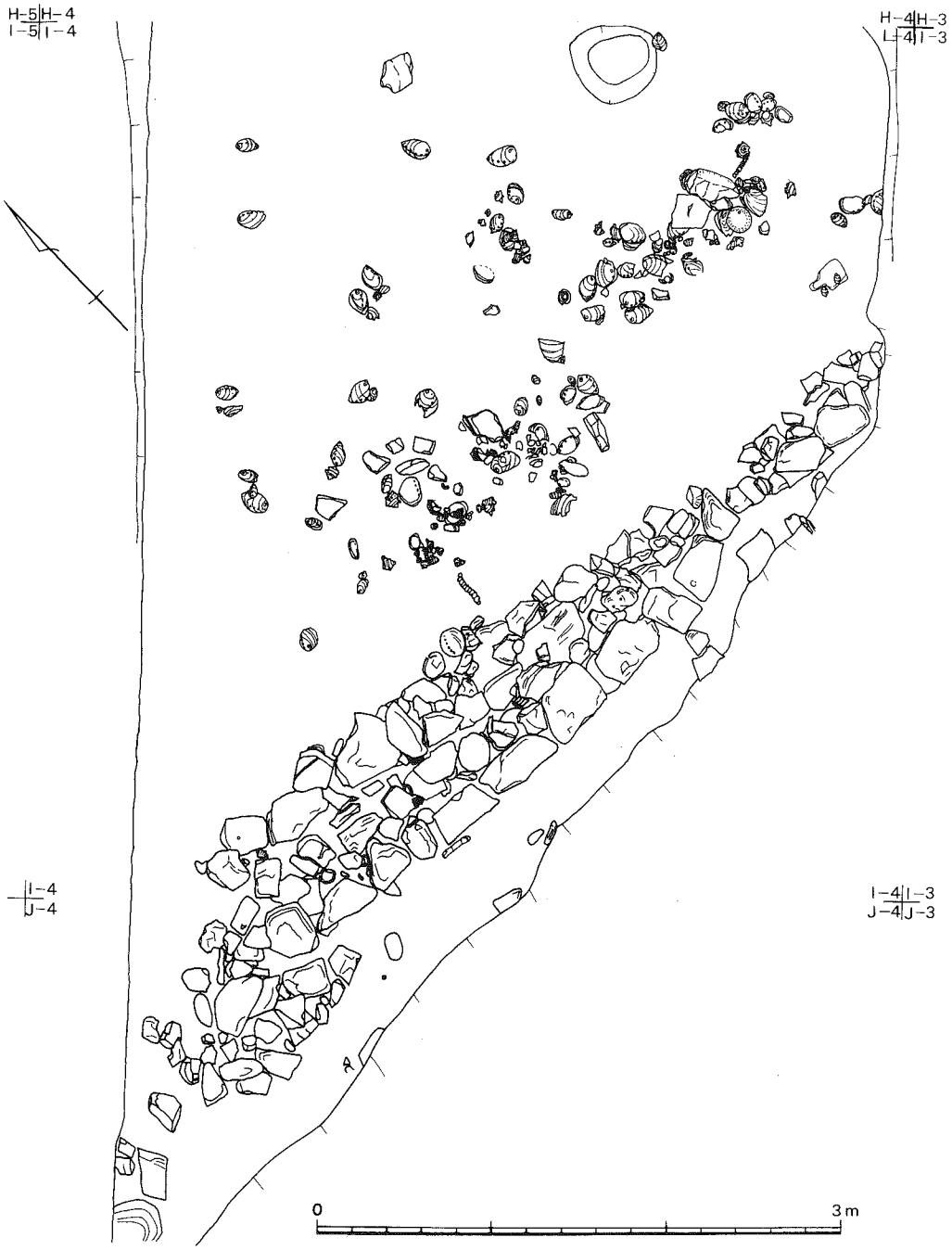
C・D－3区に主軸方位N－87°－Wを示し最長4.9m、幅60cm、程を帯状に礫が配置されている。礫は40cm程の大きさの角礫の周辺に10cm程の小礫を集めて置いたような状況である。検出層は3層上部から中部（黄褐色砂層中にある）周辺の出土遺物から7世紀末から8世紀頃と考えている。



第15図　1号配石実測図（1/60）

② 2号配石

I－4区からJ－4区にまたがり、東西方向に約7mの長さで集石が確認された。表土層を剝ぐとすぐに検出され、石材はほとんどが砂岩質の角礫が多く、中には円礫も見られる。南外側に比較的整った大きな角礫を配し、内側に拳大あるいは大礫を入れている。外側が並んでいるのに対し、内側は乱れ、裏込め石の性格をもつようである。旧状は両側に伸びていたようだが、破壊されたと考えられる。遺構は現状のまま保存したが、石積の間からは土師器や須恵器貝殻や獣骨も出土している。しかし近世陶磁器の茶椀1個と、外側から寛永通宝1枚の出土があった。集石は石垣上に残り、東から西への傾斜に沿って残っている。南側は1段低くなり、現在畑の境界線が走ることを考えれば、それに付随する遺構とも思われるが、地主の話では、そんな存在は知らなかったという。境界でないとすれば、遺物に関連した何らかの遺構とする方が妥当ではないだろうか。

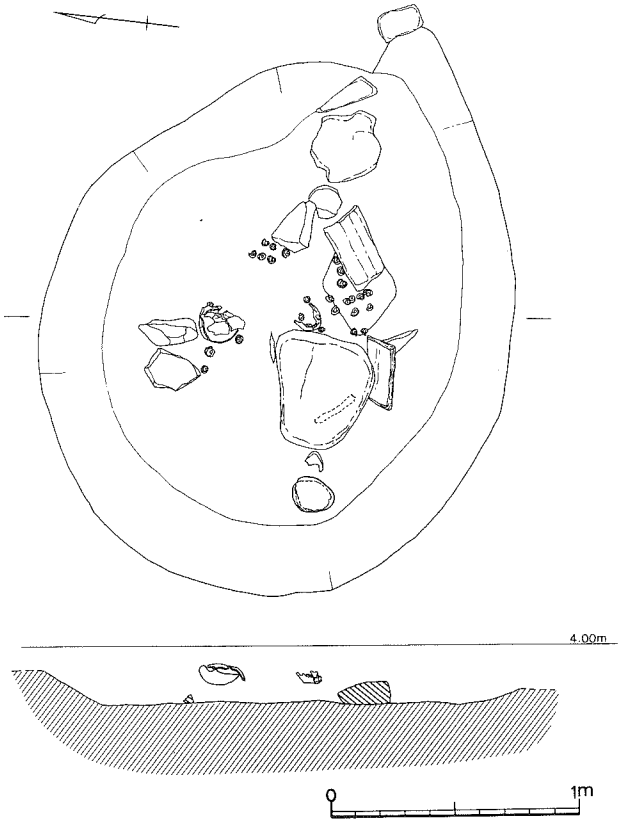


第16図　2号配石遺構実測図（1/40）

(5) 土　　壙

① 1号土壙

F－3区5層無遺物で検出した。覆土には黒色砂が入っていた。プランは楕円形を呈し、主軸方位N－95°－Eを示す。人骨は、頭蓋骨と左大腿骨が残っていた。最長2.40m、最幅1.90mを測る。東西に円礫が並び、中央部頭蓋骨を囲む様に蝸牛があり、その近くに火を受け黒く変色した骨角器が1点出土している。



第17図　1号土壙実測図（1/30）

(6) その他の遺構

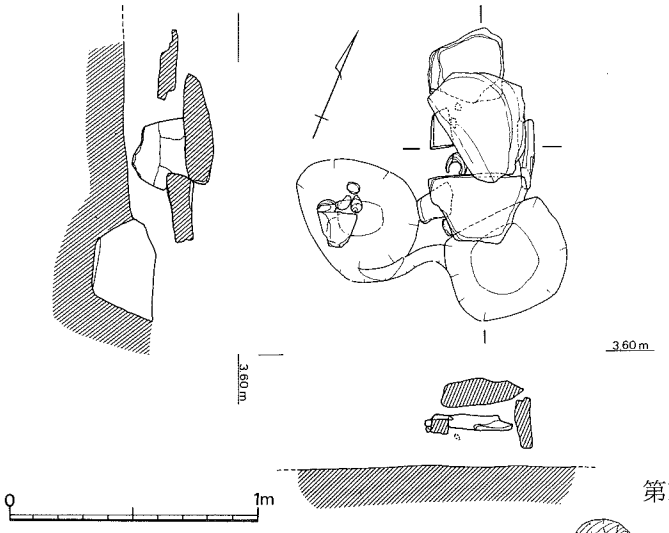
① 不明集石

E－4区北側隅に検出。長軸0.8m、幅0.43mを測る。主軸N－22°－W、長軸方向に2個礫を配

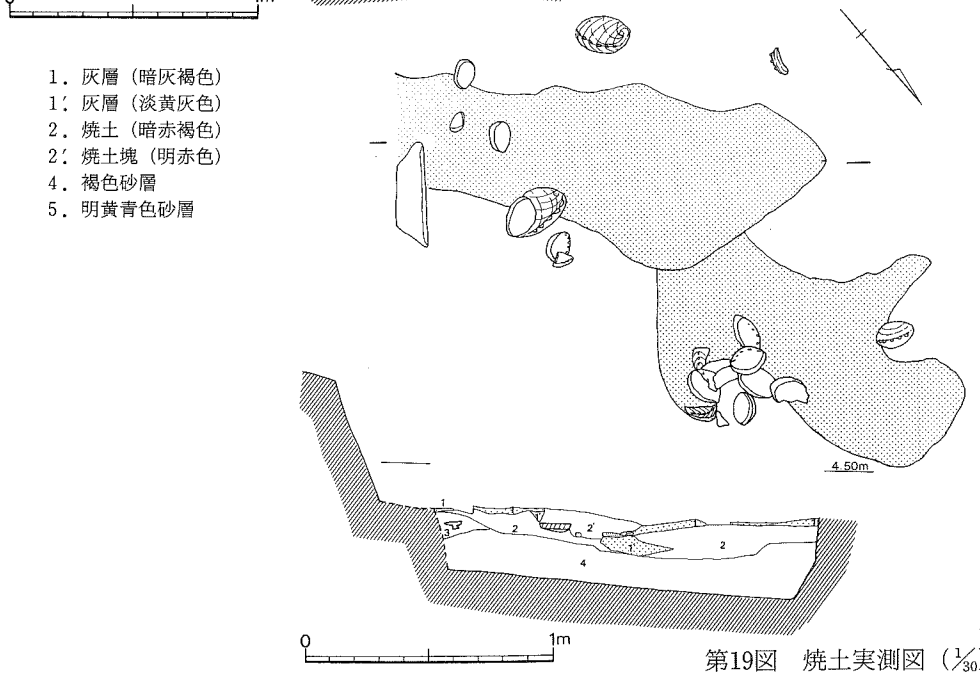
し、西側には直立した礫を置いている。この3個の礫中央部に40cm程の礫を乗せて石棺の様な作りをしていた。しかし、内部からは土師器小片が2点出土したのみで、人骨等の出土は無かった。また、これらの礫をとり除くと、赤褐色のPitが2ケ所あり、その内の西側Pitにはアワビ貝4点と15cm程の礫が出土した。

② 焼土

F－4区南西側に検出。長さ約1.7m、途中より焼土の拡がりが枝別れした状況を呈していた。3層下部から掘込まれた状況で1・1′灰層が残り2・2′に焼土がある。焼土下の4層中より無蓋高杯が出土しており、焼土の使用時期は6世紀後半以降に使用されたと推察される。他にも、各地区で小規模な焼土を検出している。



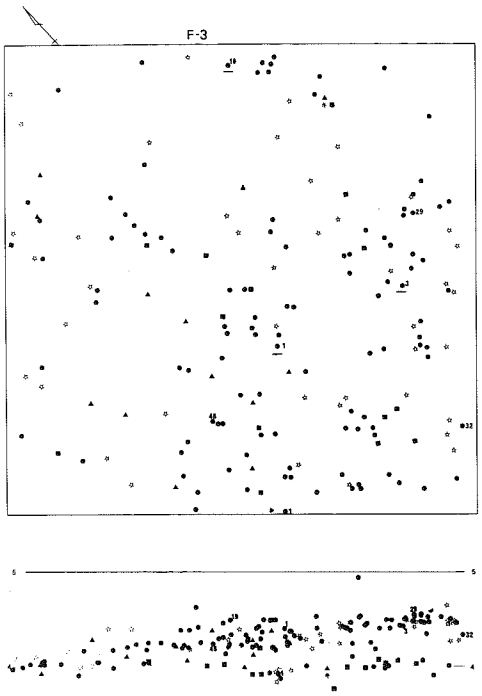
第18図　不明集石実測図（1/30）



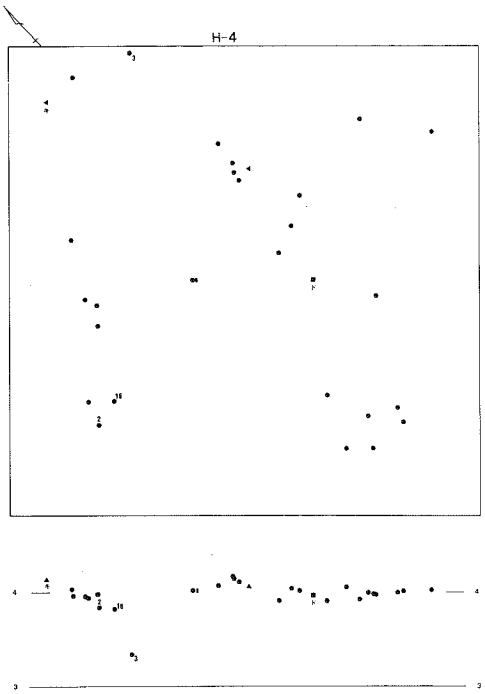
第19図　焼土実測図（1/30）

遺物分布状況

各グリット別のドットマップによる遺物の分布状況で説明すると、遺物には土器の他自然遺物がかなり含まれている。その中でもアワビ貝の量はとび抜けて多く、この堆積状態から漁を行なった時期と土器の廃棄された時期とを重ね合わせることができる。また、鉄器と骨角器の出土状況では、同時期に併用して使用していたことがわかる。亀卜については、F－3区及びH－4区であげているがこれで見ると4層～2層の間にある。そのほかにもC－4・D－3・E－3・F－2・4・G－3でそれぞれ亀卜が出土している。



F－3区　遺物出土垂直分布図



H－4区　遺物出土垂直分布図

凡例
▲骨角器
■鉄器
●土器
☆アワビ

●土師器(遺物番号)
▲キ：亀卜
■ド：青銅器
●：須恵器(遺物番号)

4．遺　　物

(1) 土　　器

土師器、須恵器ともにほぼ同数の出土があった。総出土点数は約3万点、図として掲載した遺物は、ドットによって遺物取り上げを行った内の完形品及び、完形品に近いものを選別した。

また、層位による遺物も完形品に近いもの及び特徴のあるものを図化した。

焼成法方によって2種に分ける、即ち土師器と須恵器に大別し、機種別に甕、壺、杯身、高杯、鉢、竈、椀形土器と分類した。

① 土　師　器（第20図～第22図）

甕形土器類

1・2の遺物が、今回の調査で出土し、遺跡の開始時期を示している。器形の特色は、口縁部が内湾しながらつまみ上げたように、作り出したものと、口縁部に凹線を巡らすものがある。いずれも、器壁が薄い。4頸部から口縁部にかけやや曲折気味に、たちあがる。口唇部に浅い凹線が入る。3・5・7口縁部直線的に外反し、端部丸味を持つ。6頸部から口縁部への屈曲が強くなる。8外面格子目状のタタキを付しナデ整形を行っている。内面は弧状のあて具痕が残る。頸部から肩部にかけ明瞭な稜が付く。また、頸部から口縁部はやや反りをもちながら直線的に外反する。口縁部は平坦ぎみに丸味を持たせる。10～12頸部から極端に屈曲し口縁部へ移行する。鍔状の口縁をなす。胴部下半から膨らみかげんである。13内面頸部から口縁部へ直線的に外反する。小形の甕。

壺形土器類

9頸部たち気味で口縁部屈曲する。外面ナデによるものか磨きがかかる。

鉢形土器

14頸部から直線的にたちあがり、口縁部やや外反気味である。安定した底部をなす。

坩形土器

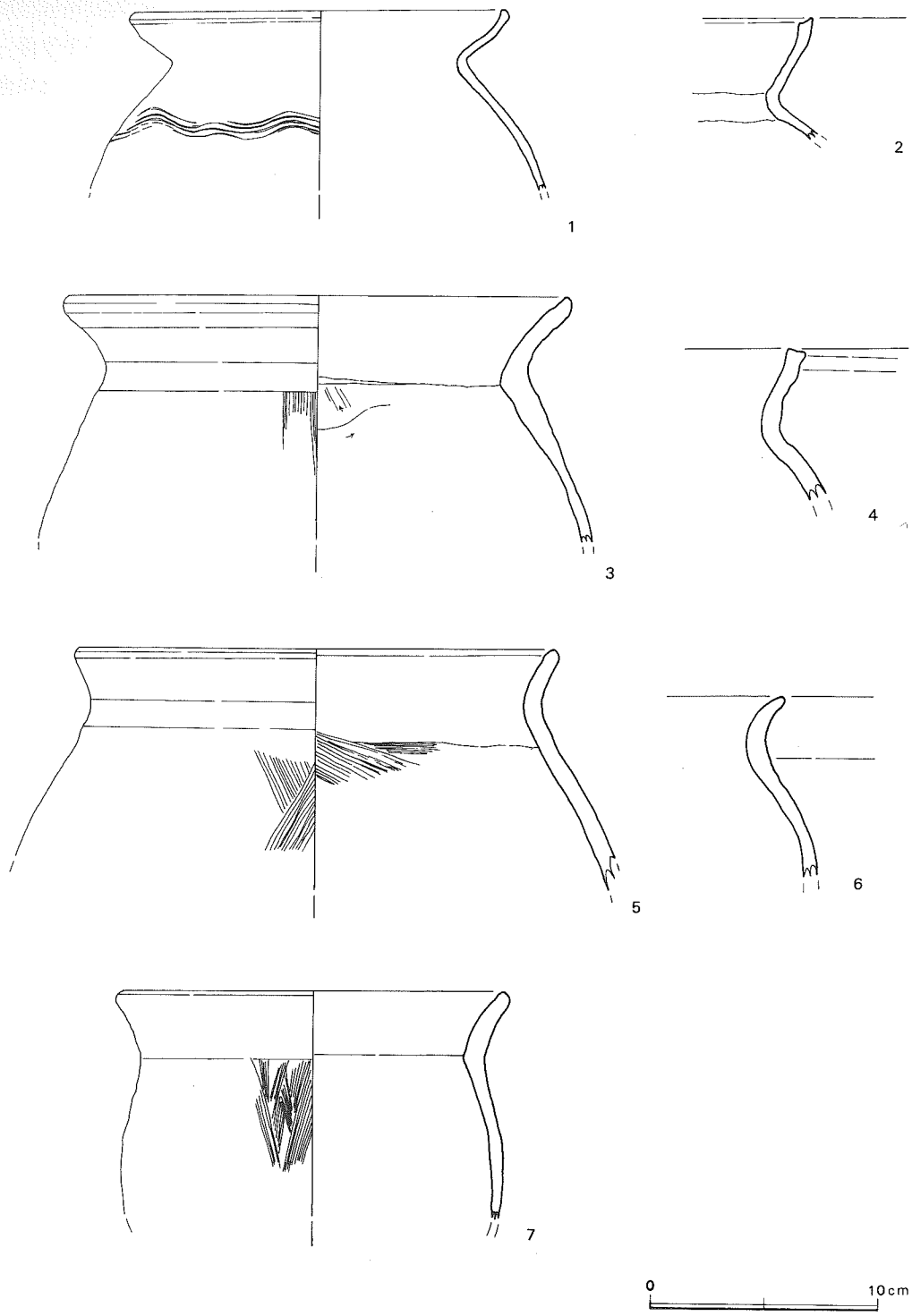
15頸部から直線的にのび、やや外反する。胴があまり張らない。

高杯

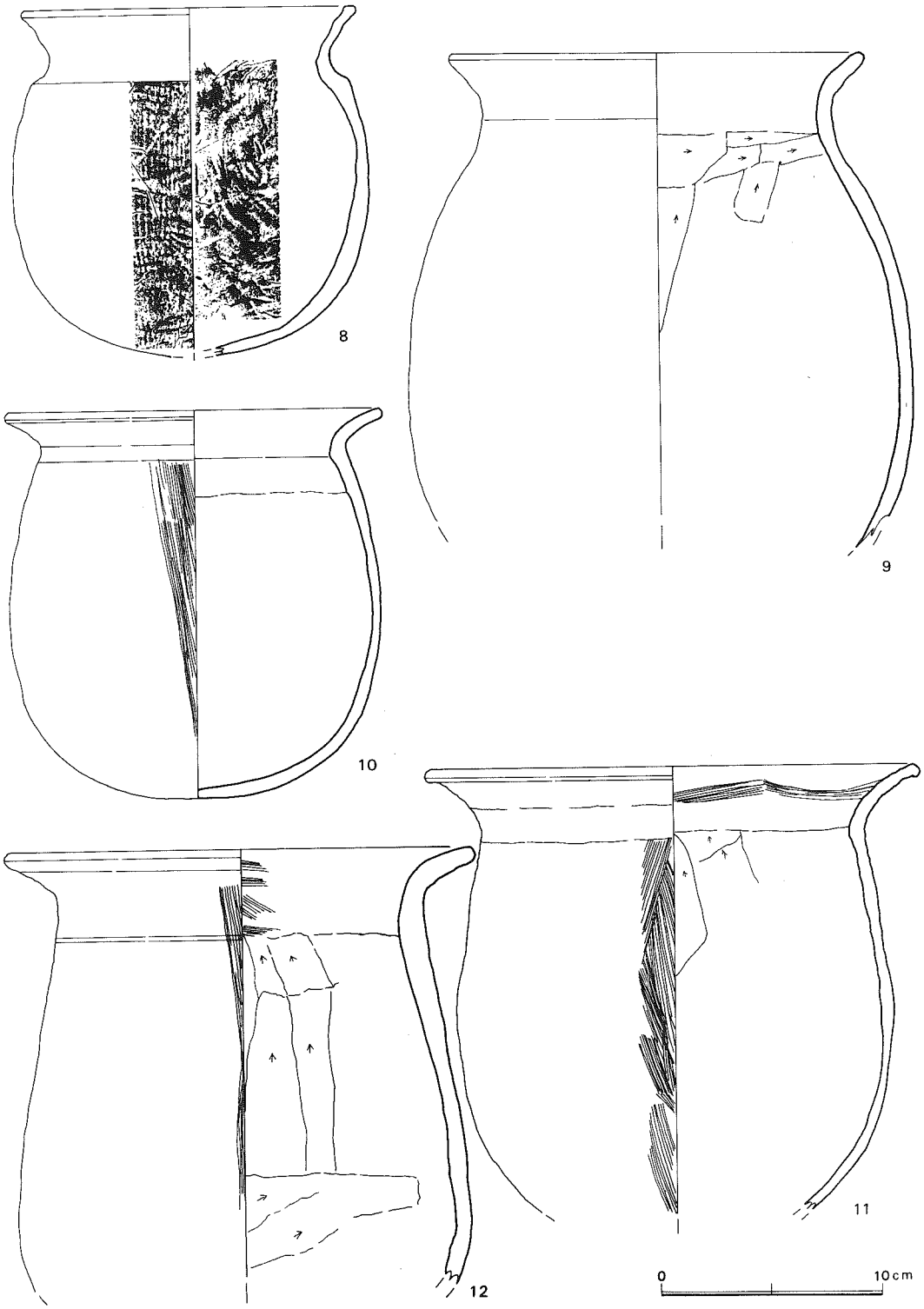
16杯部がやや深く、底部から内湾しながら、体部中央で屈曲する。屈曲部から口縁部は外反気味となる。

杯形土器（17～21）

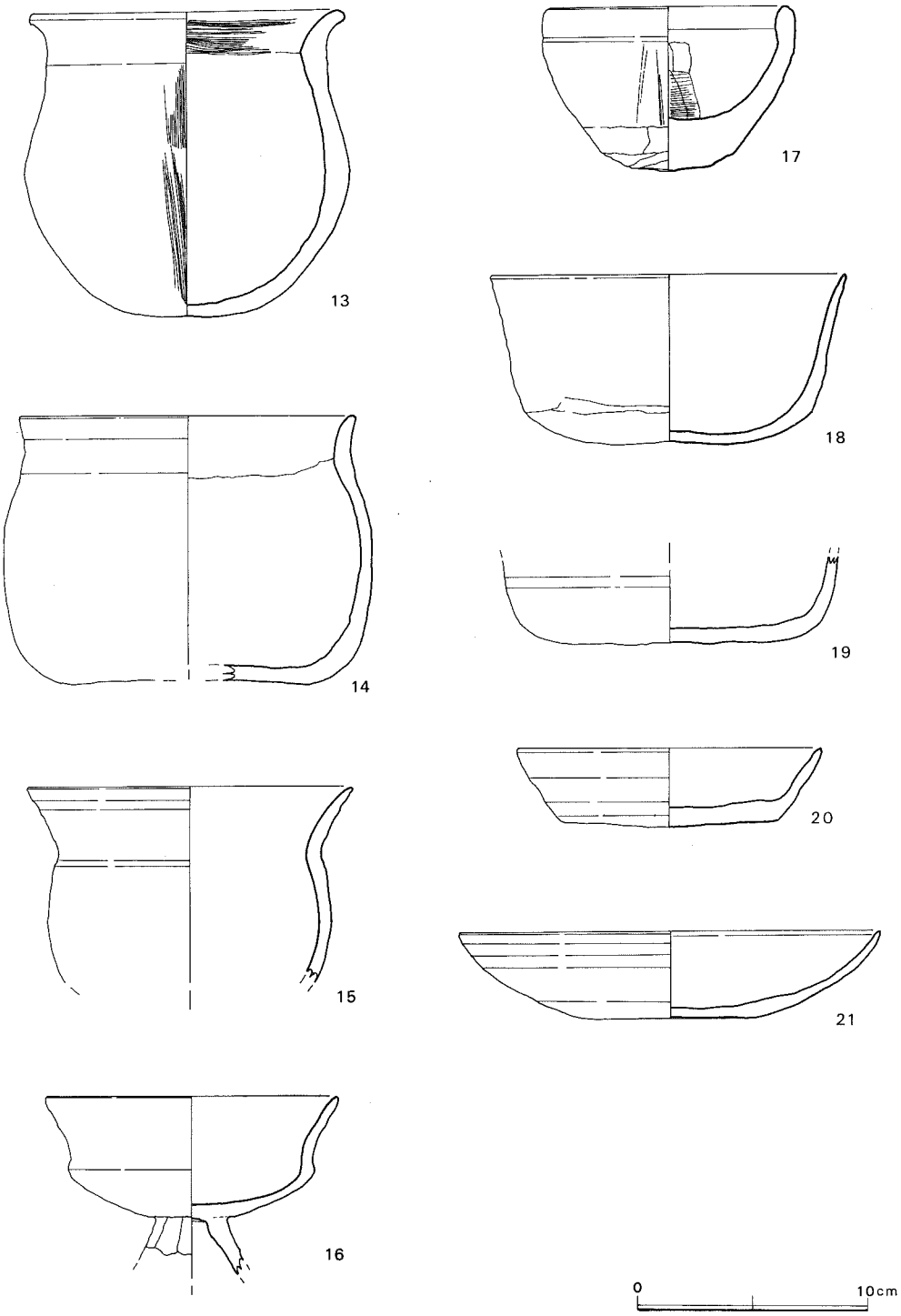
17壁器にかなり厚みを持つ。祭祀具に関係する資料とも考えられる。20須恵器を模倣したものか、焼成良行である。21は底部平底をなし、内湾しながら口縁部に移行、ヘラ磨きが施される。



第20図　土師器実測図①（1/3）



第21図　土師器実測図②（1/3）



第22図　土師器実測図③（1/3）

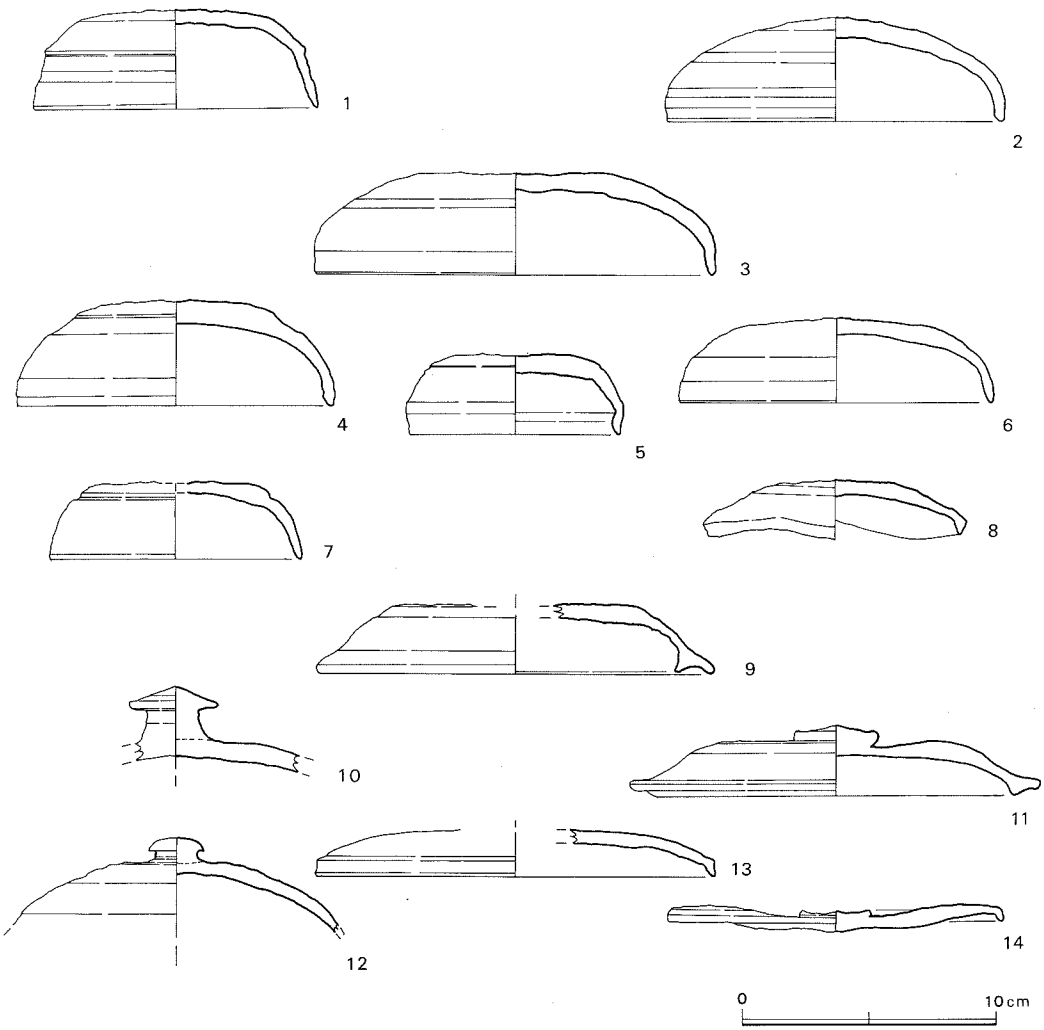
② 須　恵　器（第23図～第25図）

杯蓋

6世紀末から8世紀頃までの資料が出土している。1～8が天井部につまみを持たないものである。1は体部に稜を作るが、口縁端部尖りぎみに仕上げる。8は端部を嘴状に作り出している。9～14は、つまみが付くもの、あるいは予想されるもので、11は、口縁端部より下にかえりが付く。9よりも1時期古いものであろう。

杯身

受部のあるもの、高台の付くもの、高台のないものに分けられる。受部のあるものには、受部からのたちあがりが、やや内傾するもの（15・16・21・22）と反り気味（17～20・23～34）



第23図　須恵器実測図①（1/3）

とがある。前者が口径やや大きくなる。34は、立ち上がりと受部が、水平に近い形状を呈する。高台のないものでは、35・38があり、35には体部にヘラ記号を持つ。38は底部から内湾して口縁部に移行する。体部に浅い凹線が入る。

甕、壺、高杯類

39は、器壁が薄く頸部からやや外反して口縁部にいたる。輪入品と考えられるものである

40～42口縁部短く外反するものである。

43口縁部短く外反し口縁端部丸みを持つ壺。

44口縁部内湾ぎみで、なだらかな胴部へ移行する小形の壺。

45・46底部の残るもので、45は櫛状工具による沈線が入る。

47～50は高杯類で、47は、有蓋長脚高杯、スカシ2箇所有す。48・49は無蓋高杯である。

③　その他の土器（第27図）

1口縁部大きく外反し、口縁端部に厚みを持つ櫛描文が2段入る。大型の須恵器甕。

2底部から直線的に伸びる。外面格子目のタタキ痕残し、内面はタタキの押え具と考えられる孤状文が付く、把手は貼り付けして、指ナデ整形する。甑。

3製塩土器支脚で、ナデ整形痕が残る。

4瓦質の錘で径約5㎜を測る。

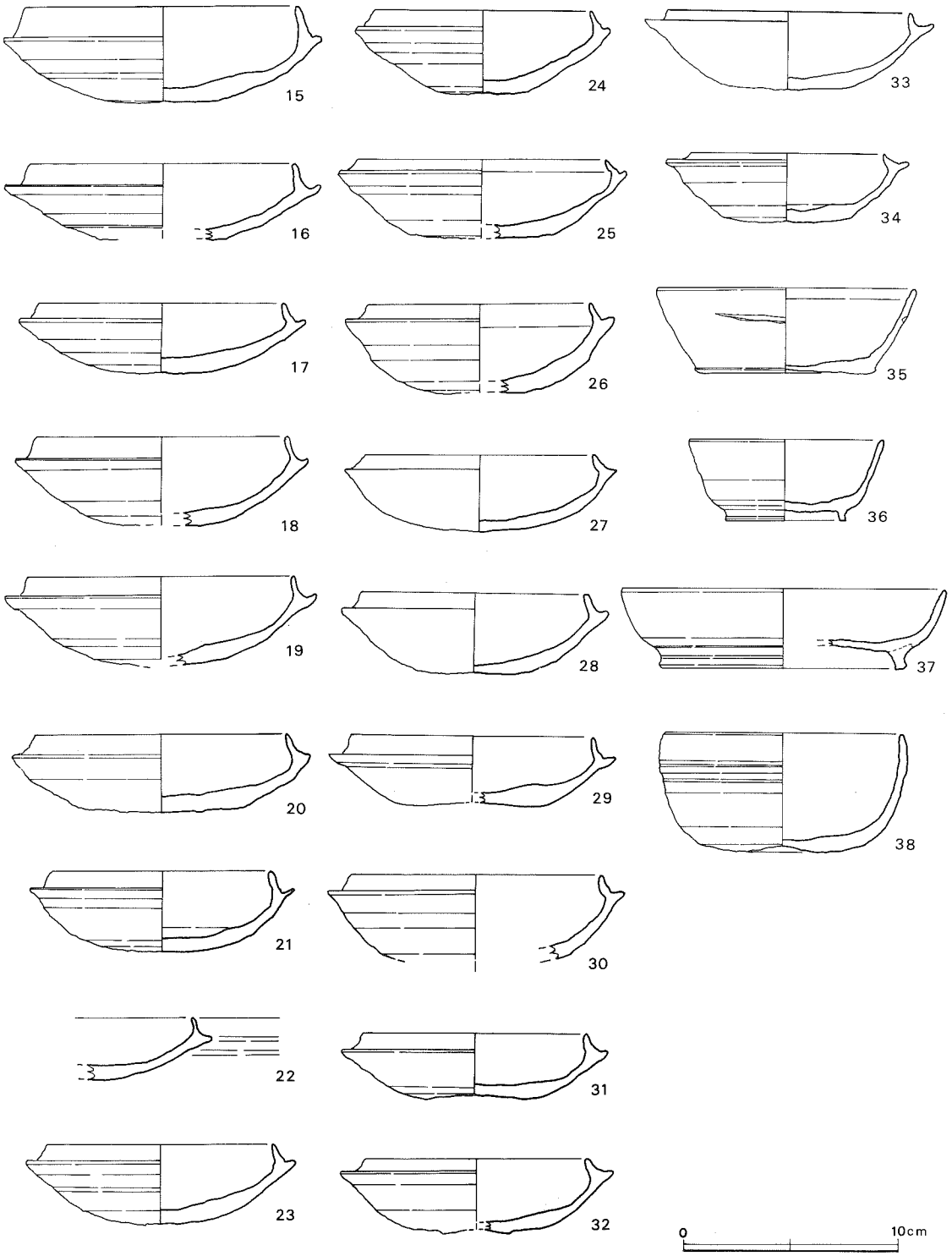
5把手の部分品である。

6竈で付け庇系統である。庇部は貼り付けを行い、これをナデ整形している。体部は、ハケ目整形し、内面全体に縦位のヘラ削りを行う。

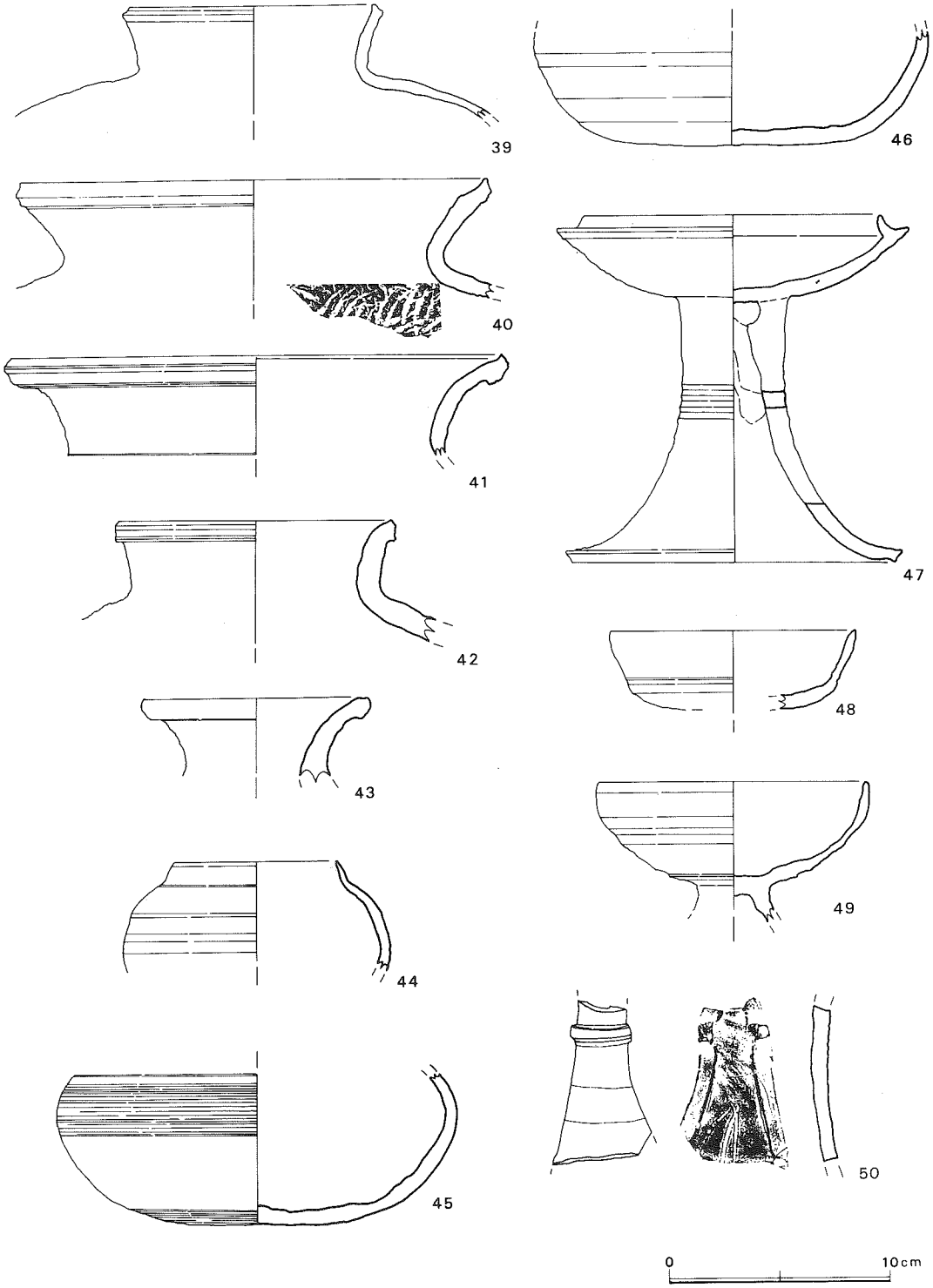
7調査区域図（第3図）の番号7を付した地点より発見したものである。

小結

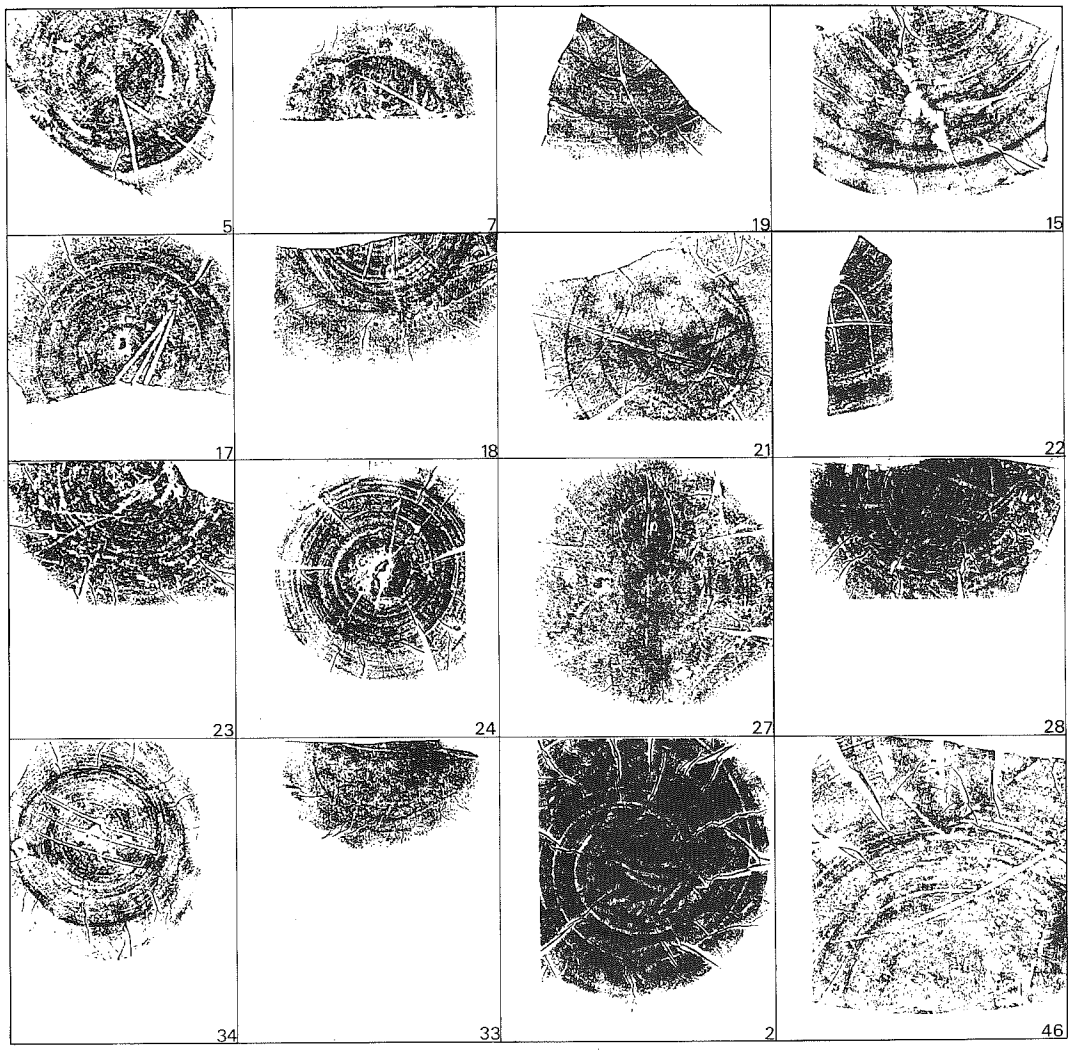
串山ミルメ浦遺跡の、時代推移を出土土器によって測ると、4世紀頃から5、6世紀代に先住者がいたことが推測される。その後J－5、I－5区に検出した建物跡が7世紀前半頃営まれたと考えられる。この時期、6世紀末から7世紀前半にかけて、アワビ貝取りを主とする、海人集団が、この地を占拠し、8世紀後半頃までアワビを専門に漁をしていたと考えられる。



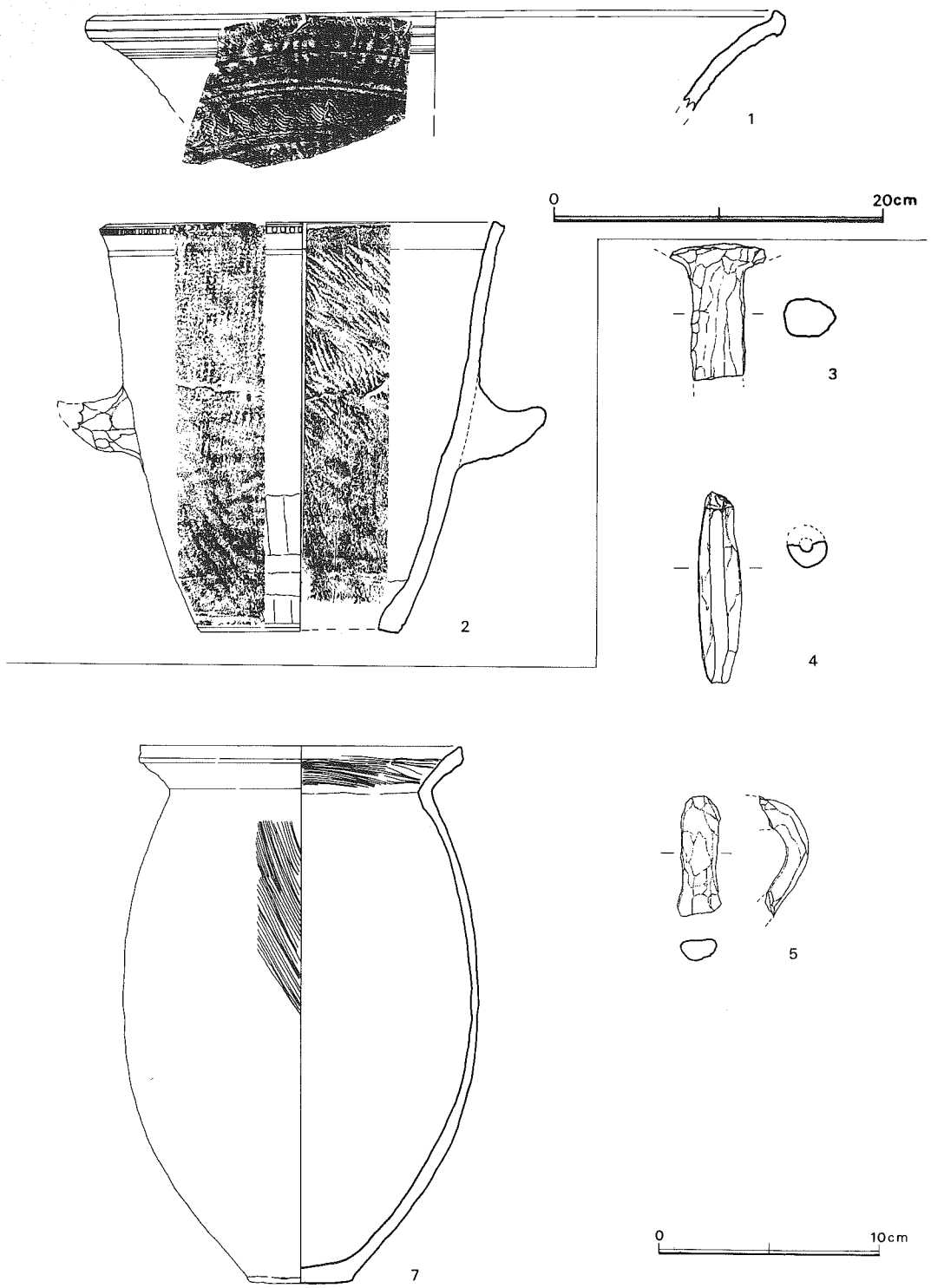
第24図　須恵器実測図②（1/3）



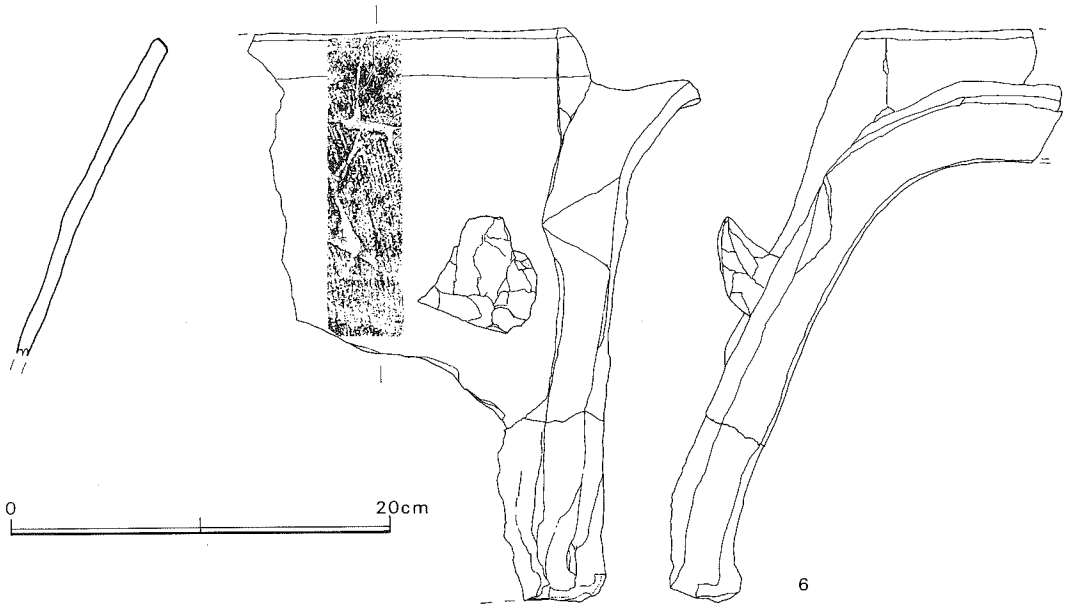
第25図　須恵器実測図③（1/3）



第26図　ヘラ記号の須恵器拓影



第27図　その他の土器実測図①１、２は（1/4）その他は（1/3）



第28図　竈実測図（1/4）

参考文献

「海の中道遺跡」福岡市教育委員会、福岡市埋蔵文化財調査報告書第87集　1982

「太宰府古文化論叢下巻」九州歴史資料館開館十周年記念　森田勉　昭和58年12月20日発行　吉川弘文館

「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告―12―」甘木市所在柿原遺跡群の調査III（E・F地区）福岡県教育委員会　1987

「忌の竈と王権」　稲田孝司　「考古学研究」　97　　1978年6月

「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告―14―」甘木市所在宮原遺跡の調査I（B・C地区）福岡県教育委員会　1988

「太宰府史跡、昭和61年度発掘調査概報」　昭和62年3月　九州歴史資料館　「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」　春日市、筑紫郡那珂川町所在遺跡群の調査第3集　福岡県教育委員会　1977

「陶邑II　大阪府文化財調査報告書第29輯」　―本文編―　大阪府教育委員会　1977

表3　串山ミルメ浦遺跡・土師器観察表

図番号 遺物番号	出土区	法量 口径	法量 器高	特徴	備考
第20図 1	ミF3—92	16.3	—	布留式土器。頸部から口縁部へ内湾し、端部つまみあげた様にやや丸く作る。口縁部内外面ナデ施し、頸部から以下の内面右回りにヘラ整形。外面4条の櫛描波状文施す。	底部欠損
2	ミJ5—H1	—	—	頸部から口縁部へ内湾しながら移行し、端部に浅い凹線を持つ。外面ハケ目をナデ消す、内面も同様に行い頸部以下ヘラ整形。胎土良、焼成良好。	破片
3	ミF3—16	22.0	—	胎土に金雲母混入、頸部から外反ぎみに口縁部へ移行。端部丸くなる。口縁部近くで外面浅い凹線が入り、内面は口縁部からやや凹む。頸部に稜を有する。	底部欠損
4	ミF4—9	—	—	頸部から口縁部にかけ波状に移行し、口唇部直上浅い凹線が入る。頸部以下、横位にハケ目付す。	破片
5	ミG3—32	21.0	—	内外面赤褐色を呈し、頸部から口縁部へゆるく外反し口縁端部丸くおさめぎみ。内面浅い段を持ち内面頸部辺を、ハケ目施し他はナデ整形。外面は頸部以下をハケ目整形。	底部欠損
6	ミF2—57	—	—	外面茶褐色を呈し、頸部から口縁部にかけ外反する。整形は、内面ナデ、外面頸部以下ハケ目付す。端部は、丸みを持ち口縁外面下でやや稜を持つ。	破片
7	ミF2—9	16.8	—	頸部から外反しながら口縁部へ移行、端部丸くおさめる。頸部以下外面ハケ目、内面横位と縦位にヘラ削り行い、口縁部ナデ整形。	底部欠損
第21図 8	ミG4—8	14.5	—	肩部に稜を持ち、頸部から口縁部にかけ波をうちながらのびる。端部やや厚く口縁部平坦ぎみにおさめる。整形は外面格子目のタタキをナデる。肩部から口縁はナデ整形。内面頸部以下タタキの押え具痕残る。胎土良好。	〃
9	ミC4—63	18.5	—	肩がはらずゆるやかに胴部へ移行する。頸部から口縁にかけて外反する。調整は、外面ヘラ削り後ナデ整形し表面滑らかな肌をなす。内面頸部以下ヘラ削り。	〃
10	ミG4—46	16.8	17.6	胴部下半がふくらみ底部へ移行する。頸部から口縁部短く外反し、端部丸くおさめる。胎土粗く金雲母混入。整形は外面ハケ目、内面頸部から底部まで縦位のヘラ削りし、他はナデ施す。	
11	ミD3—22	21.7	—	頸部から外反しながら口縁部に移行、端部丸くおさめる。胴部やや下ぶくれして、底部まる底になると考えられる。口縁部が胴部より大きいため、アンバランスな感じをうける。外面全体にハケ目整形行い、内面ヘラ削り施し、口縁部ハケ目痕残る。	底部欠損
12	ミD3—7	20.8	—	胴部下半がはりだした器形をなし、口縁部外反する。器壁厚いところで1.3cmを測る。外面頸部から胴部下半までハケ目施す。以下ナデしあげ内面頸部以下をヘラ削り行う。口縁部ハケ目残り、胎土あらい。	〃
第22図 13	ミF2—54	13.6	13.2	内面頸部で稜が付く。胴部中央に最大径がきて底部まる底に移行。胴部から頸部内傾し、頸部から口縁部外反する。整形は外面頸部以下ハケ目上部はナデ。内面は口縁部ハケ目以下縦位のヘラ削りで胎土に金雲母混入。	
14	ミG2—13	14.4	—	頸部から口縁部、直線的に立ち上がりやや端部が外反する。胎土粗く5㎜程の長石混入。整形は、外面ハケ目付し、頸部から口縁部ナデ整形、内面ヘラ削りにより底部から頸部へ整形痕残す。	底部欠損
15	ミH3—4	14.0	—	頸部から、外反しながら口縁部へ移行、頸部で浅い稜を持ち胴部ヘラ整形、内面ナデ。	〃
16	ミG2—P12	12.5	5.3	口径12.5cm、外面風化し、ナデ調整がハゲ落ちる。内面ナデ整形、頸部から口縁部外反する。胎土良好焼成ややあまい。底部に屈曲があり稜を作りだしている。	
17	ミI5—Ⅲ5	10.2	7.1	底部の厚さ2.3cmを測る。底部より内湾しながら口縁部やや厚みを持って端部丸くおさめる。整形は、胴部ハケ目、底部ヘラ削り。内面指押さへの後ハケ目整形。	
18	ミE4—24	15.2	7.2	外面ヘラ磨き、内面も同様に底部までヘラ磨き。底部から口縁部へ外反しながら移行する。内面朱色を呈す。胎土良好、底部煤付着有り。	
19	ミF3—39	—	—	平底を成し、粘土ひもを右回りに巻きあげる。ヘラ削りの後ナデ仕上げを行っている。	口縁部欠損
20	ミE4—Ⅲ5	13.2	3.4	底部ヘラ削りの後ナデ整形、底部中央が盛り上がりぎみ。口縁部外反し端部丸くおさめる。内外面淡褐色、たちあがりから口縁部にかけ黒色を呈する。胎土良好、焼成良。	
21	ミC4—16	18.2	3.7	平底から内湾しながら口縁部へたちあがる。端部丸くおさめる。内外面ヘラ磨きを行う。色調外面淡黄赤褐色を呈する。	

表４　串山ミルメ浦遺跡須恵器観察表①

図番号 遺物番号	出　土　区	法　量 口径	法　量 器高	特　　徴	備　　考
第23図 1	ミＦ３―30	11.1	3.9	明灰色を呈し体部に段をなす、端部丸みをもたせる。天井部½程ヘラ削り行う。	
2	ミＨ４―Ｐ２	13.3	4.0	４本の線引きされたヘラ記号（Ⅷ）付す。天井部やや尖りぎみ。口縁部丸くおさめながら端部内傾する。焼成ややあまい。内面ミズ引き整形。	
3	ミＧ２―５	15.8	4.0	天井部ほぼ平、口縁端部丸くおさめる。色調灰色を呈する。	
4	ミＦ２―68	12.4	4.1	ヘラ記号（∧）有り、淡白色を呈し、ミズ引きによるナデ、口縁部丸くおさめる。端部内傾する。	
5	ミＣ３―78	8.3	3.1	天井部ほぼ平にヘラ削りし、口縁部ミズ引き行う。口縁端部丸くおさめ内面でふくらむ。	
6	ミＥ３―19	12.2	3.3	内面灰色、外面暗灰色。焼成ややあまい。口縁部外方に開きぎみで端部丸くなる。	
7	ミＤ３―52 ミＤ３―33	9.9	3.3	天井部ヘラ切り、口縁部との間に凹線による稜が残る。ヘラ記号(―)付す。	
8	ミＥ４―２	10.0	2.4	天井部ヘラ切り、内面ミズ引き嘴状に端部作出、熱により器形が変形する。	
9	ミＥ３―11	15.7	―	天井部つまみ欠くが口縁内面に、かえりが付く。焼成あまい、色調淡黄灰色を呈する。天井部ミズ引き整形。	天井部欠損
10	ミＧ２―Ⅳ６	―	―	内外面、暗褐色を呈し、天井部のつまみ貼り付ける。	破片
11	ミＥ４―14	16.2	2.8	内面にかえりが付き、蓋の口縁端部よりも下方に出る。	
12	ミＧ４―Ⅳ	15.8	4.0	天井部に丸いつまみ貼り付ける。焼成良。	
13	ミＣ３―１	15.8	―	内外面ミズ引き行う。天井部で欠損、端部嘴状になる。	天井部欠損
14	ミ住Ｉ５―８	13.4	1.3	焼成による変形をきたしている。偽宝珠扁平で、口縁端部が嘴状になる。	
第24図 15	ミＩ５―Ⅲ５	12.6	4.4	たちあがりやや長く口縁端部丸くおさめる。受部に厚みがある。内面ミズ引きで、外面ヘラ削り½以上、胎土やや赤味もつ。ヘラ記号(―)有り。	
16	ミＨ４―３	12.4	―	焼成不良により暗茶褐色を呈する。受部やや上向きである。端部切り取りのようなエッジを残す。	底部欠損
17	ミＥ３―26	11.3	3.3	たちあがり反りぎみで、端部丸みをもつ。内面黒色を呈し、ミズ引き行う。	
18	ミＧ３―53	11.6	4.2	ヘラ記号（ソ）有り。内外面灰色を呈し、たちあがり反りぎみに端部丸くおさめる。焼成ややあまい。	
19	ミ住Ｊ４―５	12.8	4.3	ヘラ記号（ノ）有り。ヘラ削り½程、端部断面比較的薄い。内外面淡灰緑色を呈する。	

表５　串山ミルメ浦遺跡須恵器観察表②

図番号 遺物番号	出土区	法量		特徴	備考
		口径	器高		
第24図 20	ミ住Ｉ５－３	11.7	3.6	内外面黒色を呈し断面暗灰色。焼成良いが、底部雑な作りで貼り付けたように段を持つ。	
21	ミＨ３－5.6	10.2	3.7	ヘラ記号（#）有り。⅔程ヘラ削り、たちあがり短く内傾している。受部に自然釉がかかる。内外面灰色を呈する。内面ミズ引き後ハケ目付す。	
22	ミＣ４－63	—	—	暗灰色外面、内面淡灰色を呈する。受部からたちあがり滑らかに移行。端部丸くおさめるヘラ記号（#）有り。	破片
23	ミＧ４－62	10.5	3.8	焼成不良のため、内外面淡黄褐色を呈し受部やや灰色ぎみ、受部に凹線有り。ヘラ記号（ｘ）有り。	
24	ミＦ２－66	10.1	3.9	ヘラ記号（ｘ）有り。ほぼ完形、外面ヘラ削り½程行う。受部短く厚みがある。たちあがり反りぎみに、端部丸くおさめる。内外面灰色を呈す。	
25	ミＥ３－32	10.6	3.7	外面漆黒色内面暗灰色。受部に凹線有り、やや上向きである。たちあがり反りぎみで端部丸みを持つ。一部自然釉がかかる。	
26	ミＨ３－４	10.4	4.2	ヘラ削り⅔程。焼成不良により、あずき色を呈する。胎土粗く、２㎜～５㎜程の石英粒混ざる。ヘラ記号（／）有り。受部からのたちあがりやや反りぎみに、端部丸くおさめる。	
27	ミＣ４－60	10.6	3.6	受部短く、反りぎみの断面三角形である。ヘラ削り½程行う。外面明灰色一部煤付着、内面暗灰色。ヘラ記号（φ）有り。	
28	ミＨ３－３	10.6	3.7	淡灰色を内外面呈する。ヘラ記号（//）有り。たちあがり端部角ばり、受部やや上向き。焼成普通。	
29	ミＦ３－26	11.3	3.2	外面自然釉が付き、淡黄灰色のまだら文様になる。受部からのたちあがりやや反りぎみで、端部丸くおさめる。ヘラ記号（\\）有り。受部下部丸みを持ち、底部やや上底ぎみで、安定感がある。	
30	ミＨ５－12	11.7	—	淡灰色を呈し、たちあがり反りぎみで、端部尖りぎみである。内面ミズ引き痕残る。受部に薄く自然釉がかかる。	底部欠損
31	ミＦ２－48	10.5	2.9	ローリング受ける。内外面淡灰色を呈す。たちあがり反りぎみに、端部丸みを持つ。底部やや上底ぎみ。受部はほぼ水平である。	
32	ミＦ３－97	10.2	3.6	ローリング受ける。内面淡灰色、外面淡あずき色を呈する。たちあがりやや反りぎみ、端部丸くおさめる。焼成不良による色調変化をきたしている。	
33	ミＨ３－14	11.4	3.7	外面黒色、受部から内面にかけて灰色全体に滑らかなカーブを描く。ヘラ記号（ｷ）有り。焼成普通。	
34	ミＦ２－12	9.0	3.2	内面茶褐色を呈しており、焼成時の不良が原因と考えられる。外面暗灰色。部分的に淡褐色を呈する。受部からのたちあがり部に沈線が入り。反りぎみに端部へ移行。胎土良好底部若干凹ぼむ。ヘラ記号(ニ)有り。	
35	ミＣ４－１	12.0	4.0	淡灰色焼成ややあまい。底部粘土がはみだす。底部から内湾ぎみに立ち上がる。端部丸くおさめる。体部ヘラ記号（－）有り。	
36	ミ住Ｉ５－７	9.1	3.8	高台より外反しつつ端部丸くおさめる。内外面灰色を呈する。	
37	ミＧ４－47	15.1	3.7	内外面暗灰色を呈し内面ミズ引き整形。高台貼り付け、高台からのたち上がり短く、端部やや尖りぎみ。	
38	ミＨ５－11	11.0	5.6	断面淡黄色。内外面灰色。底部ヘラ削り行い、やや上底ぎみである。立ち上がり、内湾しながら端部丸くおさめる。内面ミズ引き整形。	

表6　串山ミルメ浦遺跡須恵器観察表③

図番号 遺物番号	出土区	法量 口径	法量 器高	特徴	備考
第25図 39	ミC4—67	11.1	—	内外面あずき色を呈し、一部自然釉がかかる。焼成良い。頸部から口縁はやや外反ぎみ。口縁部やや丸みを持つ。	半島系土器
40	ミE3—9 ミE3—8	21.2	—	外反する口頸部を有し、端部で肥厚し断面方形を呈する。内面頸部下に同心円のタタキ有する。	
41	ミG3—40	22.2	—	外反する口頸部を有し、端部で肥厚し、一条の沈線をめぐらす。内外面に一部自然釉がかかる。	
42	ミG3—56	12.4	—	口頸部直立ぎみに外反する。端部肥厚部に稜がめぐる。外面自然釉がかかる。	
43	ミG2—Ⅲ上②	10.1	—	内外面漆黒色を呈し口頸部外反し、端部肥厚して丸みを持つ。	
44	ミG3—Ⅲ上③	7.4	—	頸部短く、端部丸くおさめる。ゆるいカーブを描いて胴部へ移行する。胴部に浅い凹凸が入る。	
45	ミF4—2	—	—	底部平底をなし、たちあがり内湾する。底部と肩部辺に櫛状の工具整形痕残す。また外面自然釉がかかる。	口縁部欠損
46	ミG4—2	—	—	底部平底で、ヘラ削り残す。底部からのたちあがり内湾しながら移行する。内面ミズ引き整形。内外面灰色。	〃
47	ミC3—67	13.3	15.7	有蓋長脚高杯、長方形の二段スカシを2方向に刻む。脚は、接合基部から外反しラッパ状に開き、端部屈曲させる。杯部は受部やや上向きかげんで、たちあがり反りながら、端部丸くなる。	
48	ミF3—72	11.0	—	無蓋高杯。杯部は口縁部が直立気味に外反し、端部丸くおさめる。体部外面に浅い凹線が入る。色調淡灰色。	脚部欠損
49	ミF4—10	12.2	—	無蓋高杯。内外面淡黄灰色を呈する。断面黄褐色。口縁部たちあがり内湾ぎみで端部丸くおさめる。	〃
50	ミG2—Ⅲ上②	—	—	高杯脚欠損品。長方形の二段スカシを2方向に刻む。内面にヘラ記号を付す。	脚部片

串山ミルメ浦遺跡その他の土器観察表①

図番号 遺物番号	出土区	法量 口径	法量 器高	特徴	備考
第27図 1	ミG3—23	41.8	—	口頸部大きく外反し端部で肥厚する。断面菱形状を呈する。口頸部外面は櫛描波状文が2段残る。	須恵器大甕
2	ミE4—52	23.7	25.0	内外面赤褐色を呈し、たちあがりやや外反ぎみである。外面格子目のタタキを配した後、底部近くから把手付近までヘラ削り行う。また外面底部、やや上部に沈線を巡らす。口縁部には凹凸文様を施し口唇部浅い沈線巡らす。内面は、タタキの押え具によってついた、木の年輪状の文様が残る。把手は、ナデにより整形し貼り付けている。	甑・底部橋状欠損
3	ミH4—P1	—	—	製塩土器支脚。指ナデによって整形されている。断面やや扁平な感じである。色調赤褐色を呈する。	脚部片
4	ミG4—Ⅲ上①	—	—	瓦質の錘で、溝径0.5cm、長さ8.5cm、断面円形になるものと考えられる。	½欠損
5	ミJ5—Ⅳ3	—	—	指ナデの痕、ハケ目付す。提瓶の把手か。	
第28図 6	ミF2—7	—	30.6	焚口幅34.5cm、器高30.6cm、釜孔径21.0cm。体部ハケ目整形し、内面体部縦位のヘラ削り行う。庇部は貼り付け行い、これをナデ整形している。把手は、上向きに指ナデ貼り付けを行う。(付け庇系統)	
第27図 7	道路崖出土（アワビが中に入る）	14.6	24.5	底部平底をなし、砲弾形に内湾しながら頸部へ移行する。頸部内面稜がつき、頸部から口縁部は外反し、端部やや肥厚する。口縁部は凹み気味である。口頸部内面ハケ目残る。以下はナデる。外面は頸部から胴部中位まで、ハケ目付し、以下は、ナデ整形である。色調は暗茶褐色を外面し、内面煤の付着が頸部以下に有る。尚、この甕は、調査区外の道路崖面に埋設されていたものを発見し、崖面崩壊のおそれがあったため、取り上げることにした。また、土器の中にはアワビ貝が1点挿入してあった。	

表７　串山ミルメ浦遺跡把手計測表

番号	出　土　区	長　さ(cm)	厚さ(cm)	反り(cm)	備　考	番号	出　土　区	長　さ(cm)	厚さ(cm)	反り(cm)	備　考
1	ミＣ４－23[86]	5.7	3.45	1.7		41	ミＦ２－６	4.2	2.90	0.9	
2	ミＤ３－67	4.8	3.34	2.7		42	ミＦ２－Ⅳ下８	4.5	3.45	0.8	
3	ミＤ３－４	7.1	3.61	1.6		43	ミＤ３－24	4.3	2.48	0.7	
4	ミＧ23－20	5.4	4.05	1.2		44	ミＤ３－17	4.4	3.44	0.2	
5	ミＥ３－52	5.2	4.09	0.1		45	ミＤ３－48	5.5	3.43	1.4	
6	ミＣ４－37[100]	4.5	3.24	1.1		46	ミＣ３－83	4.4	4.295	0.4	
7	ミＦ３－31	5.1	2.74	2.2		47	ミＥ３－22	5.4	3.595	0.8	
8	ミＣ３－72	5.6	3.43	2.0		48	ミＦ２－53	4.8	4.51	2.1	
9	ミＦ２－63	5.5	4.34	0.8		49	ミＧ２－９	4.7	3.84	1.4	
10	ミＦ３－Ⅲ	4.5	2.74	0.6		50	ミＦ２－上２	4.2	2.595	1.2	
11	ミＦ２－31	5.5	3.63	1.9		51	ミＦ２－13	2.4	3.105	0.9	
12	ミＧ４－Ｈ１	先端部欠損	3.27	0.6		52	ミＦ２－69	4.6	2.590	0.8	
13	ミＥ３－35	6.3	5.33	1.3		53	ミＦ２Ⅳ上－１	3.7	1.820	0.8	
14	ミＤ３－13	先端部欠損	2.66	0.5		54	ミＨ５－４	4.5	1.580	0.9	
15	ミＨ４－Ｈ１	3.2	2.67	0.3		55	ミＦ２－Ⅲ下－７	4.5	2.860	0.4	
16	ミＤ３－61	先端部欠損	4.03	1.8		56	ミＥ４－49	5.7	2.790	0.5	
17	ミＦ３－90	5.4	4.87	0.5		57	ミＦ２－49	6.4	3.215	0.4	
18	ミＩ５－Ｈ(Ⅰ)	4.7	3.21	0.9		58	表採	5.1	2.265	1.2	
19	ミＥ４－19	5.5	4.41	2.2		59	ミＧ３－Ⅲ上－③	4.9	3.680	0.8	
20	ミＦ３－90	6.2	3.62	2.5		60	ミＥ４－23	5.4	4.420	1.4	
21	ミＦ２－61	4.9	3.15	2.8		61	ミＧ３－48	4.7	3.345	0.3	
22	ミＣ３－11	4.4	4.03	1.4		62	ミＧ３－17	5.3	2.410	1.1	
23	ミＧ３－14	4.7	3.30	2.5		63	ミＦ２－56	4.7	2.425	0.8	
24	ミＦ２－Ⅲ６	4.6	3.76	0.4		64	ミＤ３－15	4.9	2.535	1.6	
25	ミＥ４－43	4.9	4.30	1.5		65	ミＯ３－16	4.6	2.190	1.6	
26	ミＩ５－Ｈ１	5.2	4.51	0.8		66	ミＣ４－64	6.1	2.705	1.5	
27	ミＤ３－67	5.0	4.01	1.1		67	ミＤ３－34	6.5	4.200	1.4	
28	ミＩ５－Ⅲ１	4.5	3.08	0.4		68	ミＤ３－Ⅲ上①	3.2	2.830	0.5	
29	ミＧ２－26	先端部欠損	3.32	1.3		69	ミＧ３－Ⅲ上②	6.1	4.000	0.7	
30	ミＧ３－Ｈ１	4.4	4.01	1.3		70	ミＥ３－22	5.3	2.700	0.8	
31	ミＧ４－Ｈ１	5.0	3.69	0.8		71	ミＨ３－11	4.7	3.705	1.1	
32	ミＦ４－４	4.2	3.81	1.3		72	ミＤ３－50	6.6	4.050	0.8	
33	ミＦ２－Ⅲ１	4.3	3.35	1.4		73	ミＧ３－10	5.7	3.430	0.4	
34	ミＥ４－16	4.2	3.15	0.6		74	ミＣ４－47－110	先端部欠損	3.000		
35	ミＧ３－Ⅲ上２	4.2	2.92	0.7		75	ミＩ５－Ⅲ－１	5.0	2.320	0.8	
36	ミＦ４－Ⅳ５	先端部欠損	2.63	0.2		76	ミＦ２－22	4.3	2.330	0.8	
37	ミＥ４－31	5.3	3.41	0.9		77	ミＧ２－Ⅲ上２	先端部欠損			
38	ミＧ３－58	先端部欠損	2.28	0.3		78	ミＥ４－11	〃	3.430		
39	ミＧ４－27	5.7	3.45	1.2		79	ミＦ２－56	4.5	3.475		
40	ミＦ３－40	3.6	2.54	1.1							

(2) 亀　　卜

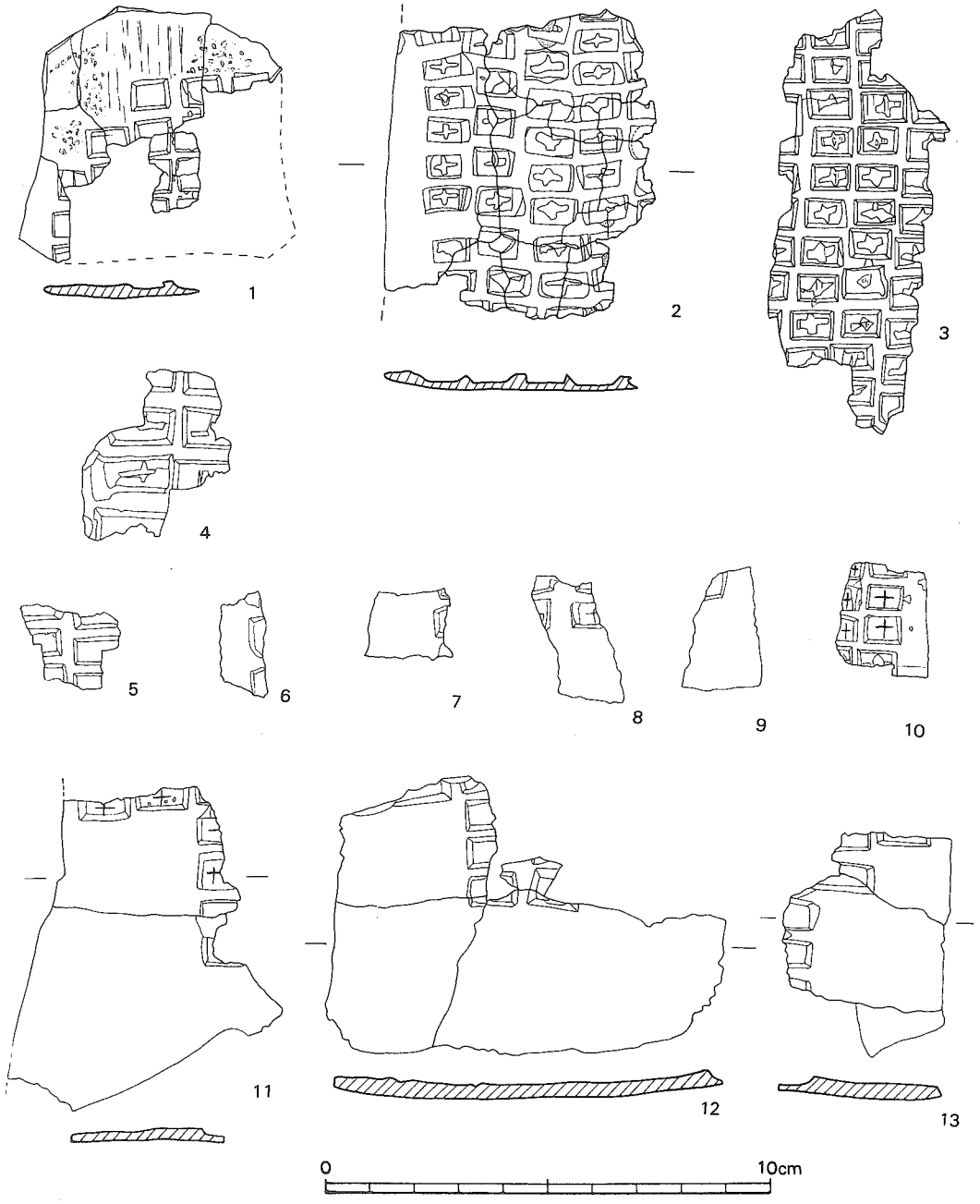
灼甲あるいは卜甲と呼ばれ、アカウミガメの甲羅および腹甲を用い、火で焼いてできた割れ目を見て吉凶を占う方法のことで、使用された亀甲は調査において鑽孔をもつ破片15点、未製品と思われるもの２点が出土している。

出土地点は、調査区全体にわたり、層位的にも上下の幅があるため、時期を特定することは困難であるが、６世紀末から７世紀を主体とした時期と考えられる。出土状況は、貝層や砂層からで、特別な出土状況は見られない。大形の破片は原位置で発見されるが、小破片についてはフルイにかかったものもあり、使用後に廃棄されたものと考えられる。

亀卜の名称、計測については、掘り込みを鑽孔と呼び、鑽のある方を裏面、ヒビ割れ面が入る方を表面とする。計測は現存する面を最大値とする。

1はタテの現存長5.7cm、ヨコ5.4cm、厚さ0.3cmを計る。裏面に内湾する。約半分が残り形状は不正形な八角形に削られ、将棋の駒形に近く鑽孔は10個残り、甲は緻密で堅く海綿質がわずかに残る。鑽孔の中は、焼灼の前に墨で十印に記された痕を留める。表面にヒビ割れは見られない。**2**は腹甲を利用し、海綿質が全体に残る。左側面はやや外開き加減で、タテ７cm、ヨコ６cm、厚さ0.4cmを計る。鑽孔は42個残り中には十印が焼灼され表面まで及び、ヒビの走り具合いは十分に読みとれたと思われる。**3**は外形が欠失し鑽孔の部分40個が残存する。焼灼はよく付けられ、くぼみをもち、表面にもはっきり出ている。タテ9.5cm、ヨコ3.5cm、厚さ0.3cmを計る。海綿質は全体に見られる。**4**～**10**は小破片である。**4**は他の鑽孔がヨコ0.9cm、タテ0.6cm内なのに対し、ヨコ1.5cm、タテ0.8cmを計り、大形のものである。焼灼痕は磨耗しておりはっきりしない。**10**は緻密で堅い甲を用い海綿質もあまり見られない。右側面がわずかに残るが、やや外開きで**1**の形状に近いと思われる。鑽孔の掘りはシャープで焼灼痕は残る。**11**は海綿質が全体に見られる。タテにゆるく湾曲し、左側面はやや粗削りで、内湾気味に整形されている。鑽孔はカギ型に配置され、多くの余白の部分が残っている。墨による十印が見られる。表面には自然の凹みが無数にある。タテ7.3cm、ヨコ６cm、厚さ0.3cmを計る。**12**は海綿質が全体に見られ、湾曲している。左側面は削られ、下端は甲羅の縫合部分ではずれており、削りの整形は行われていない。鑽孔はカギ型に配され、町は見られない。多くの余白を生じている。表面は自然の凹みが多く残る。タテ６cm、ヨコ8.8cm、厚さ0.4cmを計る。13は海綿質が全体に残り湾曲している。右側面は縫合面が削られている。鑽孔は階段状に残り、余白の部分が多い。タテ５cm、ヨコ3.7cm、厚さ0.35cmを計る。**11**～**13**の鑽孔の配置には共通点が見られ、素材も同じである。ただ**11**は厚さが薄く削り出されているのに対し、**12**・**13**は出土区が同じで、形態も似ていることから、左側面と右側面の一部と見られる。

壱岐卜部の出自については、横山順氏の稿を参照していただくが、ここでは出土遺物に関連



第29図　亀ト実測図（2/3）

して述べる。『延喜式』には、朝廷に出仕した卜部についての記述があるが、それによると、「対馬から十人、壱岐から五人、伊豆から五人の卜術優長者を取って卜部の事に任ず。」と記述され、対馬卜部、壱岐卜部、伊豆卜部が三国卜部と呼ばれ、のち京都に住みついた同族を京卜部といって、これらを合わせて四国卜部とも言われている。壱岐卜部については現在、その系譜をひくものは絶えているが、対馬においては現在でも対馬亀卜神事として伝承されている。厳原町豆酸の卜部岩佐家では、旧正月三日にサンゾロウ祭として亀卜が行われている。それによると、岩佐家に伝えられ保存されている古亀甲を供僧が祝詞をあげている間に炭火をかざすという形式だけになっている。亀甲は長さ約9cm、幅約6cm駒形を呈している。[註1] 本遺跡出土のものと比較すると、1に近い形である。材料となる亀の捕獲は一番遊泳する11月の初めに、朝早く体を清め、種々の伝統にのっとり、行われたようである。壱岐島では亀が産卵に適した砂浜は、数個所見られるが、遺跡の所在する地点も適地のひとつであり、地元の人の話では、亀が遊泳しているのを見たり、浜に打ち上げられたりするという。実際調査中にも体長1m余りのアカウミガメの死骸が眼前の砂浜に打ち上げられていた。

我が国における亀卜の出土は現在本例を含め6個所が確認されている。

①対馬上県町志多留貝塚[註2]　約2cm余りの小破片である。出土層位は第2層で河川の氾濫によると思われる二次堆積の可能性が強く縄文土器のほか弥生土器、寛永通宝など新しいものまで発見されている。

②神奈川県三浦市[註3]　間口洞穴　三浦半島南半部の洞穴遺跡。1区8層の4号墳墓覆土上面と6号墳墓上方攪乱部で古墳後期鬼高期。アカウミガメの腹甲を使用、鑽孔には十印の町がある。

③神奈川県横須賀市　鉞(なた)切洞穴　日向遺跡から1km程離れた海触洞穴で、アワビなども顕著に見られる。亀卜、卜骨も一緒に出土している。

④神奈川県浦郷町　日向（ひなた）遺跡　砂丘からの出土で、6世紀～7世紀を中心とし奈良平安まで出土。層位は攪乱を受けている。亀卜の出土は数点確認され、卜骨も一緒に出土している。

⑤横須賀市神明町　蓼原遺跡　古墳時代後期から奈良時代。海抜2m程の低い砂丘上に形成された遺跡で、シカ、イノシシの肋骨を利用している。

志多留貝塚の時期不明を除き、いずれも古墳時代後期6世紀～7世紀頃と見られている。

註1．対馬における亀卜資料、写真については、豊玉町教育委員会の小松勝助先生の御協力を得た。

2．坂田邦洋『対馬の考古学』　縄文文化研究会　1976

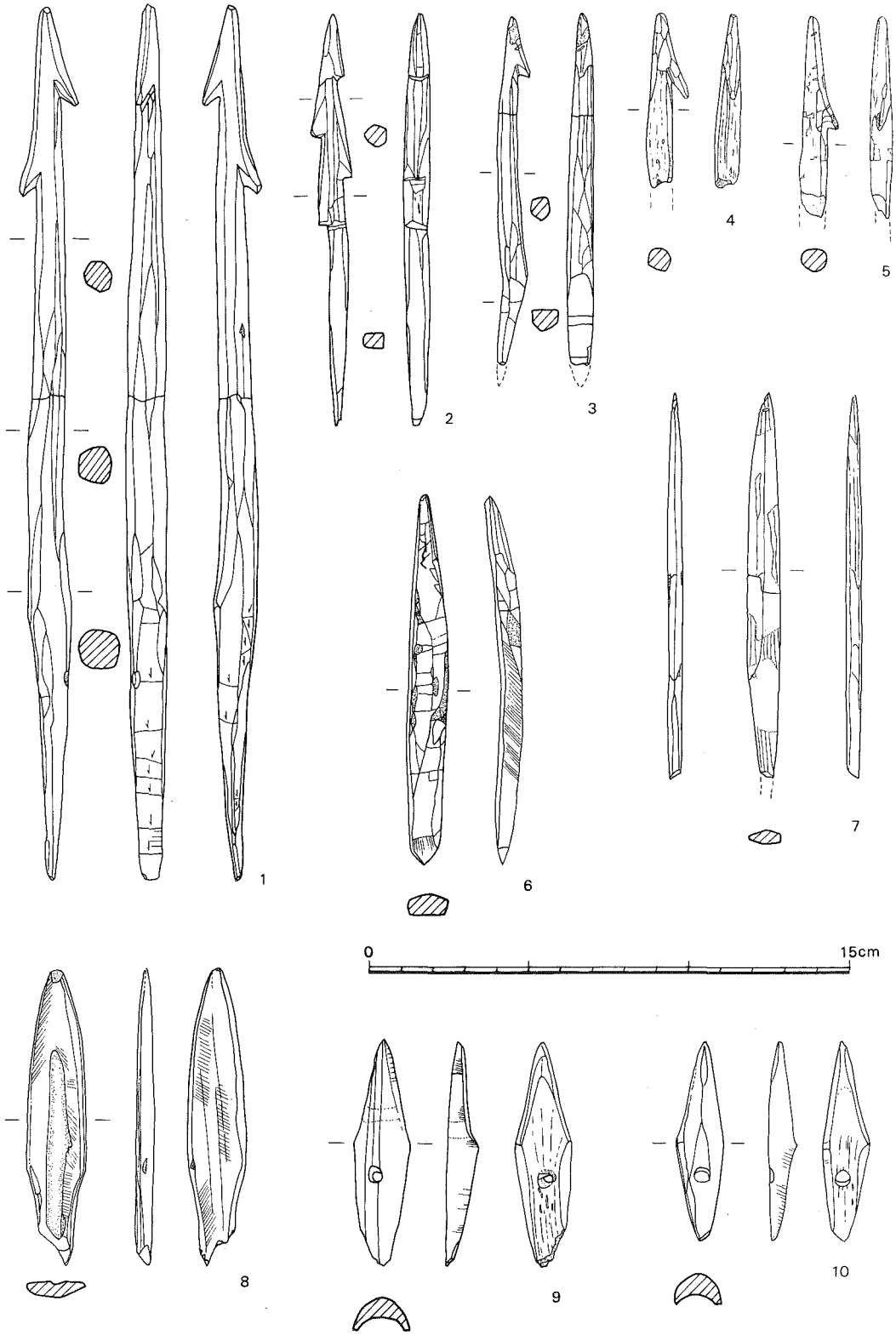
3．神奈川県下の出土資料については、横須賀市自然人文博物館の大塚真弘氏の御教示を得た。

(3) 骨 角 器

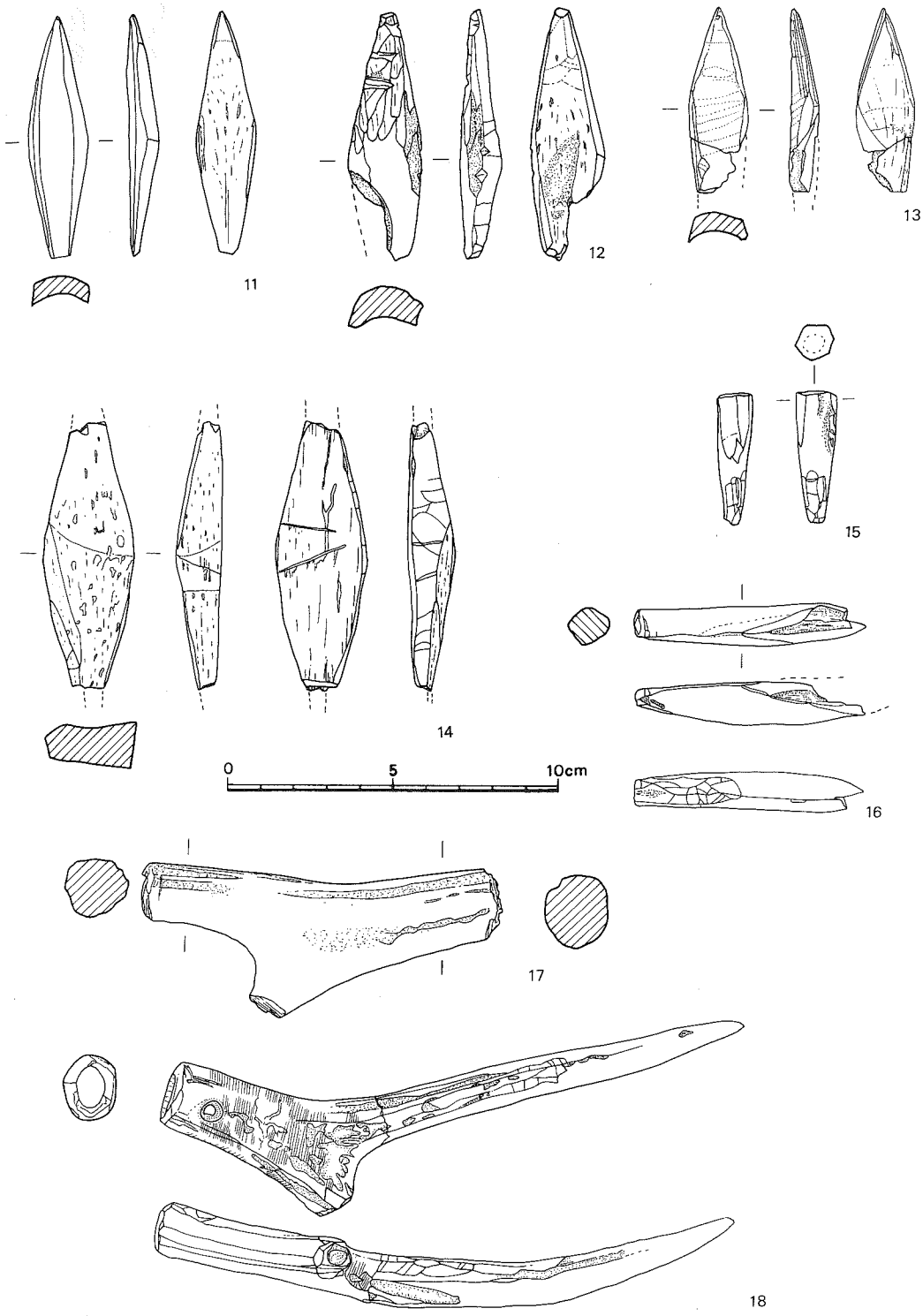
古墳時代の終りに位置ずけられる遺跡としては、鉄製品をしのぐ骨角器の出土があった。材質はイノシシやシカの他に鯨骨を多く用いていることも特徴としてあげられ、刺突具・刀子柄・漁具など漁撈具に関係したものが多い。

1～**5**は鯨骨製の銛頭である。特に**1**は大型で全長25cm、最大厚1.4cm重さ31ｇを計る。先頭部をわずかに欠失する。先端部から6cmの所に左右2段の逆刺を有し、両側から約1cm削ぎ出され、鎬が見える。体部中央は楕円状に整形され、基部は左側面を約8.5cm斜行するよう直線に削り、右側面は内側に反りをもつ形に仕上げ、端部は扁平になり尖る。着柄部角は主軸に対し8度。全体に金属器による削り出し痕が顕著に残る。**2**は段違いに4個の逆刺をもつ。尖頭部は右側面に片寄り、カーブを描く。かえしは下方に尖らず、約90度の角度に削り出されている。基部は両側から削られ断面方形を呈し、右側面は直線的に、左側面はわずかに湾曲し、着柄角は主軸に対しほぼ直線。長さ12.7cm、厚さ0.9cm重さ6ｇを計る。**3**は下端部を若干欠失している。先端部に近い部分に1個の尖る逆刺をもつ。体部はわずかに湾曲し、基部でゆるく「く」字形に屈曲するが、片側面はするどく削られ、断面かまぼこ型を呈し、着柄角は主軸に対し16度と大きい。**4**・**5**は逆刺が1段ついた先端部だけ残存している。**4**の逆刺は細く鋭利であるのに対し**5**はわずかな削り出しに終っている。断面は円形。

逆刺をもつ鯨骨製銛頭は、島内に所在する弥生時代中期を主体とした原の辻遺跡や同町内の後期を中心としたカラカミ遺跡からは、全長45cmに達する大型のものが出土している。**6**は鹿角利用の離頭銛である。鹿角の自然の反りを利用し、先端を細く尖らせ、尾部は太めに両側から削り出し尖らせている。側面は削りのあと研磨されている。索溝は見られないが、中柄がつけられたと思われる。長さ11.5cm、幅1.2cm、厚さ0.7cm、重さ9ｇを計る。**7**はシカ又はイノシシの管状骨利用の刀子状製品である。意識的に焼かれたのか不明であるが、暗黒褐色に変色し光沢がある。当初はヤスとして取り扱っていたが、よく観察すると、刀子と同じ性格をもつものではないかと思われる。先端は鋭利に尖り、両側はわずかにふくらみ、刃の部分は薄く研がれ、鎬がわずかに残るように研磨されている。棟の部分は幅0.3cmに平坦に削られるが稜線がかすかに残る。中心(なかご)も細く削られ、両端が平坦で刃部と区別されている。長さ12cm、幅1cm、厚さ0.5cmを計る。**8**は鹿管状骨利用の銛先である。半載した骨の割れ面を平坦に研磨しているが、わずかに凹が残されている。両側面は研磨で薄く仕上げ、先端部も尖る。基部は両側から削りこまれ一段細くなっている。長さ9.4cm、幅1.8cm、厚さ0.5cm、重さ8ｇを計る。**9**・**10**はどちらも鹿角を利用した離頭銛である。縄文時代もよく鹿角製の回転式離頭銛が作られているが、本資料はソケットは有しない型である。角質の堅い尖頭部から3cm下のほぼ中程に突起、あるいは逆刺を両側に設けている。断面はU字形を呈し、中央からわずかに下の部分に径0.4cm



第30図　骨角器実測図①（½）

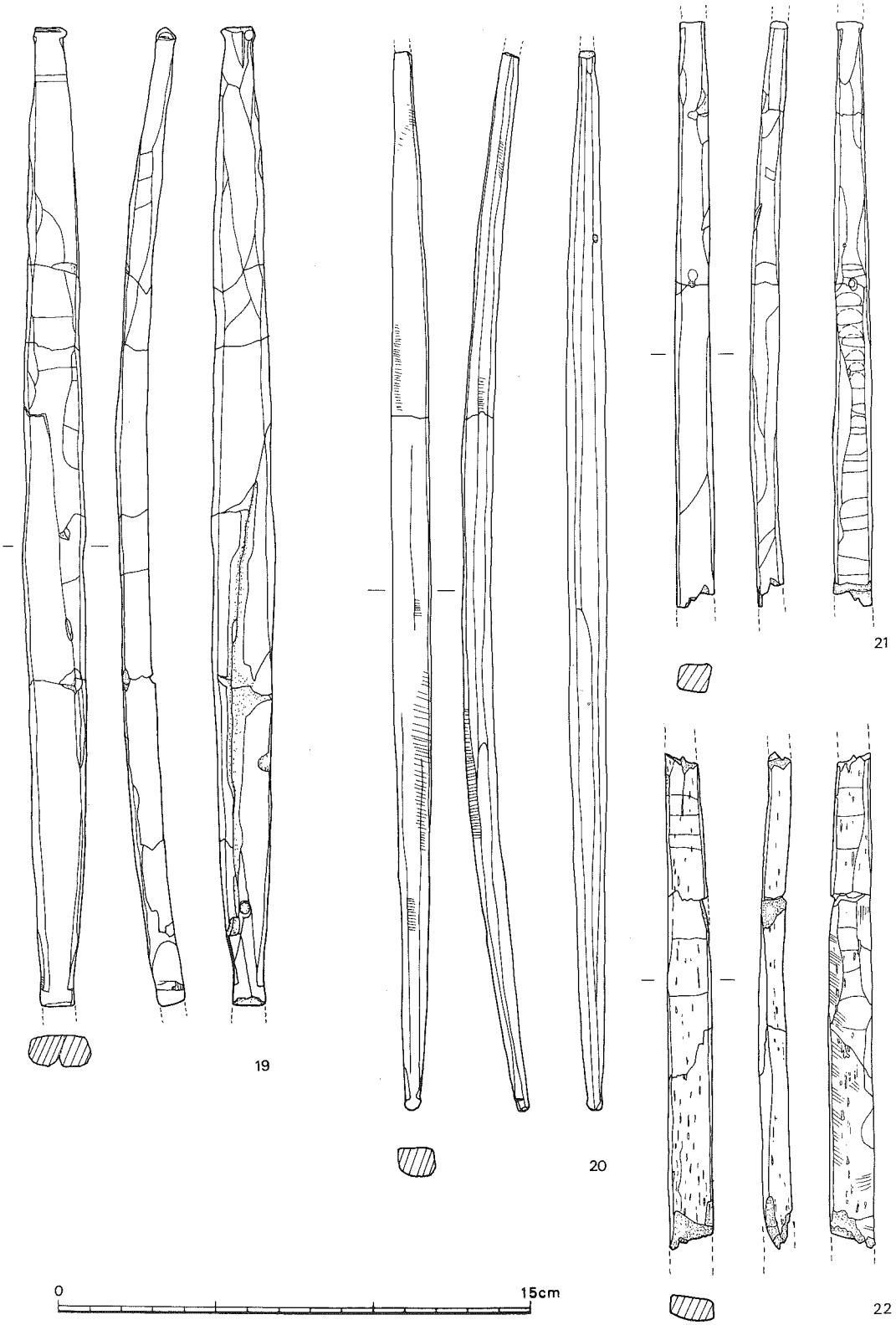


第31図　骨角器実測図②（½）

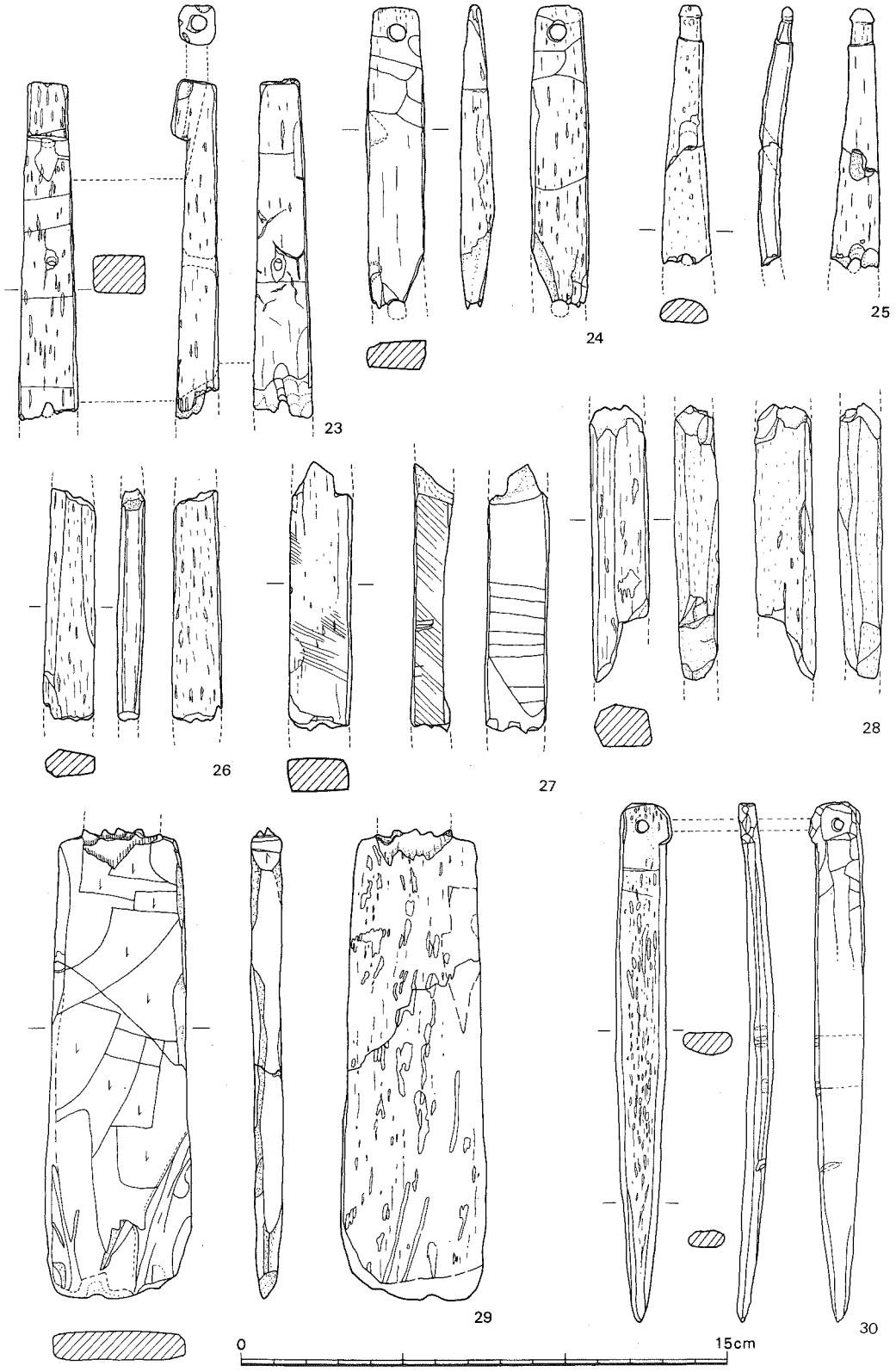
の孔を若干斜めに穿っている。U字にくぼんだ内面と孔にはわずかに鉄サビではないかと思われるものが付着し、金属性のものが結ばれた可能性もある。**11**は獣骨管状骨を利用した離頭銛と思われるが、**9**・**10**が突起と穿孔を持ったのに対して、両側面が垂直に削り落されているだけである。しかし先端部は鋭利に尖り、中央部をはさみ両端が屈曲する。形状は長い菱形を呈し、長さ7.4cm、幅1.7cm、厚さ0.6cmを計る。**12**はイルカ骨製と思われる。表面には細い縦縞が走り、内面は海綿質で仕上げが粗く雑である。先端近くに削痕が三個所見られ、中央部をはさみ両端が屈曲する。長さ7.5cm、幅2.2cm、厚さ1.0cmを計る。**13**は形状は前者と同じだが、先端部の鋭く尖った部分が残る。材質は獣骨管状骨を利用している。**14**は鯨骨製の離頭銛未製品である。仕上がりは前者と同じになるもので、全体が粗削りで整えられ、すでに中央の屈曲部も付けられている。一方の端部をわずかに欠くが、長さ8cm、幅2.6cm、厚さ1.4cmを計る。

15は鹿角を使用した用途不明の製品である。4cmの長さで切断され中央に穿孔を有する。側辺は粗く削られ面取りされている。二つの見方ができるが、一つには径0.6cm、深さ1.1cmの穿孔を持つことから、刺突具のソケットの役割りが考えられ、あるいはこの製品自体が尖頭器の役割を果すことが考えられる。**16**は全体がよく削られておりはっきりしないが、鹿角製の刀子柄と考えられる。割れて半分を欠失しているが、断面に鉄サビが付している。柄の端部は切断時の切傷が残り、3cm中程から斜めに削られている。**17**は鹿角の枝分れした部分を中央にすえ、両端部を刃物で切断しただけの未製品でおそらく刀子柄として利用しようとしたものであろう。長さ10cm、断面径2cmを計る。**18**は鹿角製刀子柄である。全体の表面を削り、なめらかに調整している。長い一角をそのまま残し、短い角を切り落している。中心(なかご)を入れる部分には孔を穿ち、孔は短角を切り落した断面まで達し、また柄の部分には目釘穴が1個穿たれている。長さ17cm、断面径2cmを計る。

19〜**30**はすべて鯨骨製漁撈具である。この中でも**19**〜**28**は細長の断面方形の特徴をもち同じ性格を有する道具と考えられる。**19**は完形品である。全長31cm、幅2cm、厚さ1.0cmの断面や平扁な方形である。全体はゆるく湾曲し、中央部がふくらみ、両端は削り込まれ細くなっている。端部はさらに内側に刻みが入れられくびれている。下端部から3cm上に穿孔が見られるが貫通していない。全体の形状はてんびん状を呈する。**20**は上端部を欠失するが、形状は**19**とほぼ同じである。断面はカマボコ形、材質は緻密な堅い部分を利用している。長さ33.6cm、幅1.2cm、厚さ0.9cm。**21**は約半分程で折れているが端部が削り出され、8cm内側に径0.3cm程の孔が貫通している。**22**も同様の破損部分。**23**は断面方形で角もシャープである。端部から1.5cm内側を0.4cm程削り落し、中央部にかけ徐々に斜行させている。先端部から削り込んだ突起の部分に孔が穿たれ、内側は溝状に残る。さらに5.3cm内側に0.2cmの孔が、折れ部にも細い孔が見られるが、向きは反対に斜行している。長さ10.5cm、幅1.9cm、厚さ1.2cmを計る。**24**は平扁方形の幅広の面を両側から薄く削り、舟形状を呈する。端部近くには0.5cmの穿孔がある。下端の折れ部にも穿孔が見られ、削りの形状からしてもあまり大きくならない。両端に2個の孔を持つことから



第32図　骨角器実測図③（½）



第33図　骨角器実測図④（1/2）

網の浮子の可能性もある。**25**は先細になる弓の失筈に類似する。端部の緊縛部と思われる所は細く削り出される。上端部しか残存してないが、内側4.5cmの部分に穿孔が斜めに設けられ、さらに3cmの距離に穿孔されている。断面はカマボコ形に近く、形態的には**21**に類似する。**26**～**28**は断面方形又はカマボコ形を呈し、直線的なことからこれまで説明してきた道具の一部分と考えられる。**29**は鯨骨を利用したヘラ状製品である。現存長は14cm、幅4.5cm、厚さ1.0cmを計る。断面は平扁な方形を呈し表面は削り痕が残るが、裏は海綿質の粗面となる。現存する上端部は両側から0.5cm削り込まれ、柄が付けられた痕をとどめる。下端は片刃状に磨耗している。**30**は鯨骨製で先端が細長く尖り、全体がゆるく内湾する。表面は自然の湾曲をそのまま残し、両端部だけに加工を加えている。裏面は平坦に削り、中央には海綿質の粗面が残る。幅広の端部には穿孔を施し、側面は刻みを入れて突起した頭部を作り出している。両側は削りのあと丸く研磨している。形状から漁網を補修する道具と考えられる。

以上説明した骨角器の他にも未製品や破損品、それに切離痕が明瞭に残る骨格部分などがある。串山ミルメ浦における骨角器は**1**～**11**にみられる銛先などの刺突具は、縄文時代の伝統を受け継いだ原ノ辻遺跡やカラカミ遺跡に見られ、弥生時代の手法をそのままとり入れている。**9**・**10**の離頭銛も、東日本で盛行した鹿角製燕形回転離頭銛の影響を強く受けていることがわかるが、かなり簡素化されている。この製品には鉄錆が付着していることから、鉄製品との組合わせが考えられる。鯨骨製の**19**～**28**の製品は、その用途については不明な点が多いが、紐くくり痕や穿孔があることなどを考慮すると、両先端に釣針をつけた漁具の可能性も考えられる。**24**は浮子の性格を有するが、類例は大瀬戸町串島遺跡に求められ、時期的にもほぼ同時代である。漁網の下部に取りつけ沈子と呼ばれ、現在でも磯たて網などに使用されるものと同じ性格のものであろう。北海道オカレンバウシ貝塚[註2]にも鹿角製のものが認められる。

アワビの出土が異常に多い中で、アワビ起しは鉄・骨角製ともほとんど皆無である。ただ**29**の製品が1点だけ指摘される。弥生時代のアワビ起しは幅が狭く、先端部が薄く尖るように作り出されるのが通例だが、本例は細い柄をつけていることから疑問も生じるが、一応ここではアワビ起しとしておく。

また**7**の骨製刀子は、意識的に焼を入れ、堅くし、刃物とするよりペーパーナイフ的な性格を有すると考えられるが、今後の類例を待ちたい。

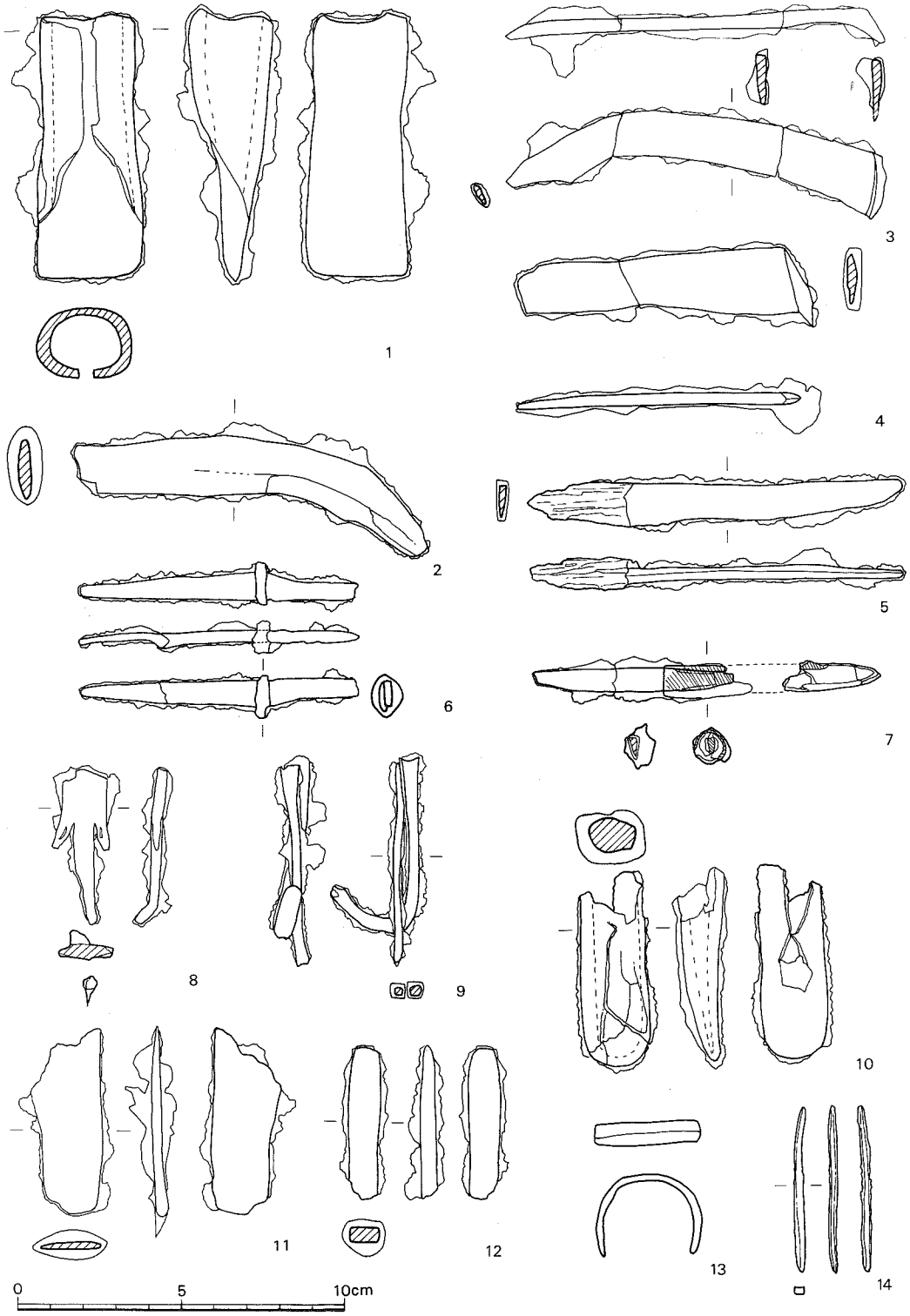
文　　献

註1　長崎県教育委員会　『串島遺跡』　長崎県文化財調査報告書　第51集　1980
　2　清野謙次　「釧路国厚岸町オカレンバウシ貝塚」日本貝塚の研究　1969

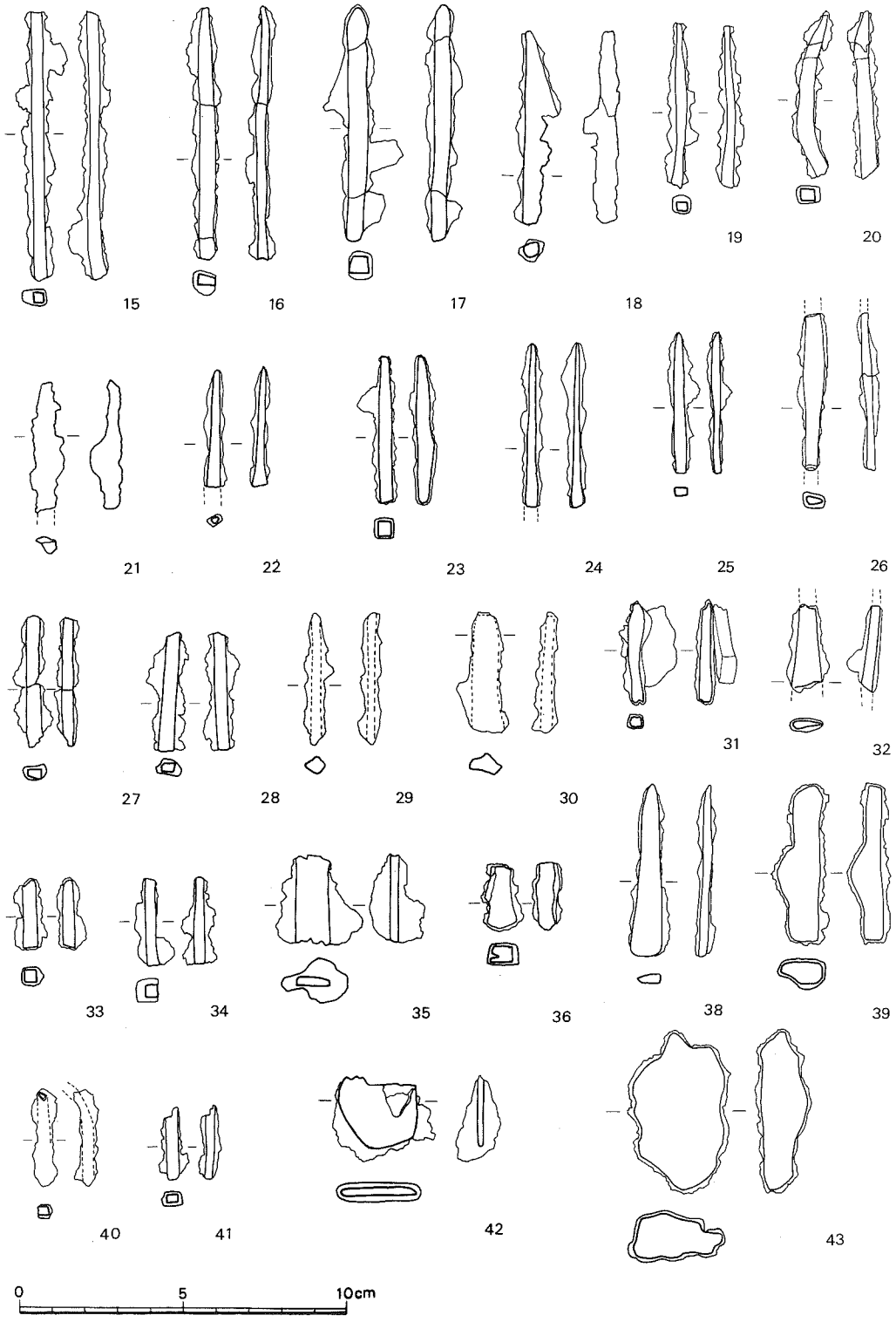
(4) 金 属 器

鉄製品は各層より出土した。大型のものでは斧から、小型の針状のものまで各種に及んでいる。海岸に面した砂丘内から出土ということもあり腐食は進んでいるが、原形を保っているものも数点ある。鉄製品6点については、長崎大学附属病院放射線部斎藤匠司氏[註1]にお願いして、X線撮影とともに、Fuji Computed Radiography（以下CRと略す）を利用して撮影していただいた。その結果、CRではX線撮影以上の成果が得られ、原形の細部について観察できる。CR写真については、図版26に掲載した。

1は完形の鉄斧である。全体がぶ厚い錆に覆われている。それでも柄を差し込む袋の部分はよく残され、刃先も両端から研ぎ出されているのがわかる。肉眼では外観しか窺い知れないが、CR写真をみると、袋の終る「ハ」字に開いた下の部分に、横一本の稜線がみられる。また錆が透け、原形が柄の部分で細くなり、刃に近くなるにつれ広がることが観察される。長さ12.2cm、幅4.9cm、袋の口径3.3cmを計る。（図版26②）**2**はほぼ完形の鉄鎌である。CR写真では基部が折れているもののカギ状の関（まち）部分がくっきり見える。刃先の近い部分でゆるくカーブし、先端は丸くなっている。刃部を区別する部分には鎬が入っていることもよく表われている。全長16.4cm、幅2.8cmを計る。（図版26①）**3**は基部が刃先に向って左横に折れ曲げられ、CR写真では先端部に近い所で前者より強く屈曲し、端部も尖っている。全体がわずかに蛇行しており、鎬も見られないことから、鎌とは別の用途を持つものかも知れない。全長17.3cm、幅2.4cm、厚さ0.6cmを計る。**4**は基部が斜めに折り曲げられ、両側はやや細くなりながら直線的に延び、先端部を欠失する。CR写真では鎬は見られない。両側が直線であることから、アワビ起しと考えられる。長さ12.9cm、幅3.2cm、厚さ0.7cmを計る。**5**～**7**は刀子である。**5**は切先もよく残り刀身は12.8cm、柄には木質が4cm程付着している。CR写真では刃こぼれが著しい。**6**の峯は直線的だが、刃の方は斜行し切先まで一直線である。柄と刃部を分ける部分に鉄製輪状の小さな鍔がはめ込まれている。柄の部分には木質部が付着する。長さ12.8cm、幅1.3cm、厚さ0.6cmを計る。**7**は5に類似する刀子で柄に木質部が残る。保存状態は悪い。**8**は逆刺の付いた銛先。主軸と本体がわずかに曲っている。銛先端は尖らず、わずかに左右に屈曲する程度である。CR写真では逆刺の内側に桶が彫ってある。また柄の先端は曲っているが、大部分にかつて木質に差し込まれた跡が影のように写っている。（図版26③）**9**は直線的な棒状のものと、釣針状に曲った製品が錆でくっついている。曲った方に逆刺は見られないが、釣針かも知れない。**10**は柄を差し込む袋状を有し、縦断面は半月状を呈し、先端は丸くなっている。かなり厚みのある器形で、銛先と考えられる。長さ8.8cm、幅3cm、厚さ2.2cmを計る。**11**は幅2.2cmの扁平な板状を呈するが、用途不明。**12**は棒状の半折れの製品で用途不明。**13**は銅製で径3.2cmの腕輪状に半円に曲る。幅0.9cm、厚さ0.1cmと薄い。外面中央はわずかに稜線が入り端部は一方がやや尖り気味に



第34図　金属器実測図①（½）



第35図　金属器実測図②（½）

丸く、片方は隅丸になっている。CR写真では文様も何も入らない。**14**は銅製で長さ7.5cm、幅0.3cmの断面方形を呈する。両端は細くなり針状に尖る。ほぼ直線的で用途不明。

その他の鉄製品

15〜**42**については棒状のものと扁平なものに分れるが、いずれも原形を特定し得ないので用途不明として一括する。

出土鉄器の中で斧は、製塩その他の生産を行うには、燃料を得るための必需品であり、鎌はここでは藻刈りに使用されたと思われる。アワビ起しは明確なものを欠くが、骨製、鉄製を含めて多く使用されたことであろう。釣針は完形品の出土は見られなかったが、当然使用されていたはずで、保存状況の悪さから確定できない。いずれにしろ、鉄製品もかなりの種類と量が使用されていたことが窺われる。

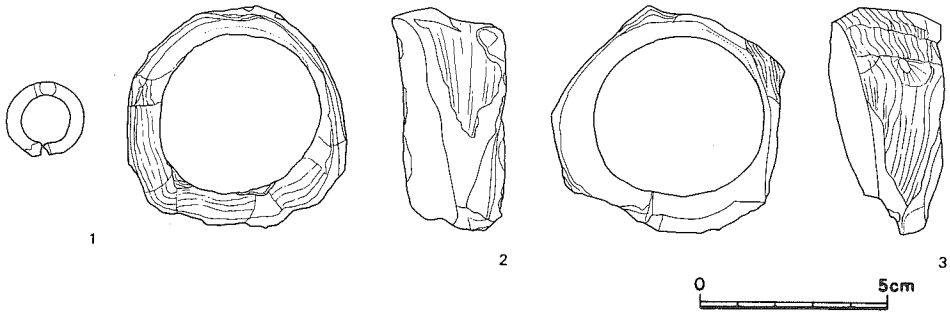
註1　斎藤匠司他「美津島町かがり松鼻遺跡出土「把頭飾」のエックス線撮影について」　美津島町文化財調査報告書第3集　1988

(5) 装　飾　品

1の金環はF3区V層から出土した径2cmでやや小ぶり。保存状態は極めてよく、わずかに端部が腐食しているだけである。なお周辺に遺構はなく単独の出土である。

2、**3**は巻貝を利用した貝輪である。殻高の中央部を切断し結節の突起は削られている。内径4.6cm、外径5.5cm。側面長は2.7cmと0.9cmを計り台形状を呈する。2点とも貝層中からの出土である。

註　貝輪については脱稿後札幌医科大学解剖学第二講座助手、大島直行氏から夜光貝製ではないかと指摘を受けた。現地点では専門家による同定はしていない。



第36図　装飾品実測図（½）

Ⅳ まとめ

串山ミルメ浦遺跡の調査は、今回を含めて2回にわたり実施された訳であるが、遺跡の範囲や捉え方については、違った面が出てきている。前回の調査が砂丘上の中央から南側寄りに試掘壙を点々と入れたのに対し、今回は、砂丘のほぼ中央部に面的な拡がりをもつ調査区を設定した結果、豊富な遺物と、遺構の検出を見た訳である。

しかし今回の調査の指針となったのは前回の調査の結果であり、特に指摘されていた把手土器の多さと、アワビ貝殻出土の豊富さという点に着眼点を置いて調査に望んだ。発掘を進めて行くと、遺物の量は予想をはるかに越えるものであり、遺物包含の状況は極めてよいことが判明した。また遺物堆積も上層・中層・下層の3層に大別され、貝層も全体的に観察された。

土器については、前回縄文時代の並木式土器が出土しているが、今回は出土していない。壱岐島における縄文土器の出土は、多くはないが、発見が相次いでいる。昭和58年発掘調査が行われた郷ノ浦町所在の名切遺跡[註1]は並木式や鐘崎式、晩期の土器など数多く出土した代表的な遺跡と言えよう。また湯ノ本湾に面する松崎海底遺跡からも中期の土器が出土しており、関連性が指摘されよう。

陶質土器は1点の出土があるが、前回も縄蓆文の粗く深いタタキを有する土器の出土がある。調査範囲が拡がれば、類例も増加すると思われる。

出土土器の中で多くを占めるのは土師器と須恵器である。量的には土師器が多い。甕、壺が多いが、壺には粗い格子状のタタキを施されたものが目立ち、把手を有するものもある。土師器には古式土師の段階を示すものも見られ、6世紀～7世紀に位置付けられよう。須恵器の出土も多く、坏、高坏、甕が中心で、蓋坏のものも見られる。坏については窯印をもつものも多く多様性がある。須恵器の主体は5世紀後半のものが若干と、6～7世紀に主体をおき、8世紀前半まで続く。

金属器は鉄器が主である。ＣＲ撮影ではその詳細まで知ることが出来るが、漁撈と深くかかわっていたことが窺える。鉄鎌や、銛先の存在がそれである。鎌は海藻を刈る道具として必需品であり、斧は燃料を確保する上で欠くことの出来ないものであったろう。

串山ミルメ浦遺跡の特徴を最もよく現わしているのはアワビの出土量の多さを別にして、骨角（格）器と亀卜の出土があげられる。

骨角器は古墳時代になると、西日本では急速に生産が衰え、鉄器が主体になる傾向が一般的であるが、ここでは縄文、弥生の伝統を受け継ぎ、精巧なものが作られている。現在壱岐島内には野性のイノシシ、シカは絶滅して生存していないが、骨角器には素材として利用されている。大型の骨角器には海獣骨が利用され、特にクジラ骨の使用が顕著である。使用不明の骨角器も多いが、そのほとんどは漁撈に関係したものであろうことが推察される。

亀卜については、先に述べたような「延喜式」の中に国家の中で重要な役割りを果していた

ことが明確であり、今回の出土は史実が裏付けされたことになる。現在、神奈川県では三浦半島の海触洞穴を中心にト骨（亀トを含む）の類例が増加している。三浦市間口洞穴・同海外洞穴、横須賀市芦名遺跡[註2]、同市蓼原遺跡[註3]、同市鉞切（なたぎり）遺跡[註4]などである。亀の甲を用いたものが多いなかで、イルカの肋骨を二つ割にして利用されたものまである。

本遺跡の亀トの出土状況は、いずれもバラバラに出土したもので、占に使用された後に廃棄されたものと思われる。

対馬における亀トの出土は志多留貝塚の１例のみで時期的に不明な点があるが、現在まで亀ト神事の伝統は受け継がれてきている。しかし現在は形式的になり、簡略化されている部分がかなりあるようである。図版27は小松勝助氏より提供していただいた、対馬に伝わる亀トの写真であるが、出土品と比較してみると、鑽の配置や形状の違いがよくわかる。しかし占の対象については、さほど変化はなかったと思われる。

出土自然遺物については獣骨類と貝殻類、魚骨類に大別される。専門家による分類を行っていないが、獣骨ではシカ、イノシシ、ウサギ、イヌが見られる。また海獣のイルカ、サメ、クジラ類の出土量も目につく。貝類は数十種類にのぼるが、なかでもサザエ、アワビが突出している。貝殻腕輪が２個出土したが、夜光貝製品かも知れない。

アワビ、サザエ、サメについては、その商品性の高さから律令制以後、調として貢納されたことが延喜式に見られる。特にアワビはその中で珍重され、重要な地位を占めている。肥前風土記には「長蚫・鞭蚫・短蚫・陰蚫・羽割蚫」と記され、延喜式にも「御取鰒・玉貫鰒・薄鰒・鞭鰒・都々枝鰒」など40種に近いアワビの製品や料理が記されている[註5]。保存のためにはアワビは干しアワビにされるが、その工程ではカマによってゆであげられる。儀式にも使用され、熨斗アワビはその最たるものということが出来よう。串山ミルメ浦遺跡が、こうした海産物加工を目的とした、かなり組織的に造りあげられた機構であり、中央とも結びついていた専門的漁業者集団と支配者層の豪族の実態が、周辺の古墳群の存在からも推察されるのである。

註１　安楽勉　『名切遺跡』　長崎県文化財調査報告書第71集　1985

２　横須賀市立博物館大塚真弘氏からはこの他日向遺跡や、鉞切遺跡Ｅ地点、鎌倉市由比ガ浜遺跡でも未発表ながら亀トが出土している御教示を得た。

３　横須賀市教育委員会　『蓼原』　横須賀市文化財調査報告書第13集　1987

４　横須賀市教育委員会　『鉞切（なたぎり）遺跡』―Ｃ・Ｄ地点の調査―　横須賀市文化財調査報告書第12集　1986

５　矢野憲一　『瑞垣』　熨斗あわび考―なぜあわびはめでたい神饌か―　1988

壱岐の卜部

壱岐郷土館長　横山　順

■骨を灼いて卜う

『魏志』倭人伝には、倭人は「その俗に、事を挙げて行来するときに、云為することがあれば、輙ち骨を灼いて卜い、以て吉区を占って、先ず卜いのでた所を告げる。その辞（卜の辞）は令亀の法の如く（中国の亀卜法のように）、火でできた坼（割け目）を視て兆（吉凶）を占う」と述べている。これは魏の使者が得た3世紀中葉の倭国の知識の一端である。この卜占は倭人一般の習俗のように今日では考えられているが、この俗を伝えた使者は、対馬・壱岐において見聞したものに違いない[註1]といわれている。

骨卜の法はユーラシア大陸に広く分布し、中国では新石器時代の竜山文化期ごろから始まったとみられ、殷代に至って盛行する。その素材は牛・羊・豚・鹿などの肩甲骨で、殷代に亀甲が加えられる。殷の甲骨文字は卜占に用いた亀甲や牛骨の上に刻された文字である。卜占の目的は国事に関する決定を行うために行ったことが明らかにされている。焼灼の手法はわが国のそれとは違いがみられるが、基本的には共通している。

壱岐の弥生時代中期から後期にかけての遺跡であるカラカミ・原ノ辻の両遺跡からは、倭人伝の記述を裏付けるように、卜骨（鹿と猪の肩甲骨）16例が出土している[註2]。

壱岐に卜骨による卜占の法が伝わった時期については、木村幾多郎氏の考察がある[註3]。木村氏は壱岐の弥生遺跡の出土遺物が急激に石器から鉄器の時代に移り、中国後漢代の遺物や無文土器もみられることから、朝鮮半島の影響を受けたと考えられるが、影響を受けたというより朝鮮半島南部と同じ文化圏に属していたとして、「壱岐島（日本？）の卜占風習は水稲耕作に文化複合して流入したと考えるより、このような中期後半から後期にかけての情況の中に、朝鮮半島南部から対馬・壱岐にかけて（北部九州の一部も含むか？）卜占風習が広まったと考える方が現状では妥当性を持っている」と述べている。

■卜骨から卜甲へ

ところで、わが国の古伝では骨卜は太占と呼ばれ、はじめは鹿の骨を用いたが、のちには亀甲になったと伝えている。

『古事記』の国生みの段に、伊邪那岐神・伊邪那美神が、はじめに蛭児が生まれたので天神に報告したところ、「天つ神の命以ちて、布斗麻邇爾卜相ひて」とある。同じ話を『日本書紀』一書（第四段）第一には、「天神、太占を以て卜合ふ」とあって「太占、此をば布斗麻爾と云ふ」の訓注がある。『古事記』の天之岩屋戸の段には、「真男鹿之肩を内抜きに抜き而、天ノ香山之天之波々迦を取り而、占合ひ麻迦那波令メ而」（雄鹿の肩甲骨をそっくり抜き取って、波々迦〈朱

桜、ウワミズザクラの異名〉を用意して)、垂仁記にも「布斗摩邇々占相へ而」などとみえている。『釈日本紀』五述義の巻に、太占を「上古之時、未レ用二亀甲一、只以二鹿肩甲一而用也、謂二之ヲフトマニ一」と注して、『亀兆伝』という鎌倉時代以前のものとみられる古書を引いて、太占から亀卜に転じた説話を伝えている。『亀卜秘伝』に「今骨ヲ用ヒザルコトハ、灼タルヒビレ目ノ、亀甲ニテハ見安キユエナリ」と亀甲は焼いたときの響目（割け目）が鹿肩より見やすいという単純な理由で、鹿骨から亀甲に変ったことを説明している。

■卜　部

律令官制で朝廷の祭祀を執行し、諸国の官社を総管するなど神祇行政全般を管掌したのが神祇官である。わが国の神祇信仰の中枢を司るこの中央官庁は、伯（長官）を筆頭に大副・少副・大祐・少祐などの職掌のほかに、伴部として神部や卜部などがいた。卜部は主として卜兆、すなわち卜占（亀を灼き、吉凶を占う）によって神祇官に奉仕した専門職の職員である。

『延喜式』臨時祭、宮主卜部の条に、

> 凡そ宮主は卜部の事に堪うる者を取りて、之に任ず。その卜部は三国にて卜術に優長なる者を取る。伊豆五人、壱岐五人、対馬十人。若し都に在る人を取るは、卜術群に絶するに非ざれば、輙く充つるを得ず。(原漢文)

とみえ、伊豆５人、壱岐５人、対馬10人の定員20人であった。

『新撰亀相記』には、

> 四国卜部在二数氏一焉、伊豆国卜部五人、一氏（卜部并伊豆国嶋)、壱岐嶋卜部五人、二氏（卜部并土也、其卜部在二門、家記具之)、対馬嶋卜部十人、三氏(上県郡五人、直并卜部氏、下県郡五人、直・卜部・夜良直也)、惣廿人。

とあり、伊豆・壱岐・対馬の三国に卜部がおり、神祇官の宮主・卜部に任ぜられたものは卜部氏のほか、伊豆では嶋直、壱岐では土、対馬では上県・下県両郡の直、下県郡の夜良直（与良直）の諸氏であった。

卜部の構造を知るための最も古い史料といわれる『令集解』巻二職員令には、

> 古記に云う、別記に云えらく、(中略)津嶋上県国造一口、京卜部八口、厮三口、下県国造一口、京卜部九口、京厮三口、伊岐国造一口、京卜部七口、厮三口、伊豆国嶋直一口、卜部三口、厮三口、斎宮卜部四口、厮二口、伊岐二口、津嶋二口、伊豆二口、国造直丁等各厮一口を給す。亦常食を給す。卜部等及び厮直の身課役を免ず、亦常食を給す。彼れより点じ上せて、京戸に事うる厮は、給する莫し、課役を免ず。(原漢文)

とあり、壱岐は国造の同族の卜部１人、国造支配下の在京の卜部７人がみられる。京卜部が国造に引きつれられる仕組になっているのは、それぞれの国から京に出て住みついた卜部であるからであろう[註4]といわれている。

卜部の中から宮中の主要な神事を司り、天皇・皇后・東宮などに候する宮主が補任されている。宮主には神祇官宮主、東宮宮主、皇太后宮主、太皇太后宮主、斎宮宮主、斎院宮主等が知

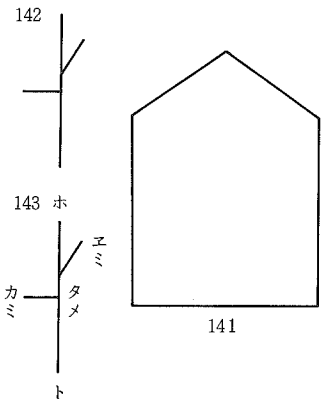
られる。『延喜式』臨時祭、宮主卜部の条に、「凡そ宮主は卜部の事に堪うる者を取りて、之に任ず。その卜部は三国にて卜術に優長なる者を取る」とある。「卜術に優長なる者」とは、卜術に優れている者の意で、亀卜長上を指すとみられている。宝亀6年(775)には、亀卜に長じた者二人を亀卜長上に任ずることが定められている。

宮主は清和天皇の御代、卜部(伊岐宿禰)是雄が任ぜられ、以後その子孫がこれを世襲したといわれている[註5]が、これは否定されている。宮主は伊豆・壱岐・対馬の三国の卜部より出て、決して一氏族の世襲ではなくて、伊岐氏、直氏、卜部氏が各々その任に当たった[註6]といわれている。

■亀　卜

弥生時代の卜骨は、鹿や猪の肩甲骨などの骨面を、直径5～6㎜ていどの大きさに点々と焼いて、裏面に走るひび割れの形を見て占った。これに対して古墳時代以後の亀卜は、亀(赤海亀といわれる)の腹甲を焼いて、これも裏面に生じた焼けひびの形で吉凶を占っている。壱岐出土の卜甲を見る限りでは、卜甲の形、大きさは一定しないように思われるが、亀卜の概要等については、以下に藤野岩友氏の文章[註7]を引く。

よく曝した亀甲を、その大きさは必ずしも一定しないが、大体縦10cm、横6cm、厚さ1cmほどの図1の形に切り、よくすり磨いておき、占うときに甲の裏側に縦1.5cm、横1cm、深さ0.8cmほどの長方形の穴を幾カ所も掘り、その穴の内に縦横に図2のような形を墨または小刀の先でしるす。これを町形という。町形には図3のようなまじないの符号(ト、ホ、カミ、エミ、タメ)をつけておく。次に「ははか」という木の枝を炉中の聖火で燃やしたのを町形にあてて、息を吹きかけながら火勢を強めて焼くと、町形の部分の甲の表面にそれぞれ卜兆(ひび割れ)が現われる。それと同時に細く割って指で三つ折りにした兆竹(さましたけ)で水をすくい、甲の表面に上の方から下にかけて三カ所に水滴をたらす。そうすることにより卜兆がはっきり出るから、その形状を見定め判断の基準に照らして吉凶を決める。亀卜を行う前には、数日間斎戒して卜庭の神を祭り、当日には祝詞を読み、神降ろしの詞を唱えてから占いを始める。



『国史大辞典』第4巻より

■卜部の成立

壱岐・対馬の亀卜が中央に進出し朝延祭儀に入った時期については諸説がある。竹内理三氏は『日本書紀』顕宗天皇三年二月、月神の神託によって高皇産霊(たかみむすびのみこと)に山城葛野郡の地を献じて、壱岐県主の祖押見宿禰(おしみのすくね)に祠らしめた説話ができたころであろう[註8]といわれる。顕宗天皇は雄略天皇の次の清寧天皇4年の治政の後に立った天皇である。雄略天皇は、中国の史書『宋書倭国伝』

に466年に位についたと伝える倭王武である。倭王武は宋の皇帝に倭国を平定したと報じた人で、倭王武に至って、大和朝廷の全国統一がほぼ完成したこの時期は、壱岐・対馬の神々が中央に遷祀されるには、ふさわしい、との考えである。竹内氏はこの説話について「『魏志』倭人伝以後、ヤマト朝廷の半島経営開始後に、対馬の古族がこれ（亀卜）を半島から伝え、それをさらに中央にもたらしたもので、顕宗天皇三年二月・四月の記事は、そのことを説明した伝説であろう[註9]」と述べている。また平野邦雄氏は「壱岐・対馬には大陸の帰化人がもたらす亀卜を業とするものが四、五世紀ごろからいて、トモノミヤツコ中臣氏の成立とともに、その支配下のトモとなり、職能の名を負うて卜部となったものであろう。その時期はやはり六世紀であろう[註10]」といわれる。一方平野博之氏は「東国占部の成立期は、古くとも常陸・下総・武蔵などが大和朝廷の支配下に入った後のはずであり、その時期は早くとも五世紀末から六世紀にかけての頃であろう。この東国占部の成立に際して中央の中臣氏が、それを管する上級伴造となったのではあるまいか。中臣氏伝承の卜占に対する関係の深さや、そのはじめが鹿卜であったとする太占伝承の存在がその事を裏付けるかの如くである。それがやがて六世紀から七世紀の初めに至って（崇峻・推古朝）対馬・壱岐の亀卜の卜部に転換したのではなかろうか[註11]」といわれる。

壱岐・対馬の卜部は、中央の中臣氏に率いられて朝廷祭儀に加わったという考えのようである。竹内氏は「対馬、壱岐の卜部は共に半島から亀卜法を伝えて業としていたので、中央の神祇界で勢力のあった中臣氏を祖と仰ぎ、卜占の神事をつかさどるところから国造として遇せられたのであろう[註12]」と推察している。

■壱岐の卜部の始祖

『三代実録』貞観5年（863）9月7日丙申の条に、卜部（伊伎宿禰）是雄と業孝の「その先は雷（いかつ）大臣命より出ず」とある。雷大臣命は『尊卑分脈』に「仲哀天皇の代、大兆の道を習い、亀卜の術に達し、姓卜部を賜い、其事に供奉」したとある。『松尾社家系図』（『続群書類従』による）には雷大臣命（烏賊津使主）を「天児屋根命（あめのこやねのみこと）11世孫、中臣（なかとみ）、大中臣、卜部、伊伎、藤原等の初祖なり。神功皇后の御代、四大夫の内随一。仲哀天皇に仕え亀卜を業とし、本姓中臣を改め卜部姓を賜わる。これ卜部姓の初めなり」と記している。この雷大臣命の子が壱伎直真根子である。

『日本書紀』応神天皇9年4月条に、武内宿禰（たけのうちすくね）が筑紫にあった時、弟の甘美内（うましうちの）宿禰の讒言（ざんげん）によって官兵のため殺害されようとした。その時、武内宿禰の忠誠を知っていた真根子が、たまたま容姿が似ていたことから武内宿禰に代って死んだ。宿禰は朝廷に至り、甘美内宿禰と対決して冤（えん）をそそぐことができた。真根子は『松尾社家系図』によれば、母は武内宿禰の妹といい、神功皇后の時、父に従って三韓に赴き、帰朝の後壱伎島に留まって三韓の守りに任じた。よって子孫はその本姓により或は中臣と称し、卜部と称し、或は地名により壱伎と称した。壱伎直の祖真根子といわれるゆえんである。

『三代実録』貞観14年（872）4月24日癸亥の条の是雄の卒伝には「始祖は忍見足尼命（おしみのすくねのみこと）」とみ

えている。忍見足尼命は『松尾社家系図』では、「天児屋根命十八世孫、山背・壱岐・対馬等の卜部の遠祖なり」とあり、忍見足尼命（押見宿禰）が壱岐島より山背国葛野郡歌荒州田の地に遷り、その地の元祖となるとみえる。これは『日本書紀』顕宗三年二月の条の説話と同じである。壱岐・対馬のその全文を挙げる。

顕宗三年の春二月の丁巳の朔に、阿閉臣事代、命を銜けて、出でて任那に使す。是に、月神、人に著りて謂りて曰はく、「我が祖高皇産霊、預ひて天地を鎔ひ造せる功有します。民地を以て、我が月神に奉れ、若し請の依に我に献らば福慶あらむ」とのたまふ。事代、是に由りて、京に還りて具に奏す。奉るに歌荒樔田を以てす。歌荒樔田は、山背国の葛野郡に在り。壱伎県主の先祖押見宿禰、祠に侍ふ。

夏四月の丙辰の朔庚申に、日神、人に著りて、阿閉臣事代に謂りて曰はく、「磐余の田を以て、我が祖高皇産霊に献れ」とのたまふ。事代、便ち奏す。神の乞の依に田十四町を献る。対馬下県直、祠に侍ふ。（岩波古典文学大系『日本書紀』の訓読による）

大和朝廷が任那に遣わした使者、阿閉臣事代が、壱岐・対馬を通過した際に、月神が人にのりうつって、「わが祖である高皇産霊は、あらかじめ天地を創造した功労がある。人民の土地を、わが月神に奉れ。もし要請どおりに、われに献じれば、福慶があろう」[註13]との神託があって、それを事代は京に帰って奏上した。これによって高皇産霊は壱岐・対馬から中央に遷祀されたというのである。

高皇産霊神（『古事記』は高御産巣日神と書く）は、天地開闢の時、高天原に成りませる三柱（造化の三神）の一神である。名義は、「むす」は生成、生ずる。「ひ」は神霊、霊威。これに高大さを表す「たか」がついたもので、宇宙の生成を掌る神の意味を持つという。上記の顕宗三年の説話に「天地を鎔ひ造せる」（天地を創造）とあるように、創造神としての機能を持つことを示している。別名高木神ともいわれ、記紀の天孫降臨や神武天皇の東征の説話では、高天原の最高神格として、皇祖神天照大神とならんで重要な役割を果している。こうしたことから天照大神よりは古い皇室本来の神で、大和朝廷の貴族たちの奉じる生産の神、農耕神ではなかったかともいわれている。日本神話で極めて重要な位置を占める神が、壱岐・対馬から京に遷祀されたのである。

そして山城国葛野郡の地を献じて、壱伎県主の祖押見宿禰に祀らしめたのである。壱岐の県主が祀る月神、すなわち月読神社の分祠ということであろう。かくて高皇産霊神の山城への移祀を奉じて、山城に移った壱伎氏は、松尾社の社家伊伎氏として中央における卜部の活動の中心となるのである。

■雪連宅満・古麿・益麿・真次

『万葉集』巻15には、天平8年（736）6月に新羅へ旅立った、阿倍朝臣継麻呂を大使、大伴宿禰三中を副使とする遣新羅使の一行の作歌と古歌など145首が収めてある。大使は病没、新羅は使いの旨を拒否するなど不運な使節団として知られている。この中に壱岐で鬼病にあって死

亡した雪連宅満（雪は伊伎・伊吉にもつくり、名も宅磨・宅麻呂ともつくる）を悼む挽歌9首がある。その一つに六鯖（六人部連鯖麻呂）の作とみられる長歌がある。

わたつみの　恐き道を　安けくも　無く悩み来て　今だにも　喪無く行かむと　壱岐の海人の　上手の卜部を　かた焼きて　行かむとするに　夢の如　道の空路に　別れする君

（3694）（岩波古典文学大系『万葉集』の訓読による）

宅満は『松尾社家系図』によれば、従五位上宮主、月読宮長官、伊伎島司などとある。使節の一行には卜部として従っていたと考えられており（卜占を司った伊伎氏は姓が直で、連姓ではない。連姓は帰化人系統の人とみて、一行に加わったのは帰化人の才能を生かした書記とか通訳の仕事をしたのではないか[註14]という説もある）、それで長歌の「上手の卜部を　かた焼きて」の「かた」は、卜骨、卜甲のいずれによって行われたのか判断が分れる。「鹿の肩か、形すなわち兆か断言できない[註15]」といい、『正卜考』は、実際は亀卜を行ったのであろうが、古くより卜占（鹿卜）で名高い島なので、可多夜伎弖（肩灼きて）としたのであろうと考えている。骨卜の風習の伝統を思うと、亀卜ではなく、鹿の肩甲骨による卜占であった可能性がある[註16]とも考えられている。

『松尾社家系図』によれば、天児屋根命23世綱田の子に古麿（古麻呂にもつくる）がみえる。「詩を工みに賦す」と記し、『懐風藻』の五言の「五八の年を賀く宴」1首を載せている。『懐風藻』には、従五位上、上総守伊伎連古麻呂とある。慶雲4年（707）5月、遣唐使（大宝2年〈702〉6月、第7次）の一員として絶域に使いした功により、綿絁布鍬を賜わったと『続日本紀』にみえる。この古麿の子が宅満である。

宅満の子は益麿（益麻呂にもつくる）で、『松尾社家系図』には、従五位下、大外記、神祇官宮主とある。『続日本紀』によれば、遣渤海副使、天平宝字6年（762）10月、渤海に至り、同国使以下23人を伴って帰朝したとある。時に正六位上。同年12月、外従五位下に叙せられ、同7年、大外記となった。

益麿の子は真次で、『松尾社家系図』によれば、宮主、従五位下、伊賀守、鼓吹正或真継とある。『続日本紀』には、天平神護2年（766）正月、銭百万を献上したので、外従五位下を授けられ、神護景雲2年（768）2月、鼓吹正に任ぜられたとある。『松尾社家系図』によれば、真次の後、子の氏麿、墨継、益業の三系統に分かれる。氏麿の系統は月読宮長官、禰宜を、墨継は伊伎島掾を、益業は松尾社の祝、禰宜を継いでいる。ところで真次の4世孫に是雄がみえる。

■卜部（伊伎宿禰）是雄

『三代実録』清明天皇貞観5年（863）9月7日丙申の条に、

壱伎嶋石田郡の人、宮主外従五位下卜部是雄、神祇権少史正七位上卜部業孝等、伊伎宿禰の姓を賜わる。その先は雷大臣命より出ずるなり。（原漢文）

とある。本姓卜部であった是雄と業孝が伊伎宿禰姓を賜わったとある。そして是雄については、『三代実録』貞観14年（872）4月24日癸亥の条に、

宮主外従五位下兼行丹波権掾伊伎宿禰是雄卒、是雄は壱伎嶋の人なり。本姓卜部、改めて伊伎と為す。始祖は忍見足尼命、神代より始めて、亀卜の事を供す。その後子孫祖業を伝習し、卜部に備う。是雄は卜数の道に尤もその要を究めたり。日者の中、独歩と謂うべし。嘉祥三年(850)、東宮宮主と為る。皇太子即位の後は、転じて宮主と為る。貞観五年(863)外従五位下を授かる。十一年（869）従五位下に叙せられ、丹波権掾を拝す。宮主故の如し。卒時の年五十四歳。（原漢文）

とある。従五位下で神祇官宮主、丹波権掾を兼任した伊伎宿禰是雄は、業孝とともに壱岐嶋石田郡の人（出身）であった。是雄は「卜数の道に尤もその要を究め、日者（卜者）の中で独歩」と称えられて、他に比肩する者はなかったという。

■伊伎挙政

『壱岐名勝図誌』[註17]は「卜部の事」として国史にみえる人々を列記しているが、中に伊伎挙政を挙げている。挙政は『吉野家略譜考』には名前しか記されていないが、『松尾社家系図』には是雄の9世孫として、その譜がみえている。

挙政は神祇官宮主正五位上中務大輔、月読宮長官、松尾祝職預とある。そして譜には、

江記に云う、治暦四年（1068）九月、宮主伊〔ママ〕挙政白木の杖を挿して、卜形を奏す云々。（原漢文）

とある。「江記に云う」との註は、治暦4年9月の出来事は同年行われた大嘗祭に挙政が竹杖を用うべきところを白木杖を用いたので、そのことを指して註を加えているのである。『延喜式』践祚大嘗祭の条に「宮主卜部一人、着木綿鬘襷執竹杖」あるので、挙政が白木杖を使用したことは異例であった[註18]訳である。挙政は承暦3（1079）年11月15日に79歳で没している。

なお「挙政」は『本朝世紀』『朝野群載』に照らして、改名したのでなければ「泰政」若しくは「奉政」が正[註19]しいと考えられている。

■卜部道作と卜部末成

『壱岐名勝図誌』は「卜部の事」に、

宝亀四年（773）正月十五日、対馬島大初位上卜部酒人、大初位下直弟足、壱岐島無位卜部道作等に仰せて、宇佐八幡大神の託宣の実不を卜ハしめ給うことあり。

と記している。これは神護景雲3年（769）8月、大宰主神習宜阿曽麻呂（すげのあそまろ）が八幡の神教を矯って、道鏡を皇位につかしめれば、天下太平ならんといったので、天皇は和気清麻呂（わけのきよまろ）を宇佐八幡宮に派遣した。清麻呂は宇佐八幡神の託宣をもって道鏡の野望をくじいた。そのため清麻呂は大隅に流されたが、道鏡失脚後、召還された。

『壱岐郷土史』[註20]は、この卜占に参与した卜部道作は壱岐直押見宿禰より12代の孫に当るとしている。

同書は「卜部末成」と題して、

弘安八年（1285）正月八日、壱岐卜部末成、対馬卜部貞光と筑前宗像神社に到りて、占事

を挙行す。

と記している。これは年中行事としてその年の情勢を正月に予知しようとするものであったろう[註21]と考えられている。

宗像宮年中行事云、御占事執行占品を書写し朱印をして執行是をよむ。忌子祢宜は御鉾を持て懐中にて印、卜部祢宜は□を置く。重なる時は吉と答う。半は凶と答うなり。

御占品事　　宮政所

推当年　　弘安八年正月八日

宗像三所大神御占事／大歳可有豊饒／蚕養可有如意如何／忌子称宜千連令納受如何／甲斐近張令納受如何

正月世可有平安如何

一月世可有平安如何

二月世可有平安如何

三月世可有平安如何

四月世可有平安如何　可有水如何

五月世可有平安如何　可有水如何

六月世可有平安如何　可有水如何

七月世可有平安如何　可有風如何

八月世可有平安如何　可有風如何

九月世可有平安如何　可有風如何

十月世可有平安如何

十一月世可有平安如何

十二月世可有平安如何

右御占注進如件

対馬卜部貞光

壱岐卜部末成

（『壱岐国続風土記』）

■吉野氏

『壱岐郷土史』は「吉野武王丸伊岐氏を嗣ぐ」と題して、「興国、正平年中（1340～1369）佐々木武王丸、足利直義の為に筑紫に配流せられ唐津に入り、次で壱岐に追われ、来りて伊岐氏を嗣ぎ、吉野氏と改む（吉野文書）」と記し、吉野氏について略述している。

按ずるに後醍醐天皇吉野に行宮を建てたまいし時、官軍の中に佐々木淡路守等あり。其の率御する所の軍兵多くは社家、山伏、僧侶の輩なり。淡路守勅を奉じて是等の人々に将として勤王の事に努めければ、天皇叡感あり。苗字を皇居に因みて吉野と賜い、且つ其の嫡男に名を武王丸と賜う。後官軍の勢力振るわず。淡路守父子遂に直義の為に筑紫へ流さる

るに至れり。

伝説に曰く嘗て湯岳戸城征伐の時、武王丸幡矛の田原を卜して敵兵降状の法を修し、奇効を奏す。首将功を賞して領土を与えんとせしも之を謝して壱岐国内社家の惣棟梁たらんことを請い、許されて伊岐氏を継ぎ、吉野氏と改むと此の説旧記の儘にして、吉野家譜考などにも記述せるに徴すれば拠あるべし。而して其の子孫累代継襲して、新城、勝本、箱崎、布気の各地に分れ、明治の初年に及ぶ。今同地方の吉野氏なるものは何れも其の祖先を茲に発せりと云えり。

吉野氏が亀卜を行ったという確かな伝えはないが、吉野家の誰かの手になると思われる『亀卜相伝記』[註22]という一書がある。内容は亀卜の手引きである。文末に「天児屋根命十二世烏賊津使主ヨリ遺伝ヘ玉フ処亀卜太占是ナリ嫡子ノ外面授口決ヲサスヘカラス」「壱岐国大宮司兼神主政所棟梁検校卜部伊岐宿禰敬書」と仰々しく書かれている。江戸時代の筆とみられる。

吉野家文書の一冊に、かつて『火成卜伝』[註23]があったが、これには「作者津島下県菅原長秋伝」の副題がついていた。従って壱岐の亀卜を伝えるものではなかったと思われる。

■伊岐氏の消息

山城松尾社の社家伊岐氏は中央において卜部の中心となって活動した。中世には卜部氏から吉田家が分立して、わが国の神道をその支配下に置くこととなる。しかし旧地の壱岐では吉野氏が伊岐氏を嗣ぎ、社家として存続するが卜部としての痕跡は絶ってしまう（勝本町の水（みず）神社〈吉野氏〉では、かつて筮竹による易占いが行われていた[註24]といわれている）。これとは逆に対馬では今に続いているのである。竹内理三氏は二つの島の違いを、

おそらく氏（伊岐氏）の本拠そのものを山城に移してしまったのであろう。それには、古代に帰化人が多く定着した山城盆地での社会環境もそれを可能ならしめたのであろう。これに反し、大和の分祀にともなった対馬の県直の、大和におけるその後の消息はまったく不明である。おそらく県直の場合は、在来神の根深い大和では、その特技である亀卜を十分のばすこともできず、県直氏も氏の本拠を大和に移さなかったためであろう。対馬県直の消息は、その後も依然として対馬を舞台として伝えられ、その亀卜の法は現代まで対馬に伝えられている。

と述べている[註25]。興味深い一つの推論である。

註1　竹内理三「島々の亀卜と神々」『長崎県史』古代・中世編　吉川弘文館　昭和55年

2　木村幾多郎「長崎県壱岐島出土の卜骨」『考古学雑誌』　第64巻第4号　日本考古学会　昭和54年（『カラカミ遺跡』勝本町文化財調査報告書第3集　勝本町教育委員会　昭和60年）

3　註2、木村氏論文

4　註1、竹内氏論文

5　滝川政次郎「八十島祭と陰陽道」『日本祭祀研究集成』第1巻　名著出版　昭和53年

6　内藤泰夫「古代の伊岐氏について」『日本史籍論集』上巻　吉川弘文館　昭和44年

7　『国史大辞典』第４巻（き～く）吉川弘文館　昭和59年
8　註１、竹内氏論文
9　竹内理三「対馬の古文書」『九州大学九州文化史研究所紀要』第１号　1951年
10　平野邦雄「九州における古代豪族と大陸」『古代アジアと九州』　1973
11　平野博之「対馬・壱岐ト部について」『古代文化』第17巻第３号　古代学協会　1966年
12　註９、竹内氏論文
13　井上光貞監訳『日本書紀』上巻（現代語訳）中央公論社　昭和62年
14　岩波古典文学大系『万葉集』第４巻（巻15の補注による）
15　同前（巻15の本文の注による）
16　註２、木村氏論文
17　後藤正恒・吉野尚盛『壱岐名勝図誌』全３巻（文久元年）名著出版　昭和50年
18　註６、内藤氏論文
19　同前
20　後藤正足『壱岐郷土史』　大正７年　壱岐民報社
21　山口麻太郎「壱岐の卜占」『壱岐国史』　長崎県壱岐郡町村会　昭和57年
22　壱岐郷土館蔵
23　山口麻太郎「壱岐の古文献を訪ねて」（掲載誌不明）昭和８年
24　須藤資隆氏（勝本町教育委員会）の教示による。
25　註１、竹内氏論文

その他の参考文献

永留久恵「対馬の亀卜」『海神と天神』　白水社　1988年
『古事類苑』官位部・神祇部　吉川弘文館
『広文庫』（第３冊）名著普及会

長崎県勝本町串山ミルメ浦遺跡出土の古墳時代小児骨

分部哲秋*、松下孝幸*、佐伯和信*

はじめに

長崎県壱岐郡（壱岐島）勝本町大字東触に所在する串山ミルメ浦遺跡は、1988年（昭和63年）10月から11月にかけて長崎県教育委員会文化課と勝本町教育委員会によって発掘調査がなされ、古墳時代に属す１体の小児骨が出土した。

筆者は、各地の遺跡から出土する幼小児骨を対象として形質人類学的調査を行い、縄文時代から弥生時代を経て現代に至る幼小児骨の形質、歯の萌出および化骨について研究を行っている。串山ミルメ浦遺跡出土の小児骨は、顔面部の保存状態も比較的良好で、地理的にみても今後の幼小児骨の研究にとって貴重な資料の１つとなると考えられることから、詳細な人類学的観察および計測を行い、近代（明治）小児骨あるいはこれまでに報告している弥生時代の小児骨とどのような形質の差が認められるのか検討してみたので、その結果について報告したい。

資料・方法

串山ミルメ浦遺跡（図１）から出土した人骨は１体で、埋葬後に撹乱を受けており、残存部は図２に示しているように頭蓋と左側の大腿骨である。年齢は後記しているように、約９歳の小児（Ⅰ期）と推定される。なお、この人骨の所属時代は、考古学的所見から古墳時代である。

小児骨の年齢と年齢区分については、年齢は藤田（1965）による現代人の歯の萌出時期および金田（1957）による現代人の歯根の形成時期を用いて、現代と古墳時代のそれらが大差ないと仮定したうえで推定した。年齢区分は、大友幼小児骨（分部、1981）の報告と同様の区分とした。なお、幼小児骨の性差については種々の研究がなされているが、同定を行うことは難しいのが現状で、本例についても性別は不明である。計測は、Martin-Saller（1957）の方法に従った。また、今回の比較資料として用いた近代人の成績（未発表）は、実年齢がはっきりしているものであるが、古人骨と年齢の基準を同じにするために歯の萌出状態から年齢を推定しなおしたものの成績である。

所　　見

１．頭蓋

(1) 脳頭蓋

脳頭蓋は、右頭頂骨と後頭骨の一部を欠くほかは大部分が残っている。しかしながら、右側

* Tetsuaki WAKEBE, Takayuki MATSUSHITA, Kazunobu SAIKI : Department of Anatomy, Faculty of Medicine, Nagasaki University［長崎大学医学部解剖学第二教室（主任：内藤芳篤教授）］

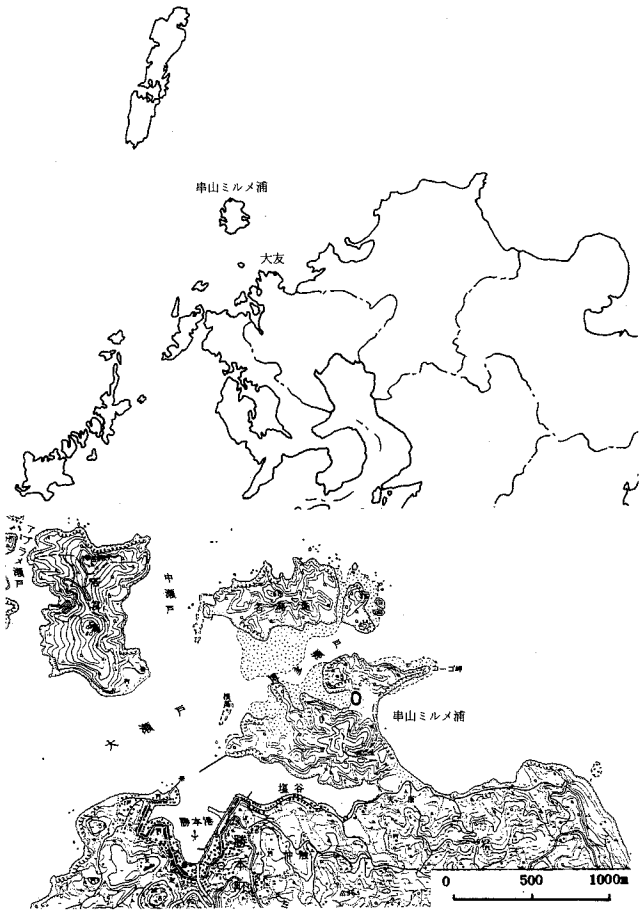


図１．遺跡の位置
(Fig. 1　Location of Kushiyama-mirumeura site, Iki Island, Nagasaki Prefecture)

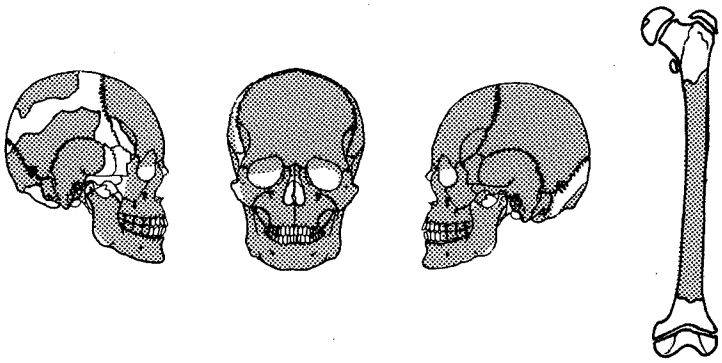


図２．人骨の残在部、アミかけ部分
(Fig. 2.　Regions of preservation of the skeleton, Shaded areas are preserved.)

の側頭部から後頭部にかけては歪みが著しく、この部の復元は不可能であった。骨壁はこの年齢にしては厚く頑丈であるが、乳様突起と外後頭隆起の発達は悪い。頭蓋最大長と頭蓋最大幅の計測ができないので正確な頭型は不明であるが、観察による頭型は中頭型に属しているものと推測される。脳頭蓋の計測値は、表3に示すとおりである。

(2) 顔面頭蓋

顔面頭蓋は、右側頬骨を欠くほかはほぼ完全である。眉上弓の隆起は認められないが、眉間は前方にやや突出している。また、鼻骨は前後方向に隆起しておらず、鼻根部は扁平である。顔面頭蓋の計測値は表4に示すとおりであるが、顔面の幅径では、頬骨弓幅は右側が欠損しているので左側の計測点から正中面までの垂直距離を2倍することにより求めると（120［60×2］）㎜、中顔幅は90㎜である。次いで高径は、顔高が95㎜、上顔高は54㎜で、したがってコルマン氏とウイルヒョー氏の顔示数および上顔示数は、(79.17)（K）、(45.00)（K）、105.56（V）、60.00（V）となる。顔面型は、それぞれ過広顔［hypereuryprosop］（K）、広上顔［euryen］（K）、過低顔［hyperchamaeprosop］（V）、過低上顔［hyperchamaeprosop］（V）に属しており、顔面は幅径が広く、高径が低い傾向が認められる。

鼻根部は、前眼窩間幅が17㎜、両眼窩幅は87㎜で、眼窩間示数は19.54となり、鼻骨に隆起が認められないことも合わせて、広くて扁平である。眼窩は、眼窩幅が38㎜(右、左)、眼窩高は31㎜(右)、30㎜(左)で、眼窩示数は81.58(右)、78.95(左)となる。眼窩型は中眼窩［mesokonch］(右、左)に属している。また鼻部は、鼻幅が23㎜、鼻高は42㎜で、鼻示数は54.76となり、分類では広鼻［chamaerrhin］に属し、高さの割に幅がやや広い。

下顎骨は下顎角と関節突起および筋突起の先端を欠いている。高さは低くて横に広く、下顎体は厚くて頑丈である。

歯は残存しているものが少ないが、それを歯式で示すと次のとおりである。

／ (P_2)＊(C)	(C)＊(P_2) ／		( ) 歯槽内埋伏
M_1 m_2 ○○○○	○○○○ m_2 M_1		○ 歯槽開存
M_1 m_2 ○○○○	○○○○ m_2 M_1		＊ 萌出直前
(M_3)／ (P_2)＊＊	＊＊(P_2)	(M_2) (M_3)	／ 不明

残存している歯の咬耗の程度は、上下両顎の第一大臼歯がBrocaの2度、第二乳臼歯は下顎が3度、上顎は3度に近い2度で、この年齢にしては咬耗がかなり強い。萌出状態は、永久歯は上下両顎の第二大臼歯が歯槽内埋伏、第一大臼歯と切歯群は萌出し、その他は歯槽の状態から萌出直前と考えられる。また、歯槽の状態から風習的抜歯の痕跡は認められない。

2．四肢骨

(1) 大腿骨

四肢骨では、左側の大腿骨のみが残存しており、しかも骨体の両端を欠いている。この大腿骨は、太くはないが、筋の付着部は年齢の割によく発達している。計測値は表2に示している

ように、骨体中央矢状径が17.4mm（左）、骨体中央横径は16.1mm（左）で、骨体中央断面示数は108.07（左）となる。示数値がやや大きいのは粗線の外側唇が斜め後方に突出していることによる。また、骨体上横径は20.0mm（左）、骨体上矢状径は15.1mm（左）で、上骨体断面示数は75.50（左）となり、骨体の上部は扁平である。

3．年齢

この人骨の年齢を藤田（1965）の歯の萌出年齢（現代人）と金田（1957）の歯根形成時期（現代人）により推定してみると、萌出状態からは萌出を完了している歯のうち一番遅く萌出する歯は上顎の側切歯で、8歳で萌出する。歯槽内に埋伏している上下両顎の第二小臼歯および上顎犬歯は、10歳で萌出し、萌出直前と考えられる歯は9歳で萌出する。また、歯根の形成程度が観察できた歯は上顎の犬歯のみで、これは現代人の8歳後半から9歳前半に相当する。以上のことからこの人骨の年齢は、約9歳の小児（Ⅰ期）と推定される。

4．化骨

化骨の進行状態を観察できたのは前後頭内軟骨結合部のみで、この部は化骨を完了している。

5．特殊所見

幼小児期の人骨によく見られ、貧血が原因と考えられているCribra orbitaliaは、左右の眼窩の上壁外側部に認められるが、軽度である。外耳道骨腫は両側とも認められない。

考　　察

串山ミルメ浦小児骨の計測値を表1、2において、近代小児骨および成人骨が西北九州タイプの弥生人とされる佐賀県呼子町出土の大友小児骨の成績と比較してみると、先ず顔面頭蓋では、ミルメ浦小児骨の頬骨弓幅、中顔幅といった顔面の幅径は、大友小児骨と同様に近代小児骨の平均値よりもかなり大きく、顔高および上顔高は近代人の平均値よりもやや小さい。したがって、コルマンとウイルヒョーの顔示数および上顔示数は、近代人よりもかなり小さい値を示し、顔面には著しい低広顔傾向が認められ、その程度は大友小児骨よりも強い。眼窩も眼窩示数が近代人よりも小さい値を示し、大友小児骨ほどでないが低眼窩の傾向が認められる。また、鼻幅は近代小児骨よりもやや広く、鼻示数も大きくて、広鼻の傾向が強い。鼻根部では、前眼窩間幅および眼窩間示数が、大友小児骨と同様に近代小児骨よりも大きく、鼻根部はかなり広い。

次いで大腿骨は、串山ミルメ浦小児骨の骨体中央断面示数は108.07（左）で、近代小児骨の平均値よりもやや小さいものの、粗線は良く発達している。骨体上部は、断面示数が75.50(左)で、大友小児骨および近代小児骨に比べて示数値は小さく、より扁平である。

以上のように、串山ミルメ浦小児骨は近代人と比較して、顔面には著しい低広顔傾向、大腿骨の骨体上部には扁平性が認められ、これらは一つの時代差を表したものと考えられる。また、この人骨が弥生時代の大友小児骨とよく似た特徴を備えていることは、地理的に見ても両遺跡

が近いことから、弥生時代の壱岐の人々の形質を知るうえで興味ある結果と言える。

表１　顔面頭蓋計測値

(mm)

		串山ミルメ浦（古墳）（９歳）	大友（弥生）（９歳）	大友（弥生）（10歳）	近代人（９歳） n	近代人（９歳） M
45.	頬骨弓幅	(120)	(112)	(120)	7	109.00
46.	中顔幅	90	—	95	7	81.71
47.	顔　高	95	94	101	6	97.33
48.	上顔高	54	(53)	60	7	55.43
47/45	顔示数（K）	(79.17)	(83.93)	(84.17)	6	89.32
48/45	上顔示数（K）	(45.00)	(47.32)	(50.00)	7	50.87
47/46	顔示数（V）	105.56	—	106.32	6	118.04
48/46	上顔示数（V）	60.00	—	63.16	7	67.85
50.	前眼窩間幅	17	17	—	7	14.14
44.	両眼窩幅	87	89	91	7	83.00
50/44	眼窩間示数	19.54	19.10	—	7	17.03
51.	眼窩幅（左）	38	40	—	7	37.14
52.	眼窩高（左）	30	30	—	7	30.86
52/51	眼窩示数（左）	78.95	75.00	—	7	83.22
54.	鼻　幅	23	22	—	7	21.86
55.	鼻　高	42	39	—	7	41.57
54/55	鼻示数	54.76	56.41	—	7	52.77

表２　大腿骨骨体計測値（左）　(mm)

		串山ミルメ浦（古墳）（９歳）	大友（弥生）（９歳）		近代人（９歳）	
			n	M	n	M
6.	骨体中央矢状径	17.4	2	17.05	3	18.00
7.	骨体中央横径	16.1	2	16.50	3	16.07
8.	骨体中央周	52.5	2	53.50	3	54.00
9.	骨体上横径	20.0	2	20.60	3	21.17
10.	骨体上矢状径	15.1	2	17.10	3	17.03
6/7	骨体中央断面示数	108.07	2	103.18	3	112.22
10/9	上骨体断面示数	75.50	2	82.74	3	80.60

ま　と　め

長崎県壱岐郡（壱岐島）勝本町大字東触に所在する串山ミルメ浦遺跡が、1988年（昭和63年）に発掘調査され、古墳時代に属す１体の小児骨が出土した。この人骨について人類学的観察および計測を行い、その結果を要約すると次のとおりである。

1．歯の萌出状態と歯根の形成程度による年齢は、約９歳の小児（Ｉ期）と推定される。

2．脳頭蓋は、年齢の割に骨壁が厚い。観察による頭型は中頭型と推測される。

3．顔面頭蓋の計測値は、頬骨弓幅が（120)mm、中顔幅は90mm、顔高は95mm、上顔高は54mmで、コルマン氏とウイルヒョー氏の顔示数および上顔示数は、(79.17)（K)、(45.00)（K)、105.56（V)、60.00（V）となる。顔面型は、それぞれ過広顔［hypereuryprosop］（K)、広上顔［euryen］（K)、過低顔［hyperchamaeprosop］（V)、過低上顔［hyperchamaeprosop］（V）に属しており、顔面には低広顔傾向が強く認められる。眼窩は、眼窩幅が38mm（右、左)、眼窩高は31mm（右)、30mm（左）で、眼窩示数は81.58（右)、78.95（左）となる。眼窩型は中眼窩［mesokonch］（右、左）に属している。鼻部は、鼻幅が23mm、鼻高は42mmで、鼻示数は54.76となり、分類では広鼻［chamaerrhin］に属し、高さの割に幅がやや広い。鼻根部は、前眼窩間幅が17mm、両眼窩幅は87mmで、眼窩間示数は19.54となり、広くて扁平である。

4．歯の咬耗は非常に強く、また風習的抜歯は認められない。

5．大腿骨は、骨体中央断面示数は108.07（左）で、粗線の発達は良好である。上骨体断面示数は75.50（左）で、骨体の上部には扁平性が認められる。

串山ミルメ浦遺跡出土の古墳時代小児骨の顔面には、強い低広顔傾向が認められ、顔面の形態は近代小児骨（明治）とは異なり、弥生時代の大友小児骨の形質に近いと推測される。

〈擱筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた長崎県教育委員会文化課ならびに勝本町教育委員会の諸先生方に感謝致します。〉

表 3　脳頭蓋計測値　(mm)

		串山ミルメ浦（9歳）
9.	最小前頭幅	94
26.	正中矢状前頭弧長	120
29.	正中矢状前頭弦長	106

表 4　顔面頭蓋計測値　(mm)

		串山ミルメ浦（9歳）
41.	側顔長	65
43.	上顔幅	97
45.	頬骨弓幅	(120)
46.	中顔幅	90
47.	顔　高	95
48.	上顔高	54
47/45	顔示数（K）	(79.17)
48/45	上顔示数(K)	(45.00)
47/46	顔示数（V）	105.56
48/46	上顔示数(V)	60.00
50.	前眼窩間幅	17
44.	両眼窩幅	87
50/44	眼窩間示数	19.54
51.	眼窩幅（右）	38
	（左）	38
52.	眼窩高（右）	31
	（左）	30
52/51	眼窩示数(右)	81.58
	（左）	78.95
54.	鼻　幅	23
55.	鼻　高	42
54/55	鼻示数	54.76
62.	口蓋長	37
63.	口蓋幅 (M_1)	35
64.	口蓋高 (M_1)	5

参 考 文 献

1．金田義夫、1957：日本人の永久歯における歯根完成時期の研究。歯科月報、30：165-172.

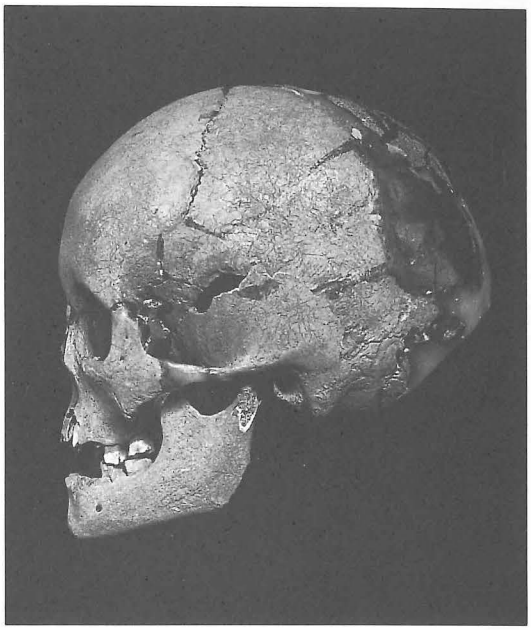
2．藤田恒太郎、1965：歯の話。岩波書店。東京：57-98.

3．Martin-Saller, 1957：Lerhrbuch der Anthropologie. Bd. I. Gustav Fisher Verlarg, Stuttgart：429-504.

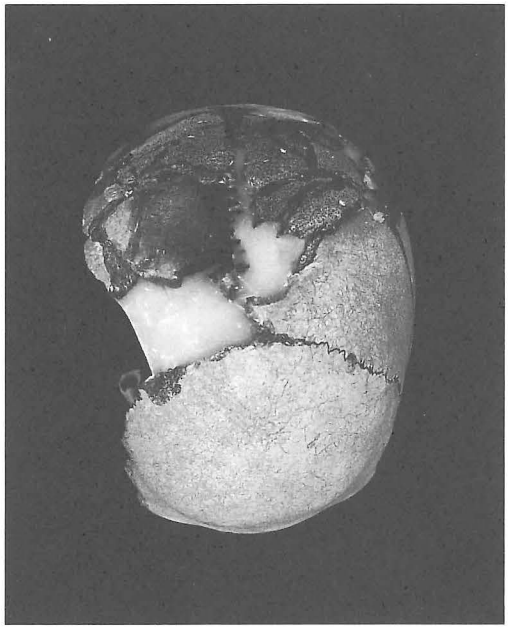
4．松下孝幸、1981：佐賀県大友遺跡出土の弥生時代人骨。大友遺跡(佐賀県呼子町文化財調査報告書1)：223-253.

5．分部哲秋、1981：佐賀県大友遺跡出土の幼小児骨。大友遺跡(佐賀県呼子町文化財調査報告書1)：254-264.

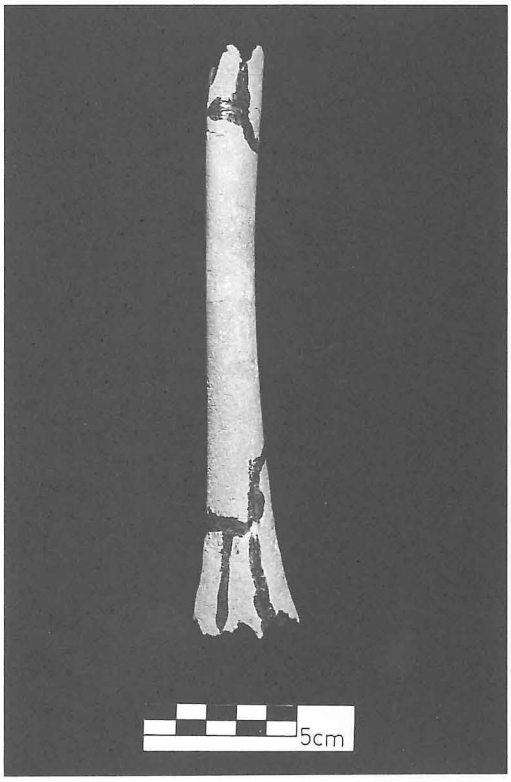
串山ミルメ浦人骨（９歳、小児）
（頭蓋正面）



（頭蓋側面）



（頭蓋上面）



（大 腿 骨）

図　　版

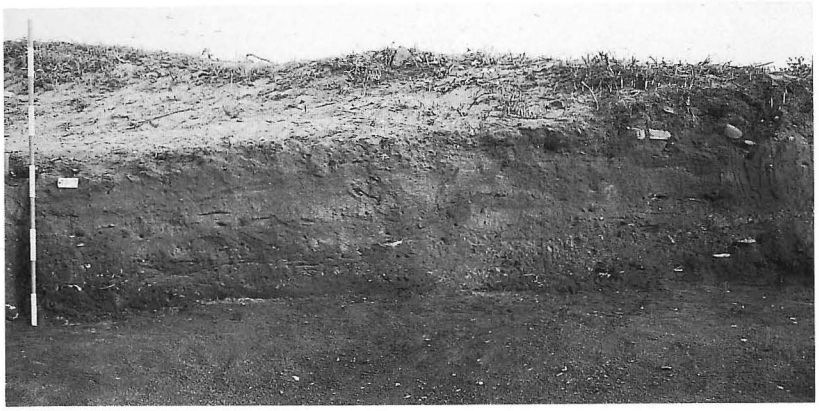
東から

西から

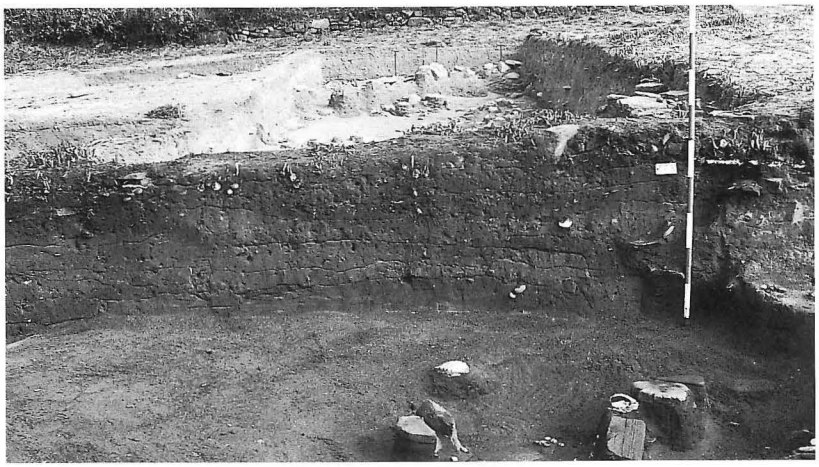
南から

遺跡遠景および近景

図版 2



F－2区東側



F－3区北側

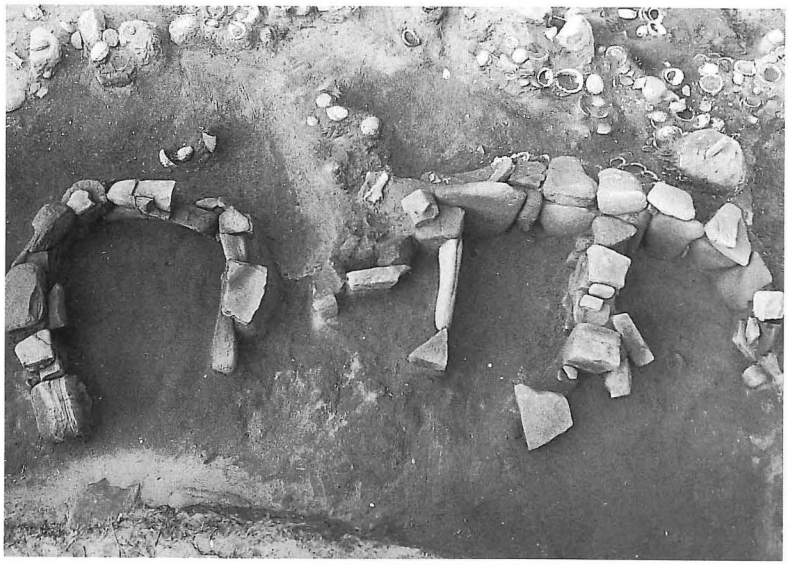
F－4区北側

土　　層

1 号住居跡遺物出土状況

1 号住居跡土層

図版 4



1、2号石組カマド跡

1号石組カマド

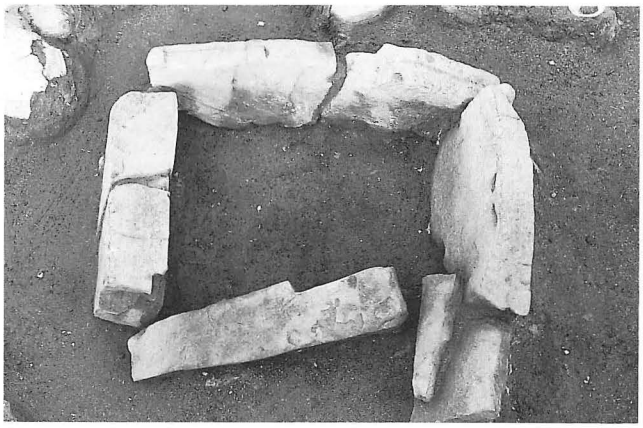
2号石組カマド

1、2号石組カマド跡検出状況

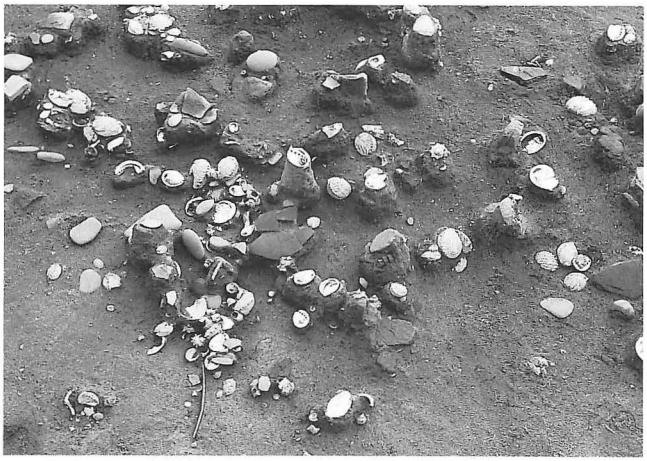
全景

1 号配石遺構　　近　景

図版 6



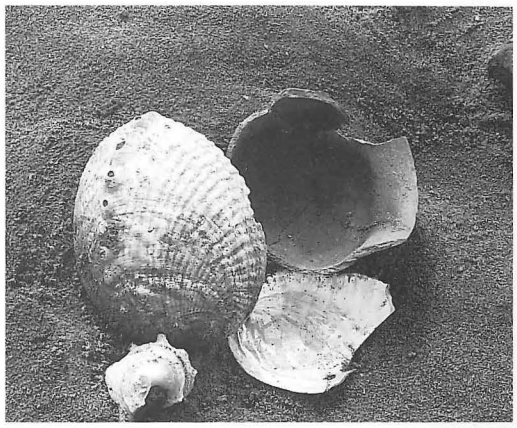
2 号配石遺構および 1 号炉跡



遺物出土状況

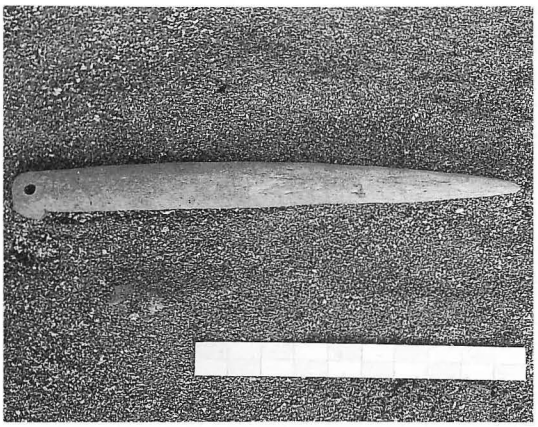
図版 8

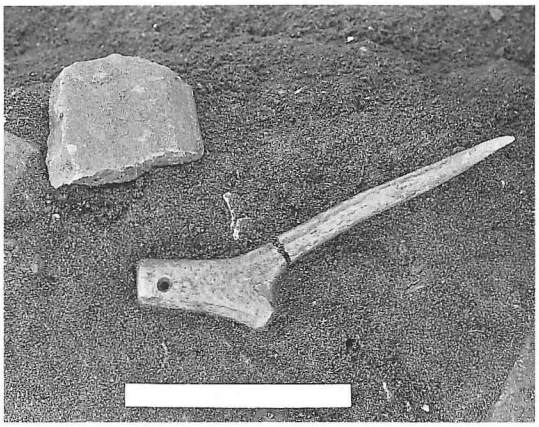
1 号土壙人骨出土状況

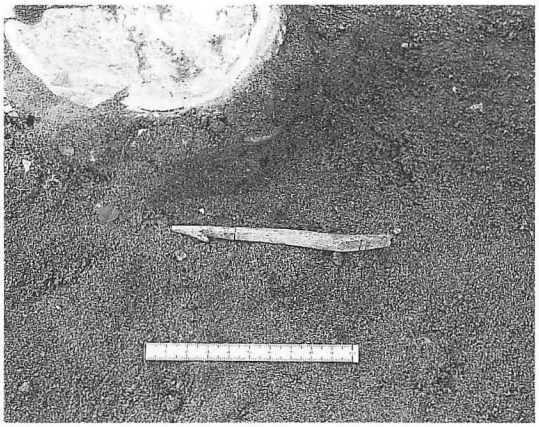


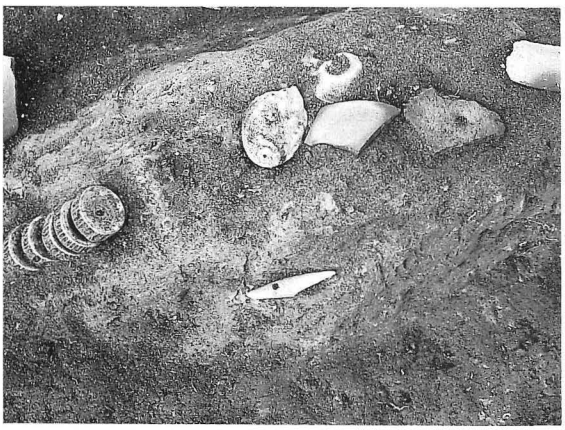
土器出土状況

図版10

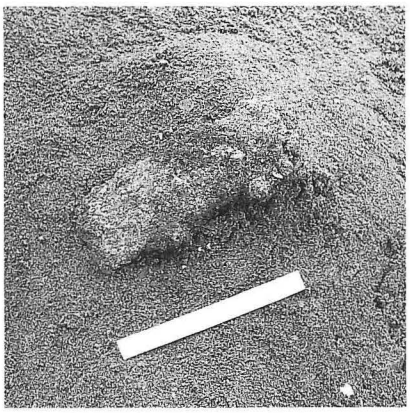


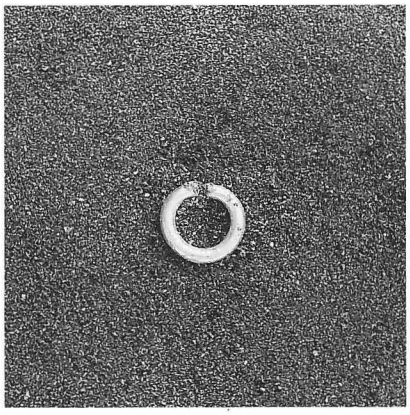




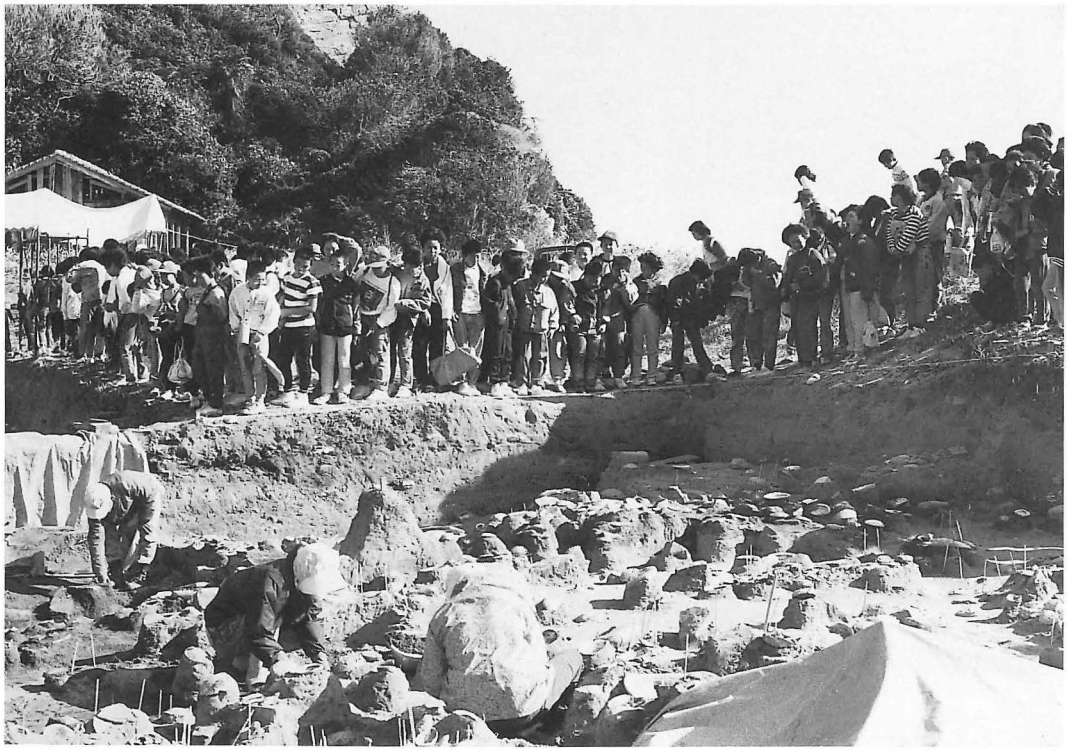


骨角器および亀ト出土状況

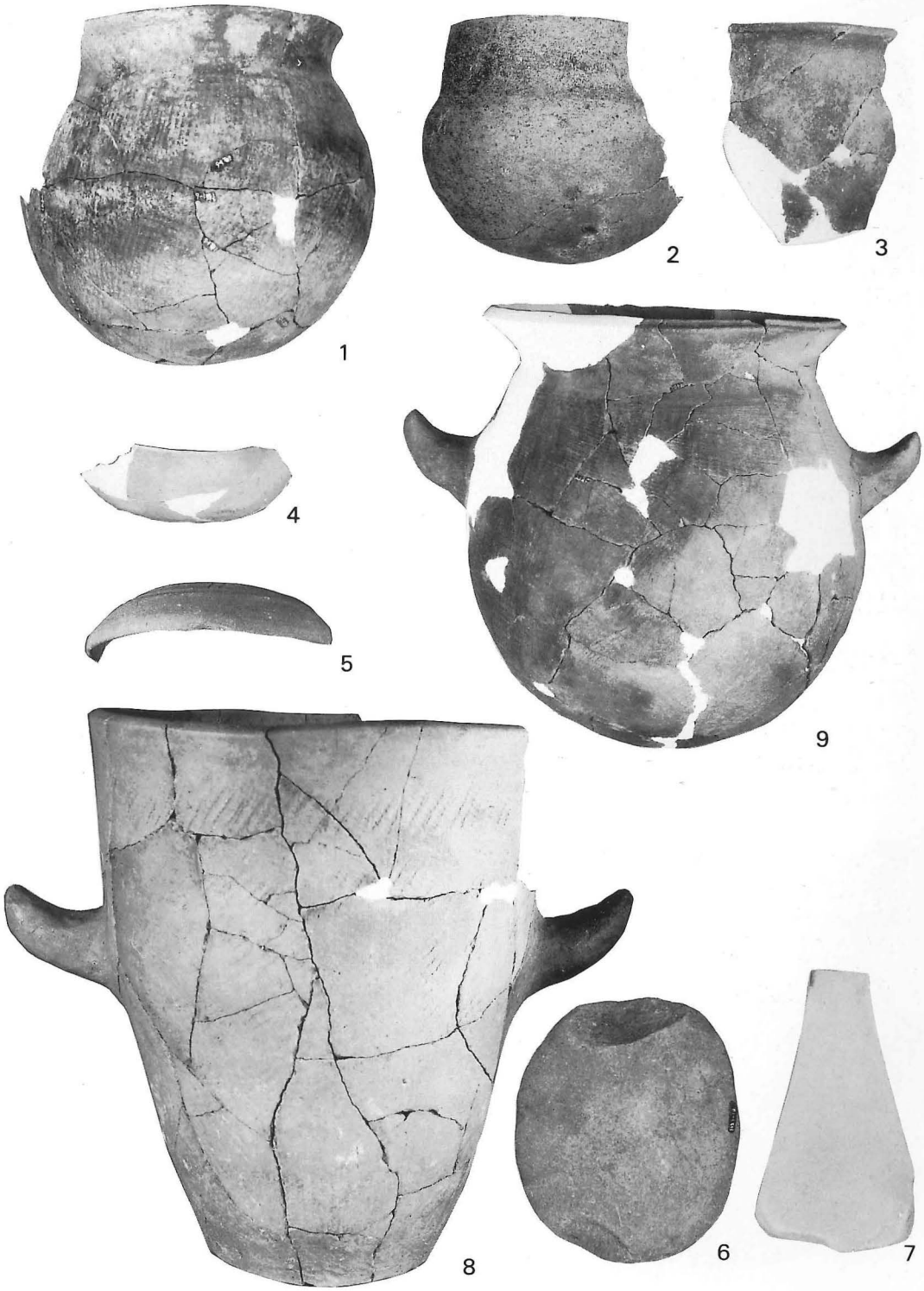




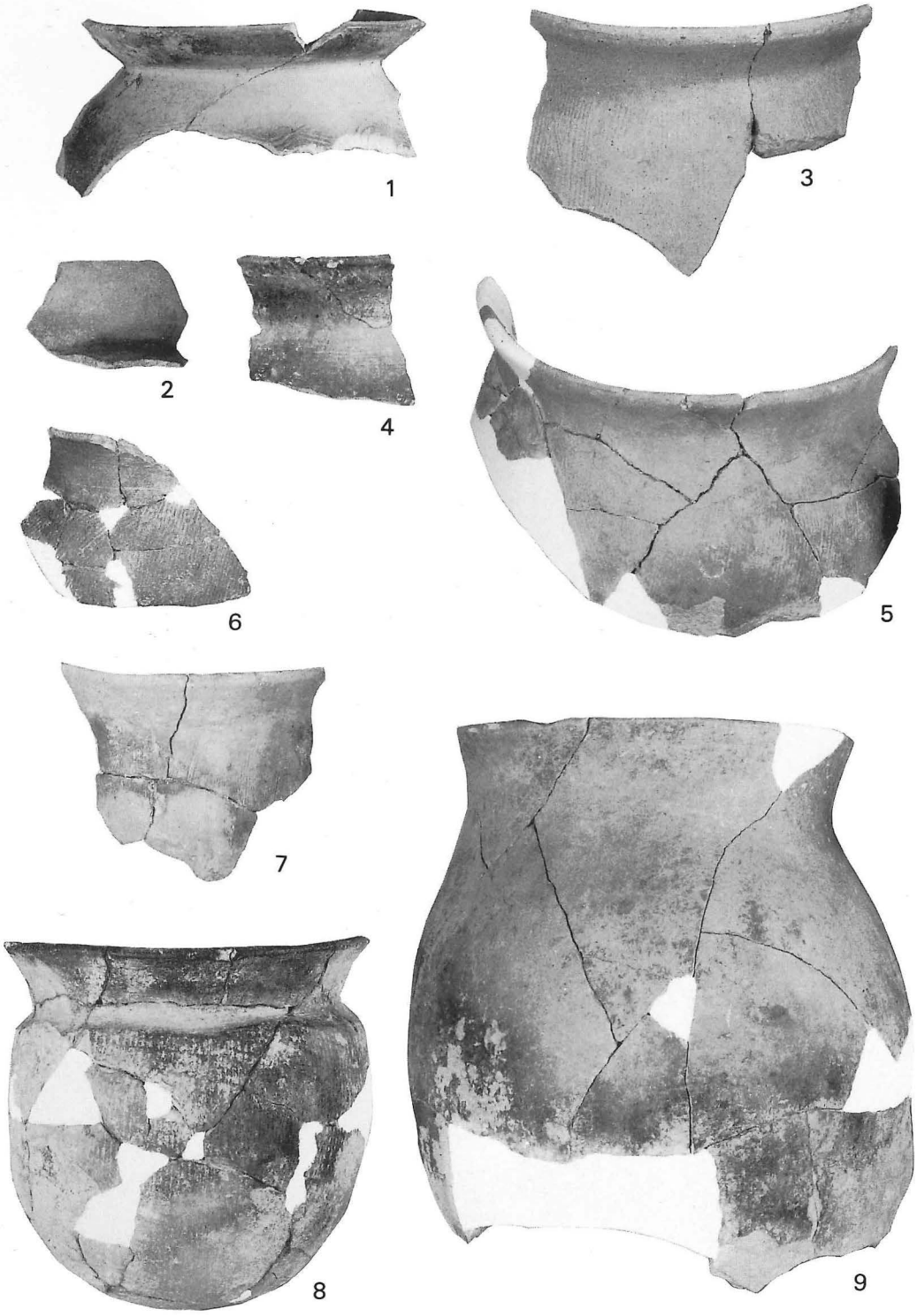
金属器出土状況



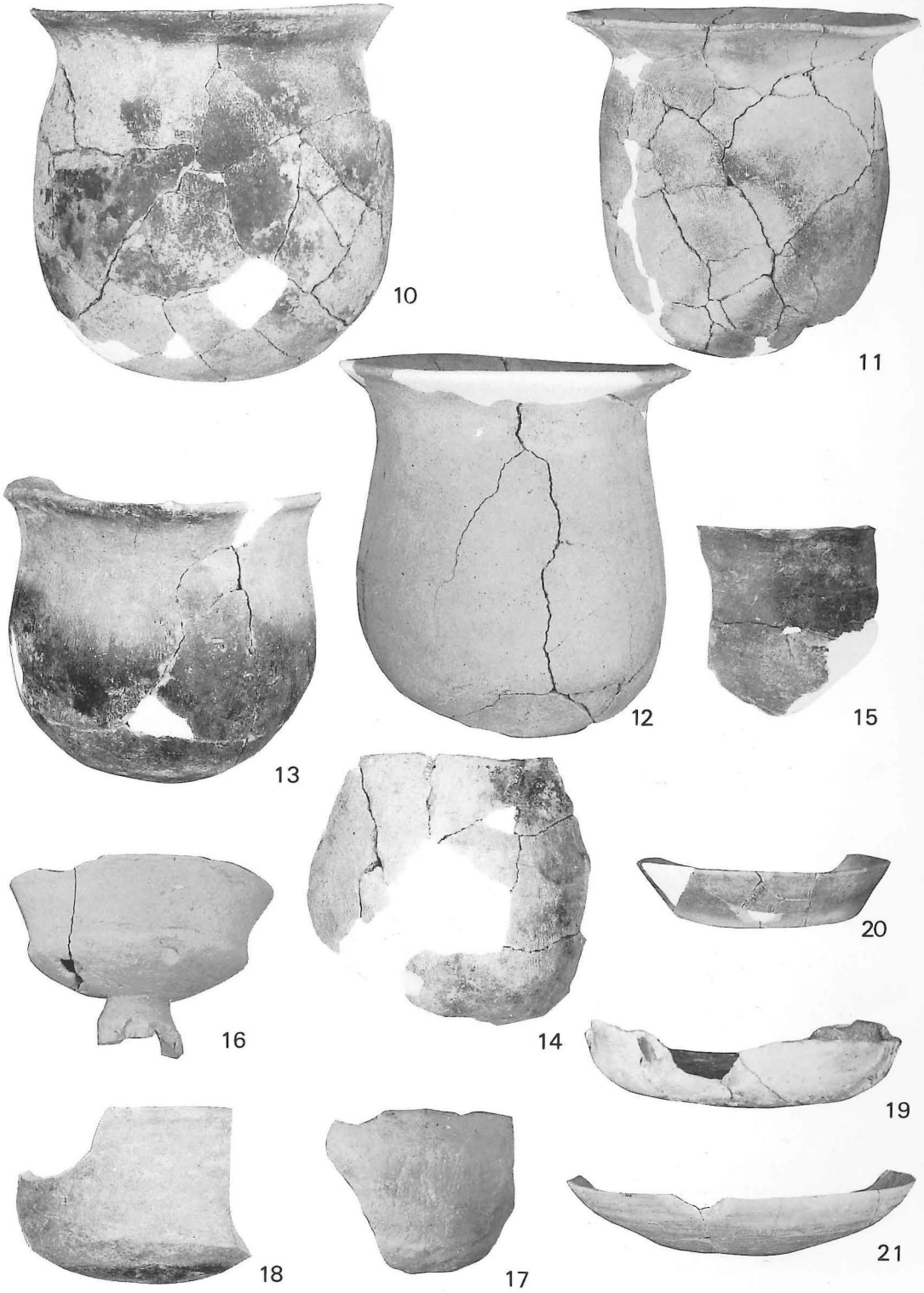
調　査　風　景　　ゆとりの時間の小学生見学



1号住居跡出土の遺物

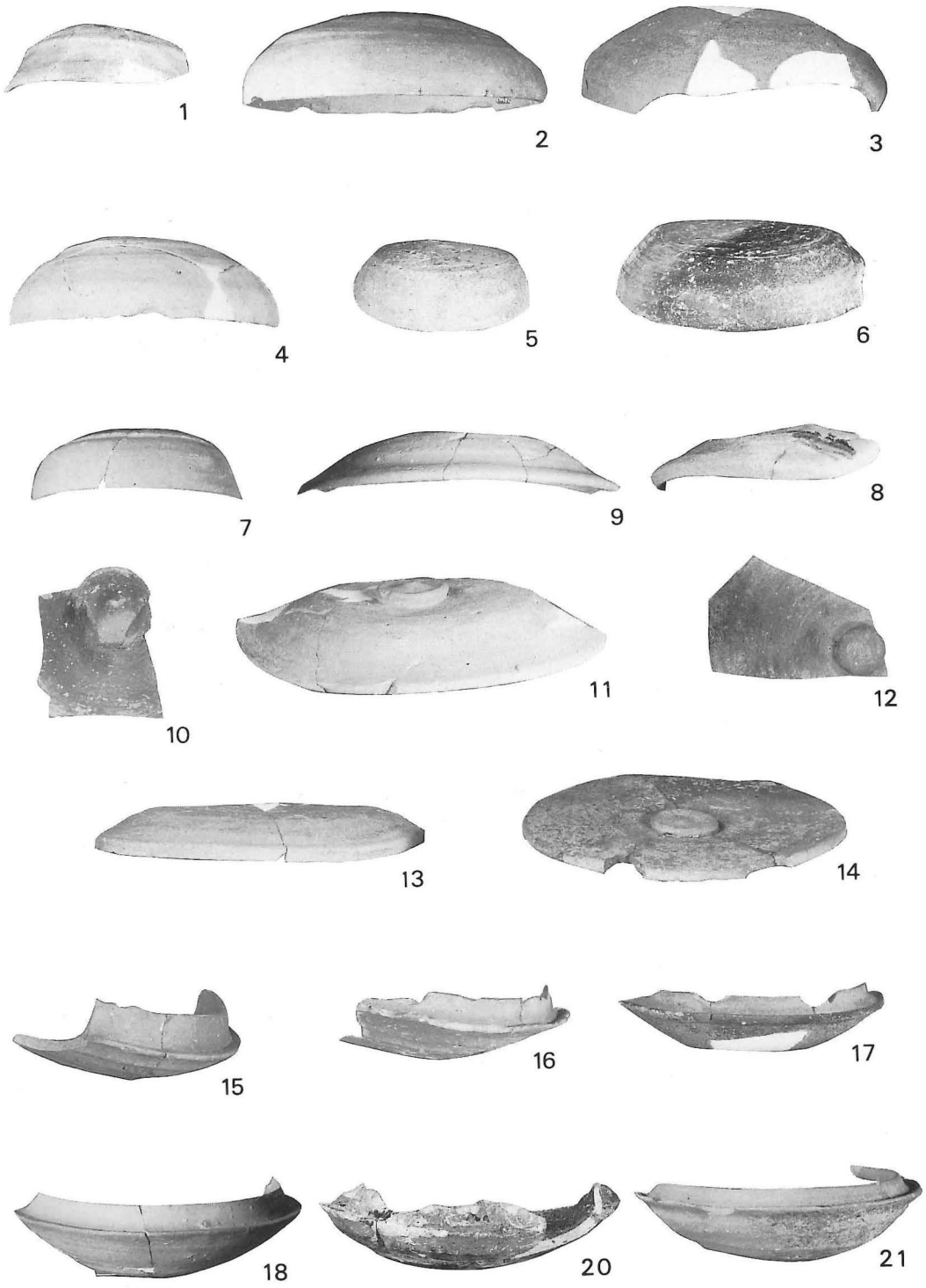


土 師 器 ①

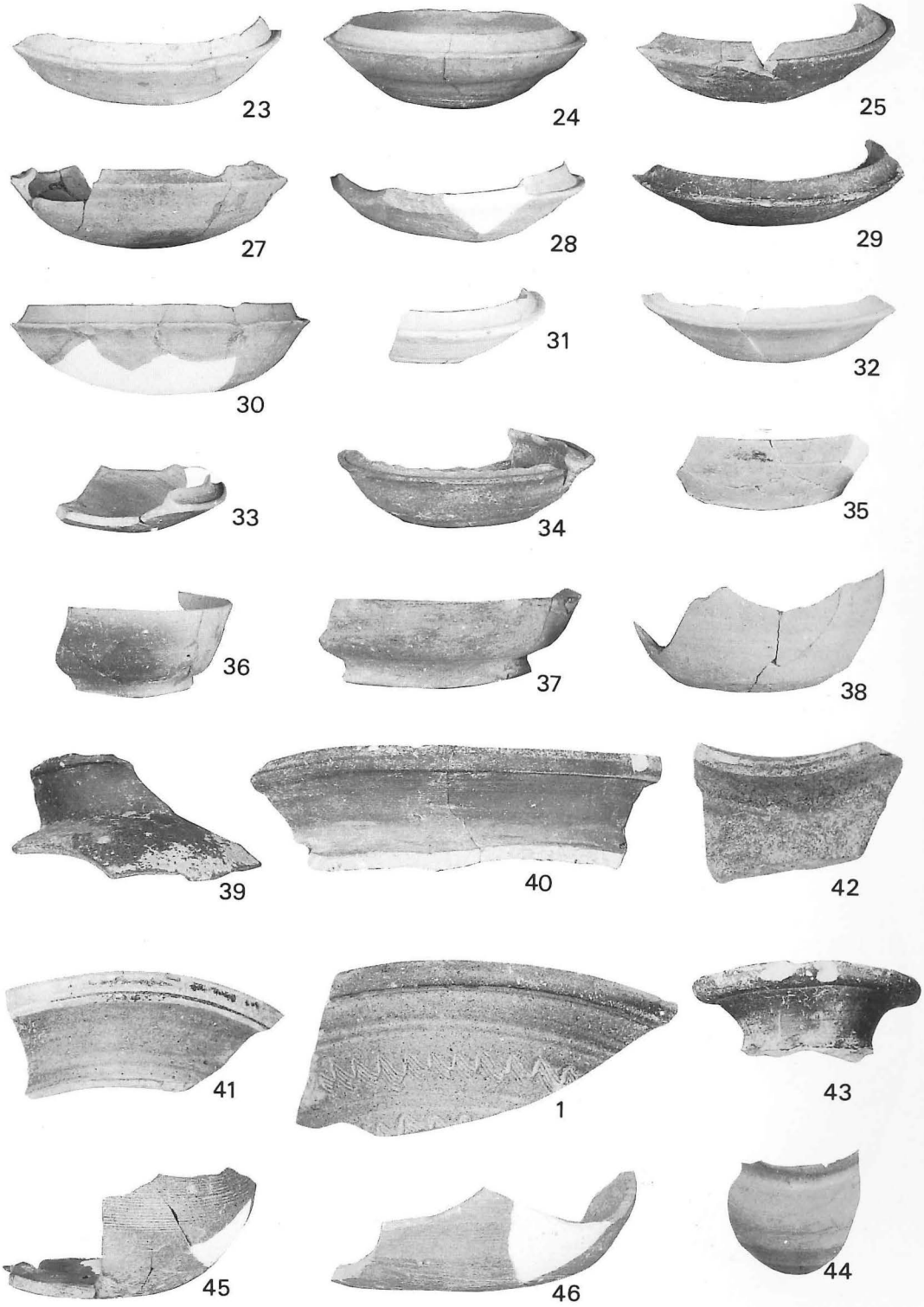


土 師 器 ②

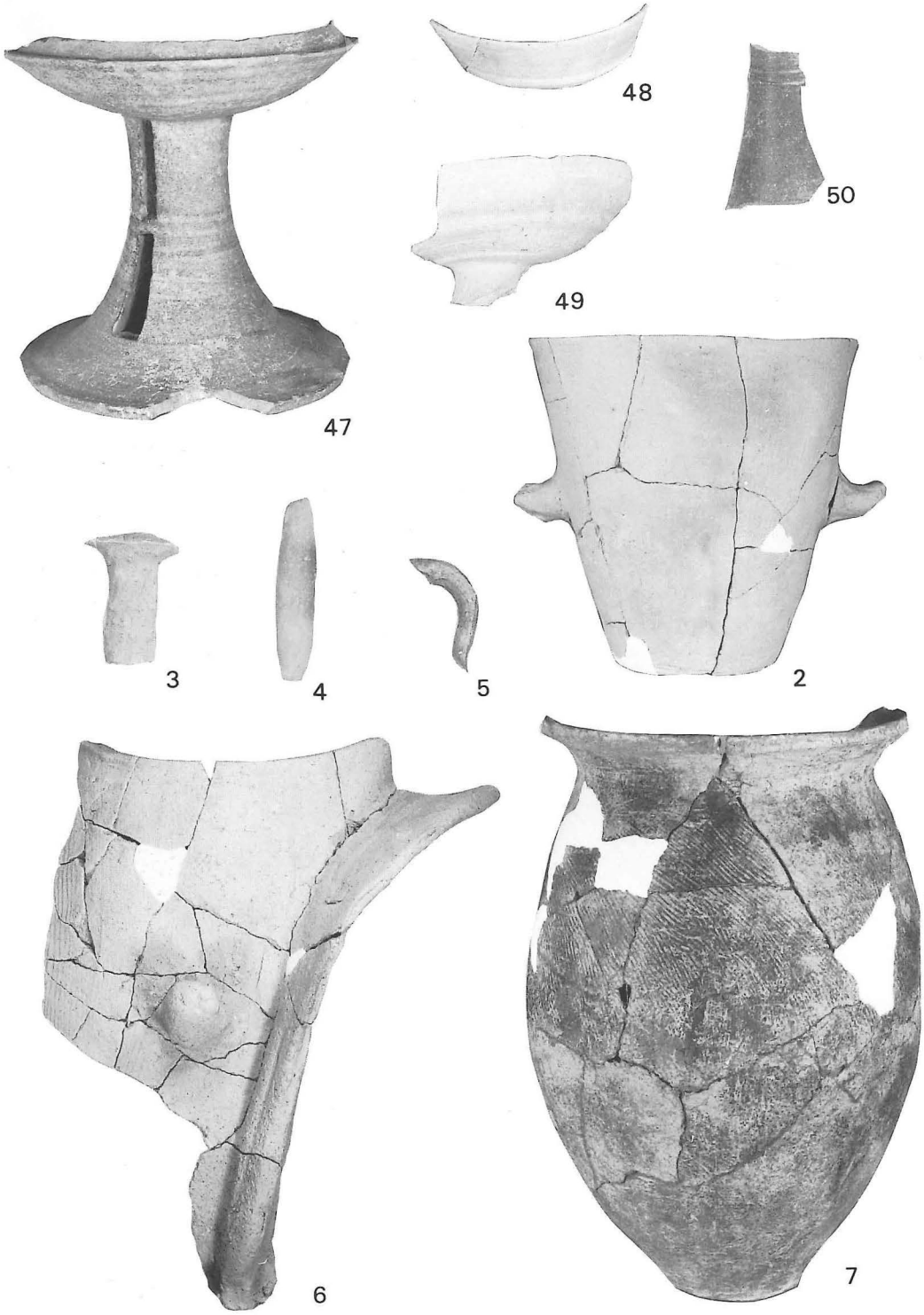
図版16



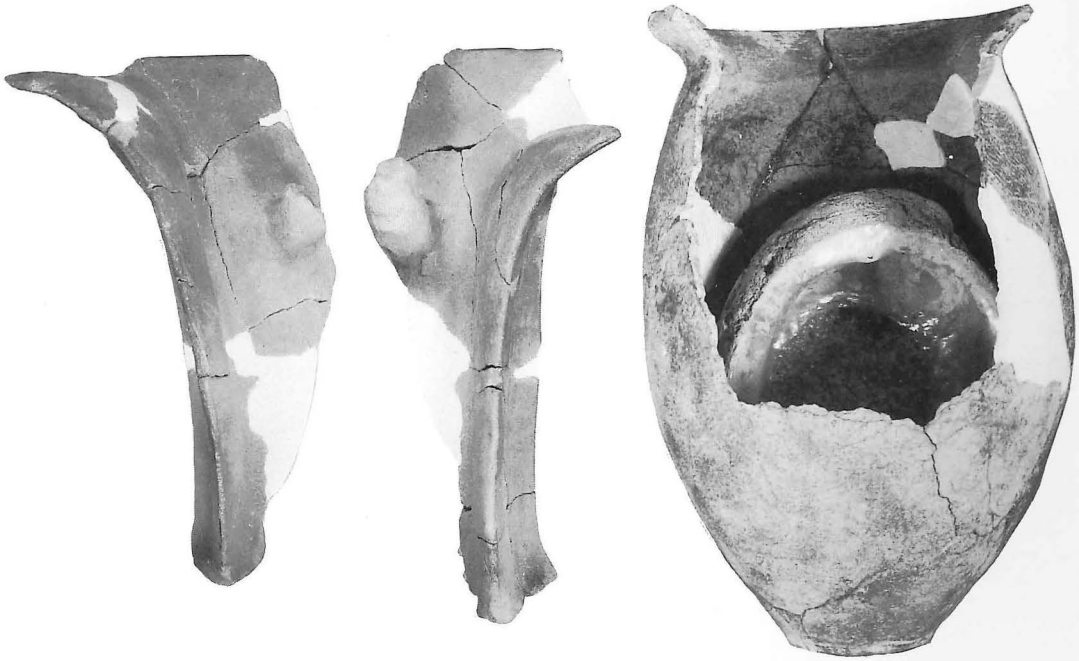
須 恵 器 ①



須 恵 器 ②

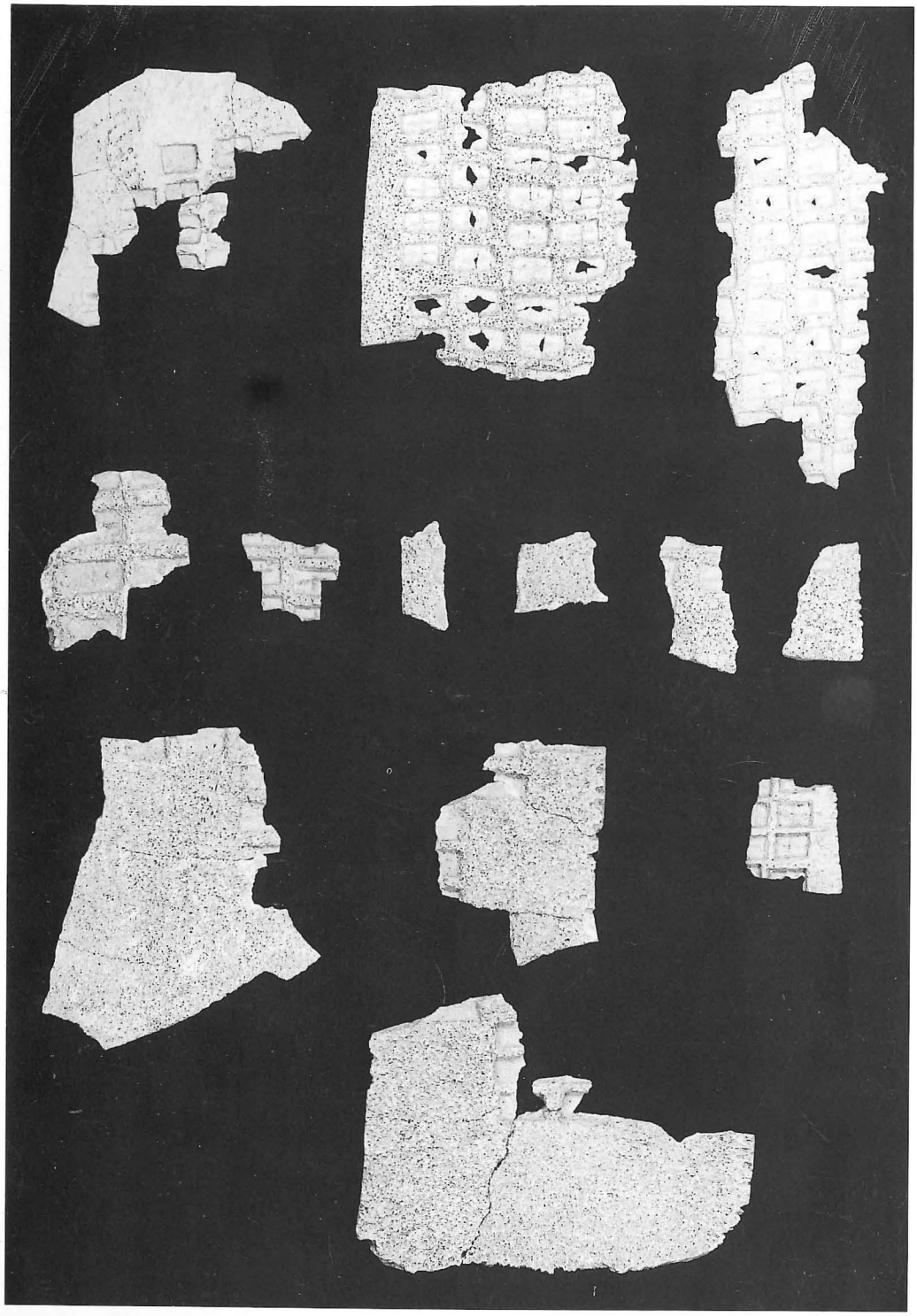


須恵器、その他の土器

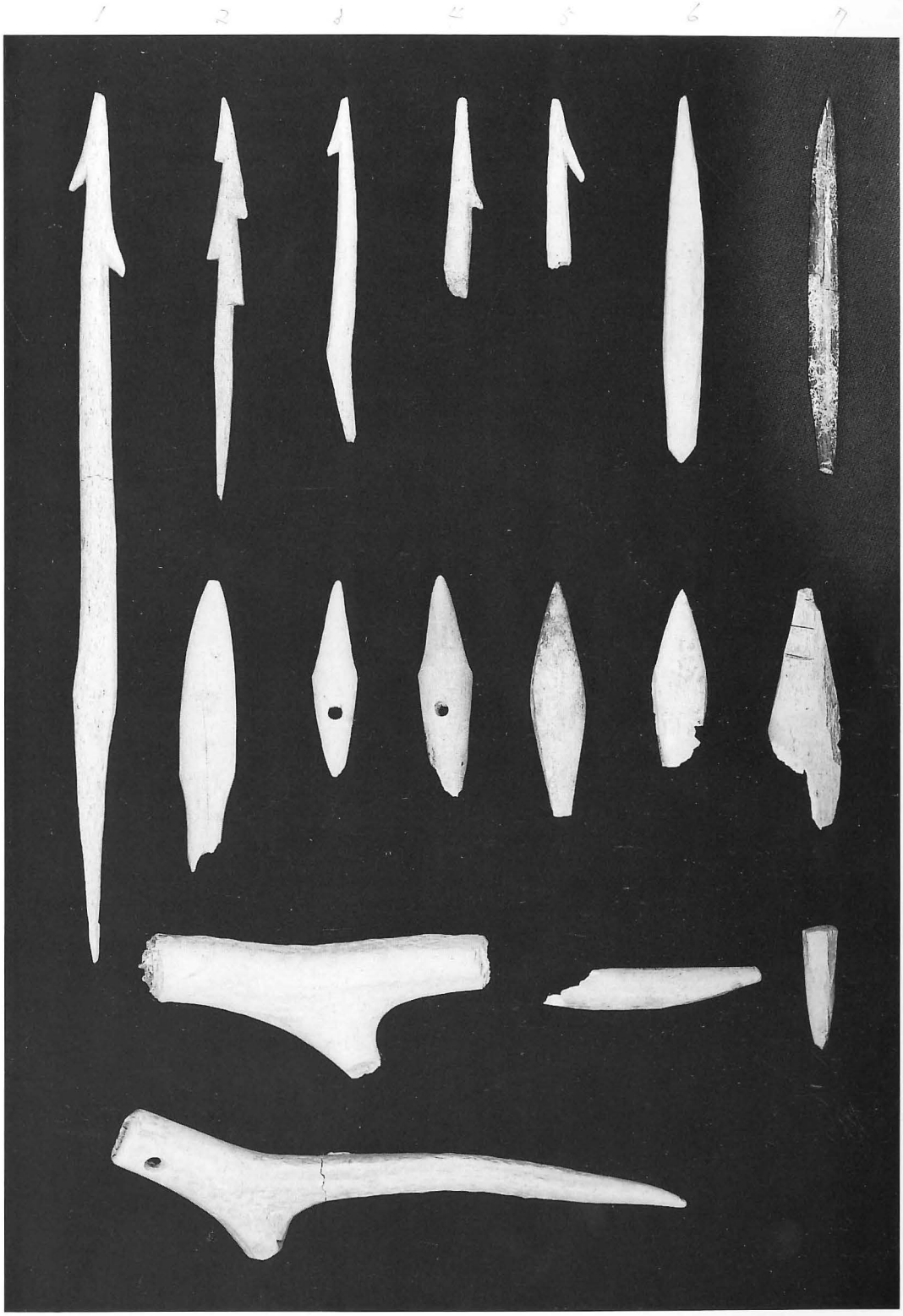


把手、その他の土器

図版20

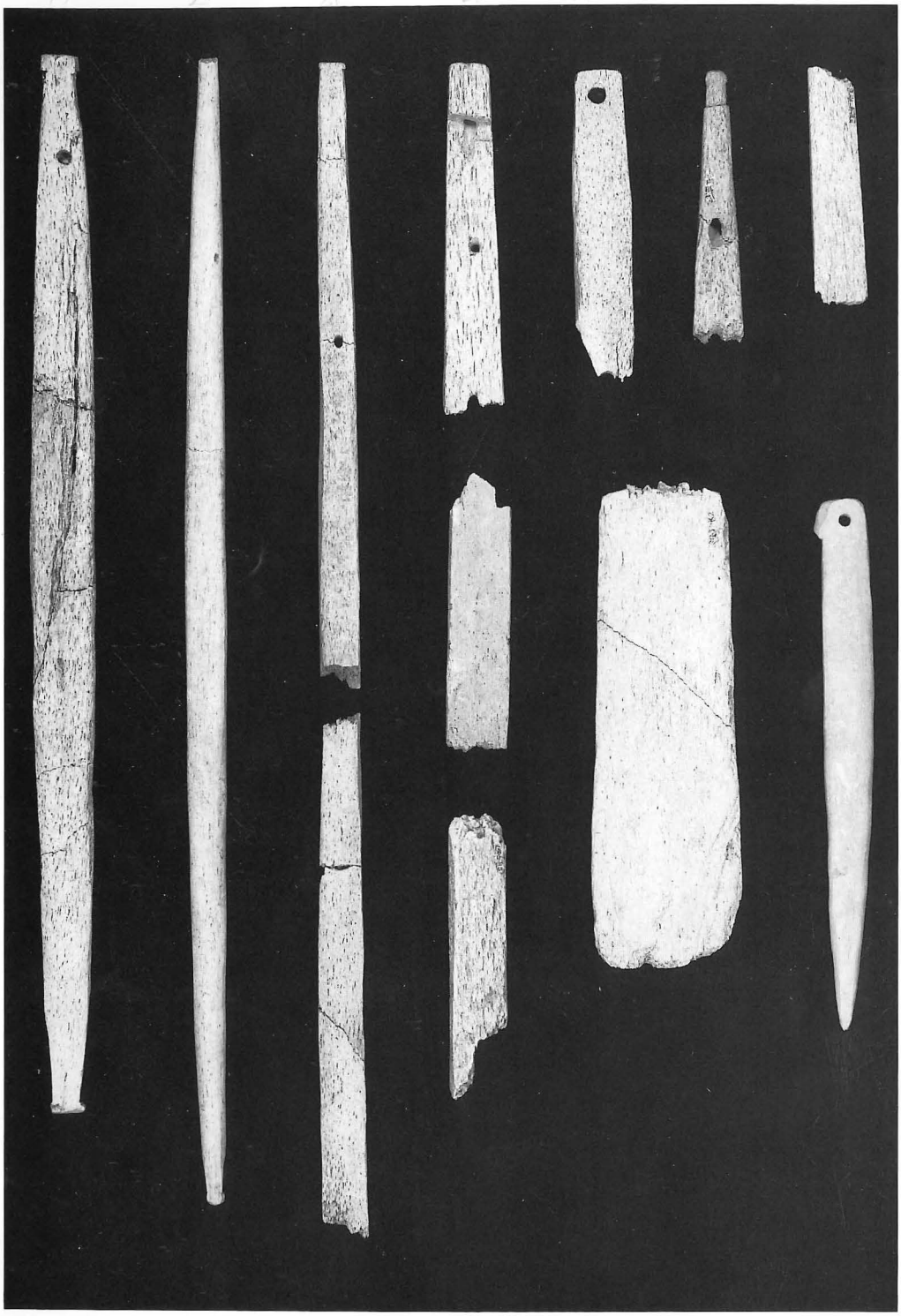


亀　　卜

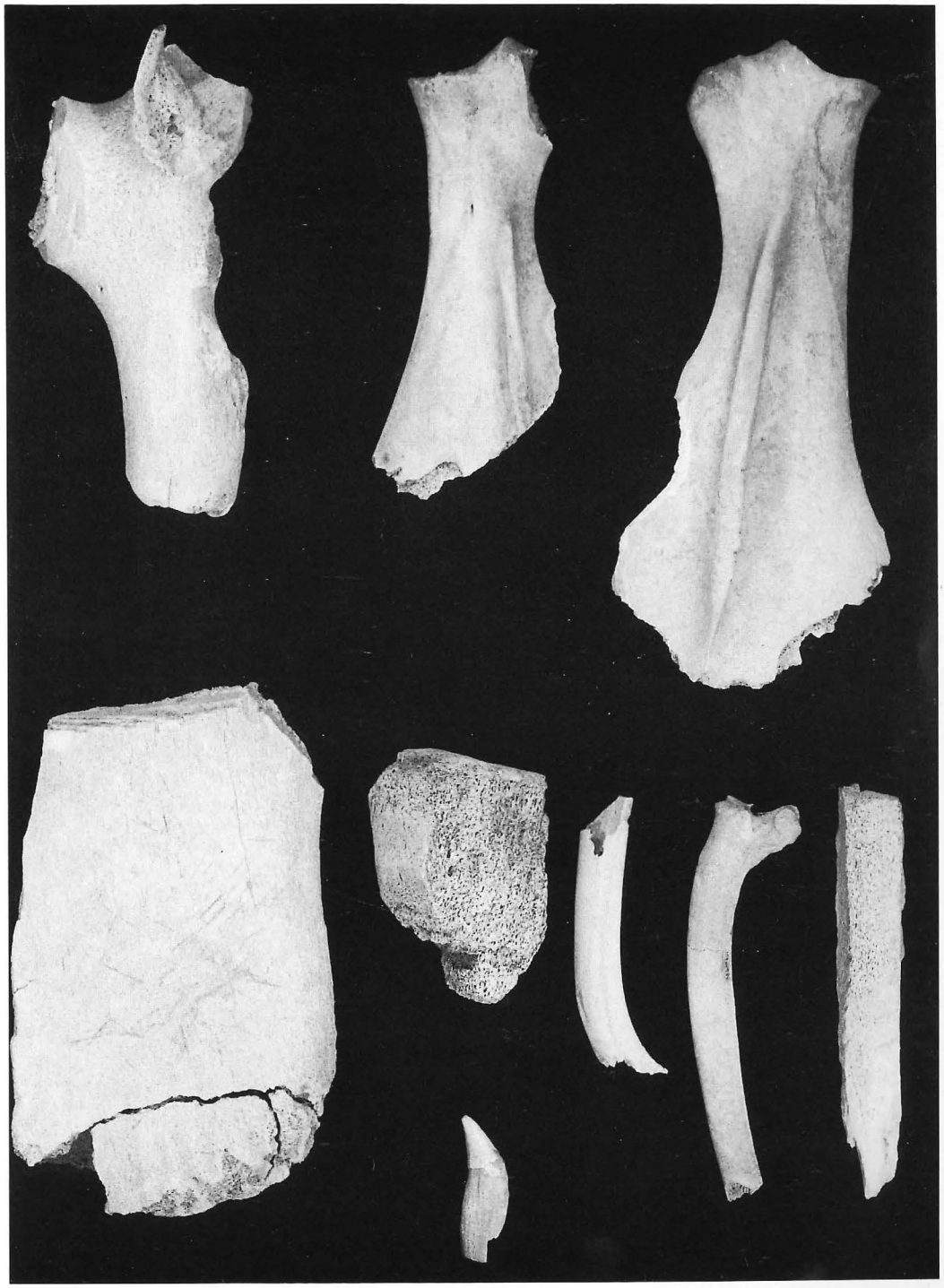


骨 角 器 ①

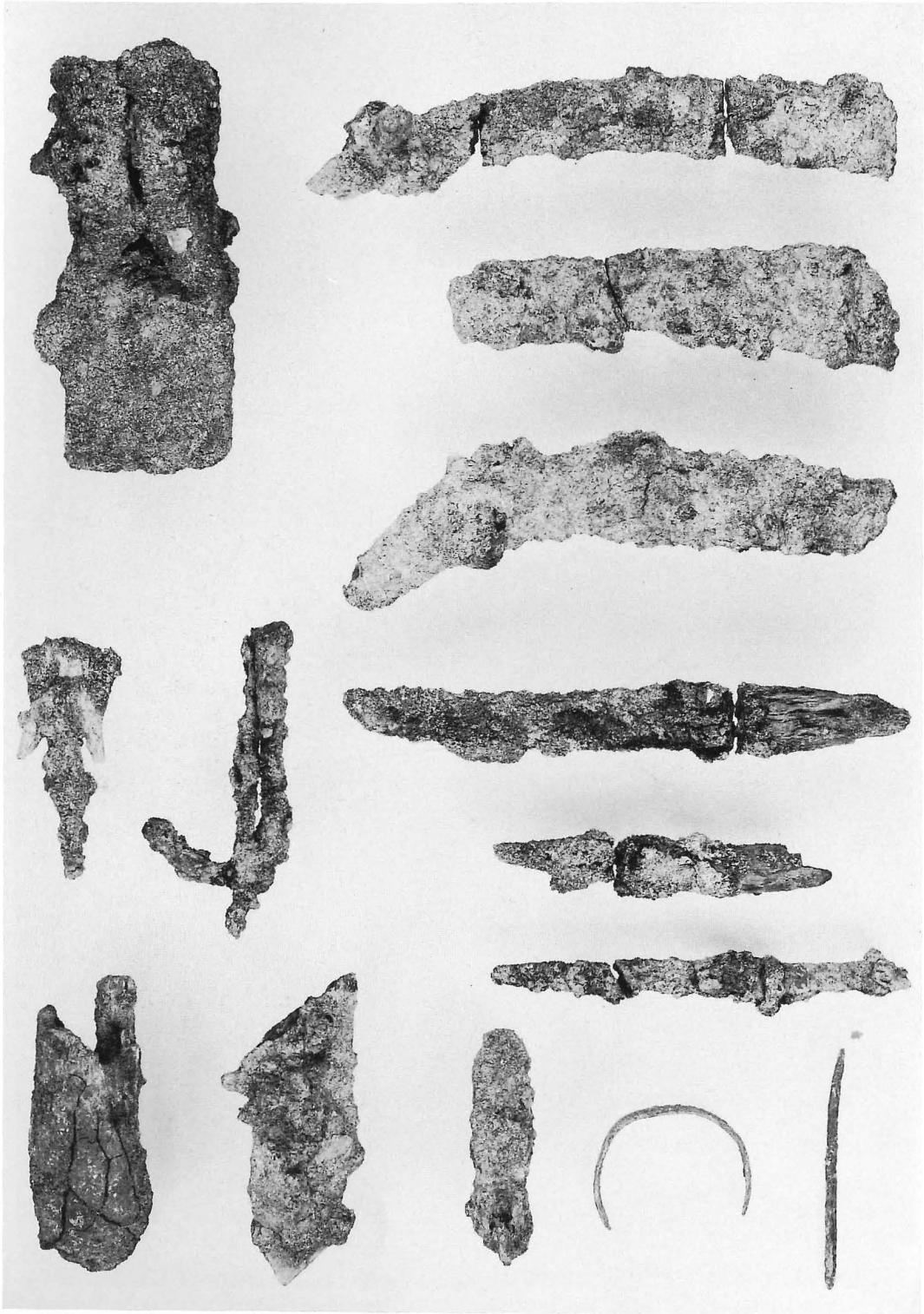
図版22



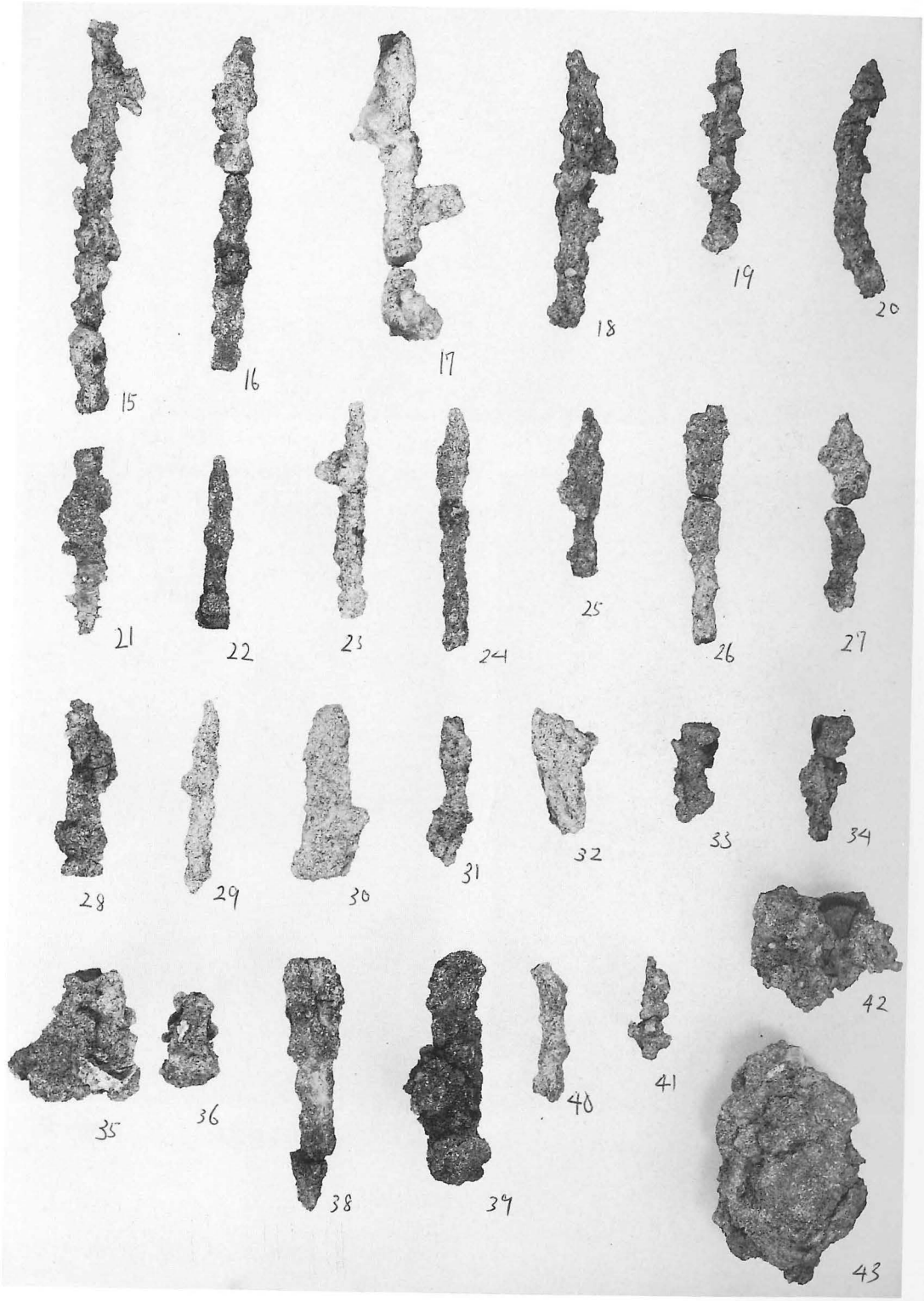
骨角器②



海　獣　骨

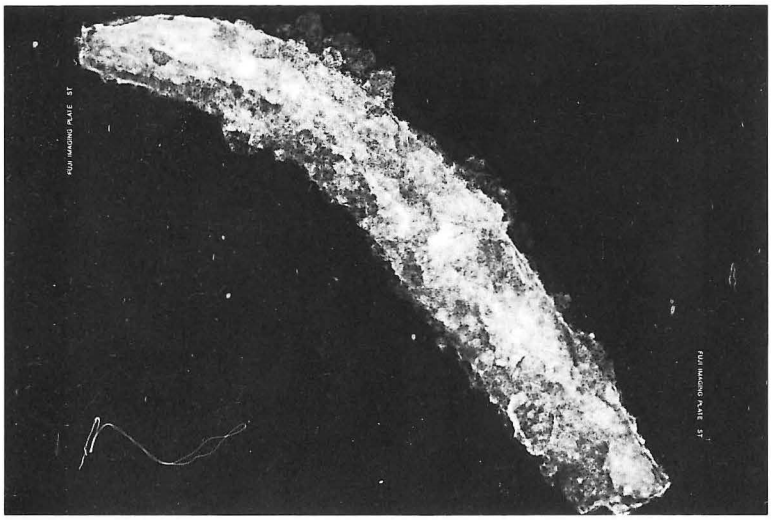


金 属 器 ①

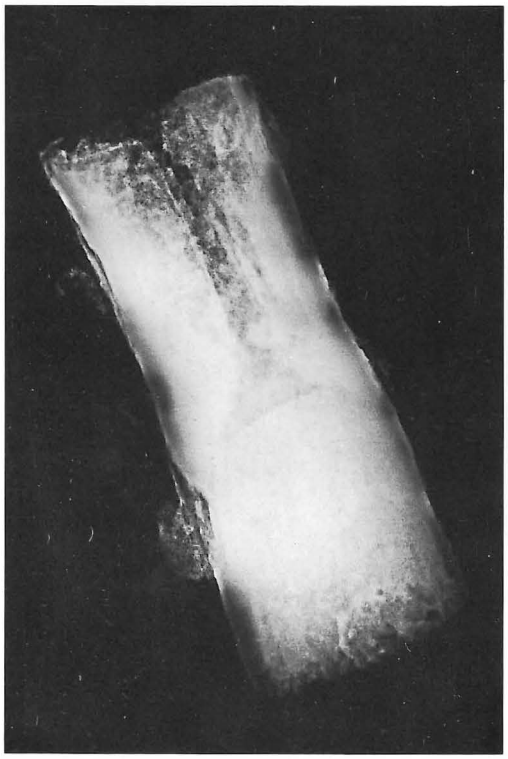

15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
38
39
40
41
42
43

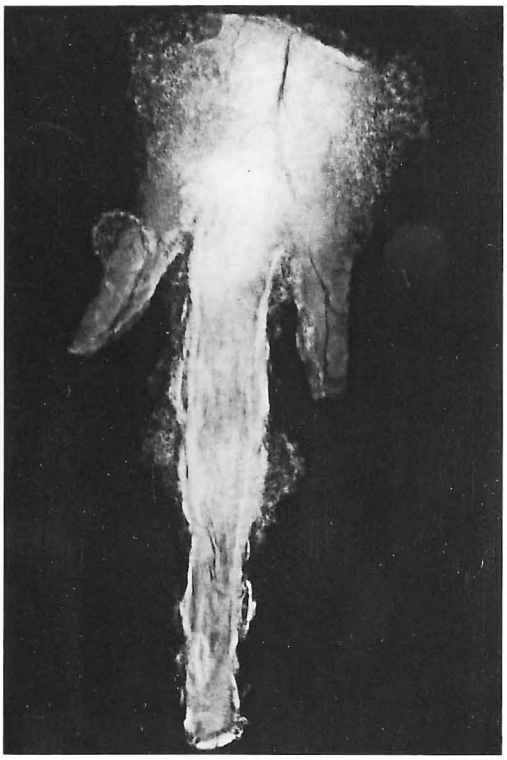
金 属 器 ②

図版26



鎌 2

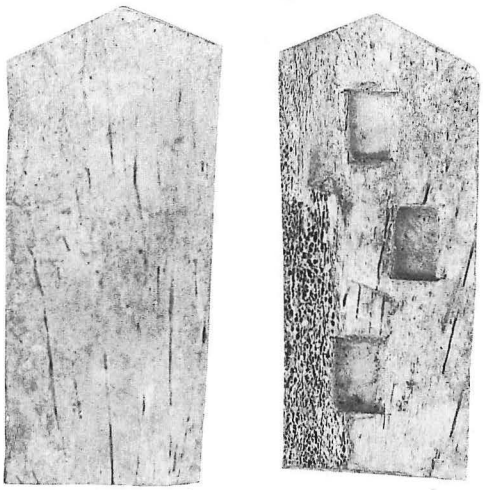




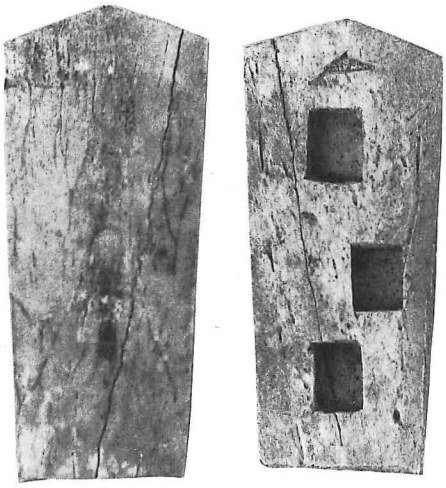
斧 1

Fuji Computed Radiography（CR）画像処理の金属器

銛先 8

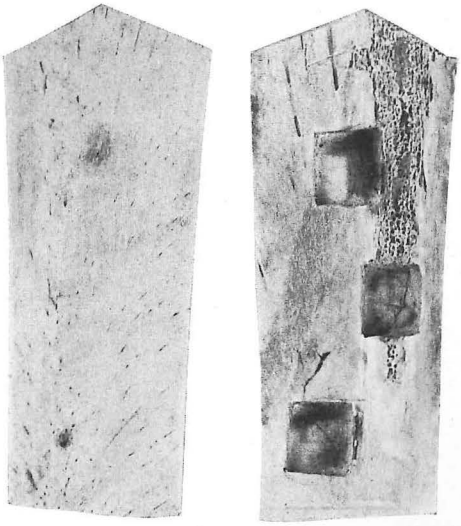


1．寺山家所蔵

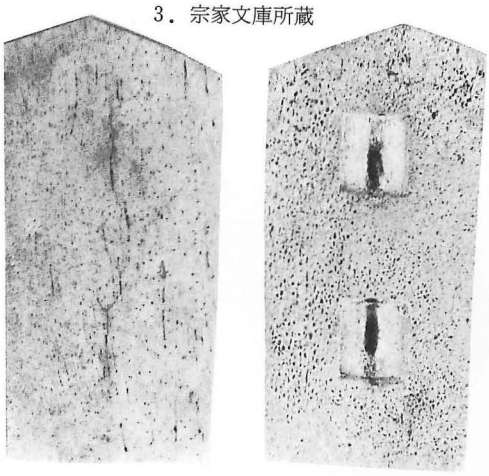


2．寺山家所蔵

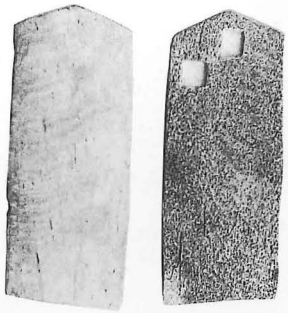
3．宗家文庫所蔵



4．宗家文庫所蔵



5．宗家文庫所蔵



6．長田家所蔵

対馬各地に伝わる亀ト資料（約⅔）（小松勝助氏提供）

勝本町文化財調査報告書第７集
串山ミルメ浦遺跡

平成元年（1989）３月31日発行

発行所　勝本町教育委員会
長崎県壱岐郡勝本町西戸触182-５
〒811-55　☎09204―２―0095

印刷所　昭和堂印刷
長崎県諫早市長野町1007
〒854　☎0957―22―6000